怪人二十面相(江戸川乱歩)

はしがき

がとびきりじょうずなのです。 ちがった顔を持っているといわれていました。つまり、変装いる、ふしぎな盗賊のあだ名です。その賊は二十のまったく「二十面相」というのは、毎日毎日、新聞記事をにぎわしてでもするように、怪人「二十面相」のうわさをしていました。以上の人が顔をあわせさえすれば、まるでお天気のあいさつべとびきりじょうずなのです。

てしまうことができるといいます。無頼漢にも、いや、女にさえも、まったくその人になりきっうです。老人にも若者にも、富豪にも乞食にも、学者にもしも変装とはわからない、まるでちがった人に見えるのだそどんなに明るい場所で、どんなに近よってながめても、少

れるのです。 れほど、たえずちがった顔、ちがった姿で、人の前にあらわはんとうの顔をわすれてしまっているのかもしれません。そほんとうの顔なのだか、だれも知らない。いや、賊自身でも、ほんとうの顔なのだか、だれも知らない。いや、賊自身でも、いるのかというと、それは、だれひとり見たことがありませいるのです。

そういう変装の天才みたいな賊だものですから、警察でも

たらいいのか、まるで見当がつかないからです。こまってしまいました。いったい、どの顔を目あてに捜索し

す。 るまいは、一度もしたことがありません。血がきらいなのですし、それに、人を傷つけたり殺したりする、ざんこくなふ物をぬすむばかりで、現金にはあまり興味を持たないようで美術品だとか、美しくてめずらしくて、ひじょうに高価な品、ただ、せめてものしあわせは、この盗賊は、宝石だとか、

おそろしい賊なのですから。
おそろしい賊なのですから。
はいし、いくら警察へたのんでも、ふせぎようのない、方のも、じつは、こわくてしかたがないからです。
ことに、日本にいくつという貴重な品物を持っている富豪がで見ますと、いくら警察へたのんでも、ふせぎようのない、のがれるためには、何をするかわかったものではありませをのがれるためには、何をするかわかったものではありませるやつのことですから、自分の身があぶないとなれば、それるやつのことですから、自分の身があぶないとなれば、それるやつのことですから。

ても、大胆不敵、傍若無人の怪盗といわねばなりません。ても、大胆不敵、傍若無人の怪盗といわねばなりません。ら用心しても、ちゃんと取ってみせるぞ、おれの腕まえは、くないと心がけているのかもしれません。それともまた、いくないと心がけているのかもしれません。それともまた、いくかこれという貴重な品物をねらいますと、かならず前もっこの「二十面相」には、一つのみょうなくせがありました。

大探偵明智小五郎には、小林芳雄という少年助手がありまをちらす、一騎うちの大闘争の物語です。日本一の名探偵明智小五郎との、力と力、知恵と知恵、火龙このお話は、そういう出没自在、神変ふかしぎの怪賊と、このお話は、そういう出没自在、神変ふかしぎの怪賊と、

す。このかわいらしい小探偵の、リスのようにびんしょうな なかなかの見ものでありましょう。 りま

ことにします。 さて、前おきはこのくらいにして、いよいよ物語にうつる

う の わな

大邸宅があります。 麻布の、とあるやしき町に、 百メートル四方もあるような

のとびらの門をはいると、大きなソテツが、ドッカリと植わが、ズーッと、目もはるかにつづいています。いかめしい鉄 ています。 っていて、そのしげった葉の向こうに、りっぱな玄関が見え 四メートルぐらいもありそうな、高い高いコンクリート塀

でいて、その裏には、 はりつめた、二階建ての大きな洋館とが、かぎの手にならん いく間ともしれぬ、広い日本建てと、黄色い化粧れんがを 公園のように、広くて美しいお庭があ

これは、実業界の大立者、羽柴壮太郎氏の邸宅です。

るのです。

織りまざるようにして、おそいかかっていました。 羽柴家には、今、ひじょうな喜びと、ひじょうな恐怖とが、

> 君が、南洋ボルネオ島から、おとうさんにおわびをするため 喜びというのは、今から十年以前に家出をした、長男の壮一 、日本へ帰ってくることでした。

るさなかったので、とうとう、むだんで家をとびだし、 たりで、南洋の新天地に渡航し、何か壮快な事業をおこした な帆船に便乗して、南洋にわたったのでした。 いと願ったのですが、父の壮太郎氏は、がんとしてそれをゆ 壮一君は生来の冒険児で、中学校を卒業すると、 学友とふ

やっと一人まえの男になったから、おとうさまにおわびに帰 りたい、といってきたのです。 え、とつぜん、ボルネオ島のサンダカンから手紙をよこして、 それから十年間、 。 ゆくえさえわからなかったのですが、つい三ヵ月ほどま 壮一君からはまったくなんのたよりもな

近の写真とが、同封してありました。もう三十歳です。鼻下となんでいて、手紙には、そのゴム林の写真と、壮一君の最 生の弟の壮二君も、大喜びでした。下、関で船をおりて、飛 行機で帰ってくるというので、その日が待ちどおしくてしか にきどったひげをはやして、りっぱな大人になっていました。 壮一君は現在では、サンダカン付近に大きなゴム植林をい おとうさまも、 おかあさまも、妹の早苗さんも、まだ小学

予告状の文面は、 ますのは、ほかならぬ「二十面相」のおそろしい予告状です。 さて、いっぽう羽柴家をおそった、 ひじょうな恐怖といい たがありません。

「余がいかなる人物であるかは、貴下も新聞紙上にてご承

知であろう。

る。モンド六個を、貴家の家宝として、珍蔵せられると確聞すモンド六個を、貴家の家宝として、珍蔵せられると確聞す青下は、かつてロマノフ王家の宝冠をかざりし大ダイヤ

するつもりである。にてゆずりうける決心をした。近日中にちょうだいに参上にてゆずりうける決心をした。近日中にちょうだいに参上余はこのたび、右六個のダイヤモンドを、貴下より無償

正確な日時はおってご通知する。

ことでしょう。

十面相」の怪賊にもせよ、しのびこむなんて、思いもよらぬ

ずいぶんご用心なさるがよかろう。」

そのダイヤモンドというのは、ロシアの帝政没落ののち、というので、おわりに「二十面相」と署名してありました。

ので、価にして二百万円という、貴重な宝物でした。したのが、まわりまわって、日本の羽柴氏に買いとられたもざりの宝石だけをとりはずし、それを、中国商人に売りわたある白系ロシア人が、旧ロマノフ家の宝冠を手に入れて、か

とです。

知りぬいているような文面です。おさまっているのですが、怪盗はそのありかまで、ちゃんとその六個の宝石は、げんに、壮太郎氏の書斎の金庫の中に

いなどまでが、ふるえあがってしまいました。色もかえませんでしたが、夫人をはじめ、お嬢さんも、召使その予告状をうけとると、主人の壮太郎氏は、さすがに顔

して、賊の襲。来にそなえました。あたらしく、猛犬を買いいれるやら、あらゆる手段をめぐらに、さわぎたてて、警察へ出。頭して、保護をねがうやら、ことに羽柴家の支配人近藤老人は、主家の一大事とばかり

秘書と、猛犬と、このげんじゅうな防備の中へ、いくら「二そのうえ壮太郎氏の秘書が三人おります。おまわりさんと、まわりさんが、がんばっていてくれるようにはからいました。だちを交代に呼んでもらい、いつも邸内には、二一三人のおが、近藤支配人は、そのおまわりさんにたのんで、非番の友羽柴家の近所は、おまわりさんの一家が住んでおりました

さて、その壮一君が、羽田空港へつくという日の早朝のこものは、どんなに心じょうぶだかしれません。ほどの快男児ですから、この人さえ帰ってくれたら、家内の徒手空拳、南洋の島へおしわたって、今日の成功をおさめた

よく、庭木の枝や、土蔵の屋根でさえずっています。と静まりかえっていました。早起きのスズメだけが、いせいまだ朝食の用意もできない早朝ですから、邸内はひっそりひとりの少年が、姿をあらわしました。小学生の壮二君です。あかあかと秋の朝日がさしている、羽柴家の土蔵の中から、

の賊が、どこからか洋館の二階の書斎へしのびいり、宝物をれて、どこからが洋館の二階の書をみました。「二十面相」のでしょう。おどろいたのはスズメばかりではありません。の石段を庭へおりてきたのです。いったい、どうしたという何かおそろしげな、鉄製の器械のようなものをだいて、土蔵その早朝、壮二君がタオルのねまき姿で、しかも両手には、

うばいさった夢です。

宝物をぬすむと、いきなり二階の窓をひらいて、まっくらなぶきみに青ざめた、無表情な顔をしていました。そいつが、賊は、おとうさまの居間にかけてあるお能の面のように、

てしかたがありません。した。しかし、なんだか夢と同じことがおこりそうな気がし「ワッ。」といって目がさめると、それはさいわいにも夢で

庭へとびおりたのです。

士二君は、そんなふうこ言ごとんでしまいました。がいない。そして、庭をよこぎって逃げるにちがいない。」「二十面相のやつは、きっと、あの窓から、とびおりるにち

「あの窓の下には花壇がある。花壇がふみあらされるだろう壮二君は、そんなふうに信じこんでしまいました。

なあ。」

えがうかびました。 そこまで空想したとき、壮二君の頭に、ヒョイと奇妙な考

そこに、わなをしかけておけば、賊のやつ、うまくかかるかがおこるとしたら、賊は、あの花壇をよこぎるにちがいない。かけておいてやろう。もし、ぼくの思っているとおりのこと「ウン、そうだ。こいつは名案だ。あの花壇の中へわなをし

あって、それがそのまま土蔵にしまってあるのを、よくおぼ作らせたいといって、アメリカ製の見本を持ってきたことがうさまのお友だちで、山林を経営している人が、鉄のわなを壮二君が思いついたわなというのは、去年でしたか、おともしれないぞ。」

えていたからです。

エッチラオッチラ持ちだしたというわけなのです。起きをして、ソッと土蔵にしのびこんで、大きな鉄の道具を、わなをしかけてみたくなったのです。そこで、いつにない早そんなことを考えるよゆうはありません。ただもう、無性にはたして賊がそれにかかるかどうか、うたがわしい話ですが、広い庭の中に、一つぐらいわなをしかけておいたところで、出二君は、その思いつきにむちゅうになってしまいました。

いものでした。クワクする気持は、ネズミのばあいの、十倍も二十倍も大きクワクする気持は、ネズミのばあいの、十倍も二十倍も大きのです。しかも「二十面相」という希代の怪賊なのです。ワました。しかし、こんどは、相手がネズミではなくて人間なの、なんだかワクワクするような、ゆかいな気持を思いだしの、壮二君は、いつか一度経験した、ネズミとりをかけたとき

集めて、おおいかくしました。えつけたうえ、わなと見えないように、そのへんの枯れ草をついた二つのわくを、力いっぱいグッとひらいて、うまくす鉄わなを花壇のまんなかまで運ぶと、大きなのごぎりめの

たにそんなところへふみこむ者はありません。んですが、花壇のまんなかですから、賊でもなければ、めっくいいってしまうのです。家の人がわなにかかってはたいへまるでまっ黒な、でっかい猛獣の歯のように、賊の足くびに、あいに、たちまちパチンと両方ののごぎりめがあわさって、あいに、たちまちパチンと両方ののごぎりめがあわさって、

こいつに足くびをはさまれて、動けなくなったら、さぞゆか「これでよしと。でも、うまくいくかしら。まんいち、賊が

になるか、読者諸君は、このわなのことを、よく記憶してお それから、ニヤニヤ笑いながら、家の中へはいっていきまし たわなが、のちにいたって、どんな重大な役目をはたすこと というものは、けっしてばかにできません。壮二君のしかけ た。じつに子どもらしい思いつきでした。しかし少年の直感 いだろうなあ。どうかうまくいってくれますように。」 壮二君は、神さまにおいのりするようなかっこうをして、

か魔か

いていただきたいのです。

羽田空港に出むかえました。 その午後には、羽柴一家総動員をして、帰朝の壮一君を、

折り目のただしいズボンが、スーッと長く見えて、映画の中 て、同じ色のダブル・ボタンの背広を、キチンと着こなし、 さっそうたる姿でした。こげ茶色の薄がいとうを小わきにし 飛行機からおりたった壮一君は、予期にたがわず、じつに

びるの細くかりこんだ口ひげが、なんともいえぬなつかしさ ない、日にやけた赤銅色の、でも美しい顔が、にこにこ笑 でした。写真とそっくりです。いや、写真よりいちだんとり たびに見える、よくそろったまっ白な歯、それから、上くち っていました。濃い一文字のまゆ、よく光る大きな目、笑う の西洋人みたいな感じがしました。 同じこげ茶色のソフト帽の下に、帽子の色とあまりちがわ

> げてくるようでした。 を、ジッと見つめていますと、なんだか、うれしさがこみあ さまにはさまれて、自動車にのりました。壮二君は、 走るあいだも、うしろの窓からすいて見えるおにいさまの姿 さまや近藤老人といっしょに、あとの自動車でしたが、車が みんなと握手をかわすと、壮一君は、おとうさま、おかあ おねえ

くしの晩さんが用意されました。 いるうちに、もう夕方でした。食堂には、おかあさまの心づ 帰宅して、一同が、壮一君をとりかこんで、何かと話して

美しい秋の盛り花がかざられ、めいめいの席には、銀のナイ ていました。 つもとちがって、チャンと正式に折りたたんだナプキンが出 フやフォークが、キラキラと光っていました。きょうは、 新しいテーブル・クロスでおおった、大きな食卓の上には、

南洋の話がつぎからつぎと語られました。そのあいだには、 家出以前の、少年時代の思い出話も、さかんにとびだしまし 食事中は、むろん壮一君が談話の中心でした。めずらしい

さま。」 かえして、その手で顔をなすったもんだから、黒んぼうみた きまわしたりしたものだよ。 いつかはインキつぼをひっくり いになってね、大さわぎをしたことがあるよ。ねえ、 たばかりでね、ぼくの勉強部屋へ侵入して、机の上をひっか 「壮二君、きみはその時分、まだあんよができるようになっ おかあ

おかあさまは、そんなことがあったかしらと、よく思いだ

っぱでした。

にこにことうなずいていらっしゃいました。せませんでしたけれど、ただうれしさに、目に涙をうかべて、

まいました。リンの糸が切れでもしたように、プッツリとたちきられてしそろしいできごとのために、じつにとつぜん、まるでバイオところがです、読者諸君、こうした一家の喜びは、あるお

われたのでありました。うかのように、あいつのぶきみな姿が、もうろうと立ちあら会、一生に一度というめでたい席上へ、そのしあわせをのろなんという心なしの悪魔でしょう。親子兄弟十年ぶりの再

あっては、ひらいて見ないわけにはいきません。ってきました。いくら話にむちゅうになっていても、電報と思い出話のさいちゅうへ、秘書が一通の電報を持ってはい

すると、どうしたことか、にわかにムッツリとだまりこんで壮太郎氏は、少し顔をしかめて、その電報を読みましたが、

壮一君が、目ばやくそれを見つけてたずねました。「おとうさま、何かご心配なことでも。」

しまったのです。

ほど用心しないといけない。」させたくないが、こういうものが来るようでは、今夜は、よ「ウン、こまったものがとびこんできた。おまえたちに心配

そういって、お見せになった電報には、

とありました。二〇というのは、「二十面相」の略語にちが二〇」

「この二〇というのは、もしや、二十面相の賊のことではあかっきりに、ぬすみだすぞという、確信にみちた文意です。いありません。「ショウーニジ」は、「正十二時で、午前零時いありません。「ショウーニジ」は、「正

した。 壮一君がハッとしたように、おとうさまを見つめていいま

りませんか。」

「そうだよ。おまえよく知っているね。」

「わしは、おまえがいなくなってから、旧ロシア皇帝の宝冠ね。しかし、あいつは何をほしがっているのです。」の中で新聞も読みました。とうとう、うちをねらったのです「下関上陸以来、たびたびそのうわさを聞きました。飛行機

れをぬすんでみせるというのだ。」をかざっていたダイヤモンドを、手に入れたのだよ。賊はそった。し

かな。」
かな。」
のとつ、おまえとふたりで、宝石の前で、寝ずの番でもするいとつ、おまえとふたりで、宝石の前で、寝ずの番でもするその予告状について、くわしく話して聞かせました。そうして、壮太郎氏は、「二十面相」の賊について、また

わから錠がおろされました。門をはじめ、あらゆる出入り口がピッタリとしめられ、内がなった近藤支配人のさしずで、午後八時というのに、もう表、ちまち、邸内にげんじゅうな警戒がしかれました。青く

.

「今夜だけは、どんなお客さまでも、おことわりするのだぞ。」 老人が召使いたちに厳命しました。

夜を徹して、三人の非番警官と、三人の秘書と、自動車運

内を巡視する手はずでした。 転手とが、手わけをして、各出入り口をかため、あるいは邸

羽柴夫人と早苗さんと壮二君とは、早くから寝室にひきこ

もるようにいいつけられました。

大ぜいの使用人たちは、一つの部屋にあつまって、おびえ

たようにボソボソとささやきあっています。

酒を用意させて、徹夜のかくごです。 になりました。書斎のテーブルには、サンドイッチとぶどう 壮太郎氏と壮一君は、洋館の二階の書斎に籠城すること

や掛け金がかけられました。ほんとうにアリのはいいるすき 書斎のドアや窓にはみな、外がわからあかぬように、 かぎ

まもないわけです。 さて、書斎に腰をおろすと、壮太郎氏が苦笑しながらいい

ました。 「少し用心が大げさすぎたかもしれないね。」

ぎることはありますまい。ぼくはさっきから、新聞のとじこ 「いや、あいつにかかっては、どんな用心だって、大げさす

読めば読むほど、おそろしいやつです。」 みで、『二十面相』の事件を、すっかり研究してみましたが、

だ、賊がやってくるかもしれないというのかね。」 「では、おまえは、 これほどげんじゅうな防備をしても、 ま

壮一君は真剣な顔で、さも不安らしく答えました。

も、ドアを打ちやぶらなくてはならない。そして、わたした ら、大ぜいの人の目をかすめて、たとえここまで来たとして するのです。一 めには、まず、高い塀を乗りこえなければならない。それか 「だが、いったいどこから? ……賊が宝石を手に入れるた 「ええ、おくびょうのようですけれど、なんだかそんな気が

の関門を、どうしてくぐりぬけられるものか。ハハハ……。」るのだよ。 いくら二十面相が魔法使いだって、この四重五重 知らなくては、ひらくことのできない金庫の中にはいってい ちふたりとたたかわなければならない。しかも、それでおし まいじゃないのだ。宝石は、ダイヤルの文字のくみあわせを 壮太郎氏は大きな声で笑うのでした。でも、その笑い声に

度も、まったく不可能としか考えられないようなことを、 るから、大じょうぶだと安心していると、その金庫の背中に、 すやすとなしとげているじゃありませんか。金庫に入れてあ 「しかし、おとうさん、新聞記事で見ますと、あいつはいく

うな男が、見はりをしていても、 飲まされて、かんじんのときには、みんなグッスリ寝こんで ポッカリと大穴があいて、中の品物は、何もかもなくなって いるという実例もあります。それからまた、五人のくっきょ いつのまにか、 ねむり薬を

いたという例もあります。 あいつは、その時とばあいによって、 どんな手段でも考え

だす知恵を持っているのです。」

は、何かしら空虚な、からいばりみたいなひびきがまじって

いました。

口調だね。」「おいおい壮一、おまえ、なんだか、賊を賛美してるような「おいおい壮一、おまえ、なんだか、賊を賛美してるような

この世にできないことはないですからね。」りません。知恵です。知恵の使い方によっては、ほとんど、するほど、おそろしいやつです。あいつの武器は腕力ではあ「いいえ、賛美じゃありません。でも、あいつは研究すれば出太郎氏は、あきれたように、わが子の顔をながめました。

しかめておこう。金庫の裏に穴でもあいていては、たいへんどうやらわしも、少し心配になってきたぞ。ひとつ宝石をた「いや、おまえがあんまり賊を買いかぶっているもんだから、すぎる黒い風に、窓のガラスがコトコトと音をたてました。にふけていき、少し風がたってきたとみえて、サーッと吹きくと子が、そんな議論をしているあいだに、夜はじょじょ

あいだの丸テーブルの上におきました。小箱をかかえて、もとのイスにもどると、それを壮一君との赤銅製の小箱をとりだしました。そして、さもだいじそうに庫に近づき、ダイヤルをまわし、とびらをひらいて、小さな出太郎氏は笑いながら立ちあがって、部屋のすみの小型金

だからね。」

「ぼくは、はじめて拝見するわけですね。」

壮一君が、問題の宝石に好奇心を感じたらしく、目を光ら

小箱のふたがひらかれますと、目もくらむような虹の色がつてロシア皇帝の頭にかがやいたことのあるダイヤだよ。」「ウン、おまえには、はじめてだったね。さあ、これが、かせて言います。

す。 ンドが六個、黒ビロードの台座の上に、かがやいていたのでひらめきました。大豆ほどもある、じつにみごとなダイヤモ

とじられました。 壮一君が、じゅうぶん観賞するのを待って、小箱のふたが

おまえとわしと、四つの目でにらんでいるほうが、たしかだ「この箱は、ここへおくことにしよう。金庫なんかよりは、

からね。」

ブルを中に、じっと、顔を見あわせていました。 ふたりはもう、話すこともなくなって、小箱をのせたテー

「ええ、そのほうがいいでしょう。」

た ときどき、思いだしたように、風が窓のガラス戸を、コト

く鳴きたてる犬の声が聞こえてきます。コトいわせて吹きすぎます。どこか遠くのほうから、はげし

「何時だね。」

かためて、歯をくいしばるようこしています。 じみだしています。壮一君も、ひざの上に、にぎりこぶしを郎氏の顔も、いくらか青ざめて、ひたいにはうっすら汗がにた、だまりこんでしまいました。見ると、さすが豪胆な壮太た一君が腕時計を見て答えると、それっきり、ふたりはま「十一時四十三分です。あと、十七分……。」

るほど、部屋のなかはしずまりかえっていました。 ふたりの息づかいや、腕時計の秒をきざむ音までが聞こえかためて、歯をくいしばるようにしています。

めと十分です。|

をコトコト走っていくのが、ふたりの目のすみにうつりまし するとそのとき、何か小さな白いものが、じゅうたんの上

た。おやっ、はつかネズミかしら。

ました。白いものは、どうやら机の下へかくれたらしく見え 壮太郎氏は思わずギョッとして、うしろの机の下をのぞき

どうしてころがってきたんだろう。」 「なあんだ、ピンポンの玉じゃないか。だが、こんなものが、



れておいたのが、何かのはずみで落ちたのじゃありません 「おかしいですね。壮二君が、そのへんの棚の上におきわす 机の下からそれを拾いとって、ふしぎそうにながめました。

「そうかもしれない……。だが時間は?」 壮太郎氏の時間をたずねる回数が、だんだんひんぱんにな

> ってくるのです。 一あと四分です。」

ふたりは目と目を見あわせました。秒をきざむ音がこわい

ようでした。

来て、じっと耳をすましているかもしれません。 下を歩いているかもしれません……。いや、もうドアの外に 二十面相はもう塀を乗りこえたかもしれません。今ごろは廊 三分、二分、一分、ジリジリと、その時がせまってきます。

ああ、今にも、今にも、おそろしい音をたてて、ドアが破壊

されるのではないでしょうか。 「おとうさん、どうかなすったのですか。」

「いや、いや、なんでもない。わしは二十面相なんかに負け

やしない。」

両手でひたいをおさえているのです。 そうはいうものの、壮太郎氏は、もうまっさおになって、

息づまるようなおそろしい秒時が、すぎさっていきました。 三十秒、二十秒、十秒と、ふたりの心臓の鼓動をあわせて、

「おい、時間は?」 壮太郎氏の、うめくような声がたずねます。

「十二時一分すぎです。」

十面相の予告状も、あてにならんじゃないか。宝石はここに 「なに、 一分すぎた? ……アハハハ……、どうだ壮一、二

ちゃんとあるぞ。なんの異状もないぞ。」 大声に笑いました。

かし壮一君はニッコリともしません。

壮太郎氏は、勝ちほこった気持で、

しょうか。二十面相は違約なんかする男でしょうか。」 「ぼくは信じられません。宝石には、はたして異状がないで

「なにをいっているんだ。宝石は目の前にあるじゃないか。」

「でも、それは箱です。」

がどうかしたとでもいうのか。」 「すると、おまえは、箱だけがあって、中身のダイヤモンド

「たしかめてみたいのです。たしかめるまでは安心できませ

せんでした。 ほとんど一分のあいだ、何か異様ににらみあったまま動きま さえつけました。壮一君も立ちあがりました。ふたりの目が、 壮太郎氏は思わずたちあがって、赤銅の小箱を、両手でお

「じゃ、あけてみよう。そんなばかなことがあるはずはない。」 パチンと小箱のふたがひらかれたのです。

と、同時に壮太郎氏の口から

「アッ。」というさけび声が、ほとばしりました。 ないのです。黒ビロードの台座の上は、まったくからっぽ

でもしたように消えうせていたのでした。 なのです。由緒深い二百万円のダイヤモンドは、 まるで蒸発

魔法使い

顔を、見あわせるばかりでしたが、やっと壮太郎氏は、 しばらくのあいだ、ふたりともだまりこくって、青ざめた さも

いまいましそうに、

「ふしぎだ。」

と、つぶやきました。 「ふしぎですね。」

壮一君も、おうむがえしに同じことをつぶやきました。し

心配したりしているようすがありません。くちびるのすみに、 かし、みょうなことに、壮一君は、いっこうおどろいたり、 なんだかうす笑いのかげさえ見えます。

ば、このわしの目にうつらぬはずはない。まさか、賊は幽霊 「戸じまりに異状はないし、それに、だれかがはいってくれ

からね。」 のように、ドアのかぎ穴から出はいりしたわけではなかろう

できますまい。」 「そうですとも、いくら二十面相でも、 幽霊に化けることは

ができたものは、わしとおまえのほかにはないのだ。」 「すると、この部屋にいて、ダイヤモンドに手をふれること -10-

顔を見つめました。 壮太郎氏は、何かうたがわしげな表情で、じっとわが子の

「そうです。あなたかぼくのほかにはありません。」 壮一君のうす笑いがだんだんはっきりして、にこにこと笑

いはじめたのです。

「おい、壮一、おまえ何を笑っているのだ。 何がおかしいの

えらいですなあ。ちゃんと約束を守ったじゃありませんか。 「ぼくは賊の手なみに感心しているのですよ。 彼はやっぱり 壮太郎氏はハッとしたように、顔色をかえてどなりました。

んか。」 十重二十重の警戒を、もののみごとに突破したじゃありませ

「そうですよ。あなたがそうして、うろたえているようすが、り、賊に出しぬかれたわしの顔がおかしいとでもいうのか。」「こら、よさんか。おまえはまた賊をほめあげている。つま

じつにゆかいなんですよ。」

すこではなく、何かしら、えたいのしれない人間に見えてきそして、今、目の前にニヤニヤ笑っている青年が、自分のむ壮太郎氏はおこるよりも、あっけにとられてしまいました。ああ、これが子たるものの父にたいすることばでしょうか。

「壮一、そこを動くんじゃないぞ。」

ました。

呼びりんをおすために、部屋の一方の壁に近づこうとしまし壮太郎氏は、こわい顔をしてむすこをにらみつけながら、

ではありませんか。顔はやっぱりニヤニヤと笑っているのでひくくわきにあてて、じっとおとうさんにねらいをさだめたして、ポケットから小型のピストルをとりだすと、その手をおどろいたことには、子が父を羽柴さんと呼びました。そ「羽柴さん、あなたこそ動いてはいけませんね。」

なくなりました。 壮太郎氏は、ピストルを見ると、立ちすくんだまま、動け

す。

かまわず引き金をひきますよ。」「人を呼んではいけません。声をおたてになれば、ぼくは、

「きさまはいったい何者だ。もしや……。」

す。」 お察しのとおり、あなた方が二十面相と呼んでいる盗賊でお察しのとおり、あなた方が二十面相と呼んでいる盗賊でなさい。ぼくは、あなたのむすこの壮一君じゃありません。「ハハハ……、やっとおわかりになったようですね。ご安心「ハハハ……、やっとおわかりになったようですね。ご安心

だれの写真なのだ。のボルネオ島からの手紙は、だれが書いたのだ。あの写真はた。どうしても、とけないなぞがあったからです。では、あ壮太郎氏はお化けでも見るように、相手の顔を見つめまし

、。 イヤモンドをちょうだいしたお礼に、種明しをしましょうでもできないことを、実行してみせるのです。羽柴さん、ダ「ハハハ……、二十面相は童話の中の魔法使いです。だれに

「ぼくは、壮一君のゆくえ不明になっていることをさぐりだしました。怪青年は身の危険を知らぬように、落ちつきはらって説明

彼はそういって、自分のほおをピタピタとたたいてみせま想像して、まあ、こんな顔をつくりあげたのです。」十年のあいだに、壮一君がどんな顔にかわるかということをしました。同君の家出以前の写真も手に入れました。そして、「ほくは、壮一君のはくえ不明になっていることをさぐりた

「ですから、あの写真は、ほかでもない、このぼくの写真なした。

たあてに郵送させたわけですよ。お気のどくですが、壮一君るぼくの友だちに、あの手紙と写真を送って、そこからあなのです。手紙もぼくが書きました。そして、ボルネオ島にい

-1

の二十面相のしくんだお芝居ですよ。」ないのです。あれはすっかり、はじめからおしまいまで、こはいまだにゆくえ不明なのです。ボルネオ島なんかにいやし

かったのでした。おそろしいカラクリがあろうとは、まったく思いもおよばない長男が帰ったという喜びに、とりのぼせて、そこにこんな羽柴一家の人々は、おとうさまもおかあさまも、なつかし

す。

「ぼくは忍術 使いです。」

ら。」 こ十面相は、さも、とくいらしくつづけました。 二十面相は、さも、とくいらしくつづけました。 にはすりだしたのですよ。あなたは、少しのあいだ玉に気 をとられていました。机の下をのぞきこんだりしました。そ をとられていました。あれはぼくがポケットからじゅうたんの にほうりだしたのですよ。あなたは、少しのあいだ玉に気 といりますか。ホラ、さっきのピンポンの玉です。あれが

ッとドアをひらくと、廊下へとびだしました。左手で、かぎ穴にはめたままになっていたかぎをまわし、サ賊はピストルをかまえながら、あとずさりをしていって、

ろしました。

はずして、ガラス戸をひらき、ヒラリと窓わくにまたがった廊下には、庭にめんして窓があります。賊はその掛け金を

といいながら、ピストルを部屋の中へ投げこんで、そのままなんてしませんよ。」「これ、壮二君のおもちゃにあげてください。ぼくは人殺しかと思うと、

壮太郎氏は、またしても出しぬかれました。姿を消してしまいました。二階から庭へととびおりたのです。

ゃのピストルにおびえて、人を呼ぶこともできなかったのでピストルはおもちゃだったのです。さいぜんから、おもち

いうのは、少年壮二君が、夢にみたあの窓です。その下には、しかし、読者諸君はご記憶でしょう。賊のとびおりた窓と

ではありますまいか。した。すると、もしかしたら、あのわなも何かの役にたつのした。すると、もしかしたら、あのわなも何かの役にたつのひらいて、えものをまちかまえているはずです。夢は正夢で壮二君がしかけておいた鉄のわなが、のこぎりのような口を

ああ、もしかしたら!

池の中

壮太郎氏はすぐさま、窓のところへかけつけ、暗い庭を見お賊がピストルを投げだして、外へとびおりたのを見ると、

ありません。のような、電燈がついているので、人の姿が見えぬほどではいといっても、庭には、ところどころに、公園の常夜燈

した。ところが、案のじょう、彼は例の花壇へとびこんだのすぐムクムクとおきあがって、ひじょうな勢いでかけだしま」、大はとびおりたひょうしに、一度たおれたようすですが、

です。そして、二一三歩花壇の中を走ったかと思うと、たち

まち、ガチャンというはげしい金属の音がして、 賊の黒い影

「だれかいないか。賊だ。賊だ。庭へまわれ。」

もんどり打ってたおれました。

壮太郎氏が大声にどなりました

っていたことでしょう。壮二君の子どもらしい思いつきが、 もし、わながなかったら、すばやい賊は、とっくに逃げさ

ぐうぜん功を奏したのです。賊が、わなをはずそうともがい ているあいだに、四ほうから人々がかけつけました。背広服

のおまわりさんたち、秘書たち、それから運転手、総勢七人

です。 の窓から、電燈を庭に向けて、捕り物の手だすけをしました。 壮太郎氏もいそいで階段をおり、近藤老人とともに、階下

ジョンが加勢してくれたら、まんいちにも、賊をとりにがす ョンが、このさわぎに姿をあらわさないことでした。もし、 ただみょうに思われたのは、せっかく買いいれた猛犬のジ

ようなことはなかったでしょうに。

は、手に手に懐中電燈を持った追っ手の人たちが、もう十メ ートルの間近にせまっていました。それもいっぽうからでは 二十面相が、やっとわなをはずして、起きあがったときに

突破して、庭の奥へと走りこみました。 ったほうがいいかもしれません。追っ手の円陣のいっぽうを賊は黒い風のように走りました。いや、弾丸のようにとい

なくて、右からも、左からも、正面からもです。

のような木立ちがあります。暗さは暗し、七人の追っ手でも、 庭は公園のように広いのです。築山があり、池があり、森

> けっして、じゅうぶんとはいえません。 ああ、

こんなとき、

ジョンさえいてくれたら…

上のしげみの中へかけあがったと見ると、平地を走って、築 は、捕り物にかけては、腕におぼえの人々です。賊が築山の はさみうちにしようというわけです。 山の向こうがわへ先まわりをしました。あとからの追っ手と、 しかし、追っ手は必死でした。ことに三人のおまわりさん

すべはないのです。 トルもあって、はしごでも持ちださないかぎり、乗りこえる ん。それに、庭をとりまいたコンクリート塀は、高さ四メー こうしておけば、賊は塀の外へ逃げだすわけにはいきませ

「アッ、ここだっ、賊はここにいるぞ。」

げみは昼のように明るくなりました。その光の中を、賊は背 中をまるくして、築山の右手の森のような木立ちへと、まり 懐中電燈の丸い光が、四ほうからそこへ集中されます。し 秘書のひとりが、築山の上のしげみのなかでさけびました。

のようにかけおります。

「逃がすなっ、山をおりたぞ。」

美しく走るのです。 そして、大木の木立ちのなかを、 懐中電燈がチロチロと、

たくみなために、相手の背中を目の前に見ながら、どうして もとらえることができません。 庭がひじょうに広く、樹木や岩石が多いのと、賊の逃走が

から、数名の警官がかけつけ、ただちに塀の外をかためまし そうしているうちに、電話の急報によって、近くの警察署

た。賊はいよいよ袋のネズミです。

賊の姿を見うしなってしまいました。 だつつがつづきましたが、そのうちに、追っ手たちは、ふと 邸内では、それからまたしばらくのあいだ、おそろしい鬼

本、枝の上まで照らして見ましたけれど、どこにも賊の姿はれがとつぜん、消えうせてしまったのです。木立ちを一本一にして、チラチラと見えたりかくれたりしていたのです。そ賊はすぐ前を走っていたのです。大きな木の幹をぬうよう

ないのです。

物をながめているのですから、そちらへ逃げるわけにもいきをはじめ、お手伝いさんたちまでが、縁がわに出て庭の捕りかと庭を照らしているうえに、壮太郎氏、近藤老人、壮二君もちろん、日本座敷も雨戸がひらかれ、家中の電燈があかあ塀外には警官の見はりがあります。建物のほうは、洋館は

賊は庭園のどこかに、身をひそめているにちがいないのでません。

忍術を使ったのではないでしょうか。

を発見することができないのです。二十面相はまたしても、す。それでいて、七人のものが、いくらさがしても、その姿

もだいじょうぶだというのです。ゅうにしておけば、賊は袋のネズミですから、朝まで待ってないと一決しました。表門と裏門と塀外の見はりさえげんじけっきょく、夜の明けるのを待って、さがしなおすほかは

庭をひきあげたのですが、ただひとり、松野という自動車のそこで、追っ手の人々は、邸外の警官隊を助けるために、

運転手だけが、まだ庭の奥にのこっていました。

ふとみょうなものに気づいたのです。野運転手は人々におくれて、その池の岸を歩いていたとき、乗のような木立ちにかこまれて、大きな池があります。松

みょうに動揺しているのです。す。風のせいではありません。波もないのに、竹ぎれだけが、ぎれが、少しばかり首を出して、ユラユラと動いているのでぱいういていましたが、その落ち葉のあいだから、一本の竹懐中電燈に照らしだされた池の水ぎわには、落ち葉がいっ

す。れほどの確信はありません。あんまり信じがたいことなのでれほどの確信はありません。あんまり信じがたいことなのでみんなを呼びかえそうかしらと思ったほどです。しかし、そ松野の頭に、あるひじょうにとっぴな考えが浮かびました。

じめたのです。て、おそろしいうたがいをはらすために、みょうなことをはて、おそろしいうたがいをはらすために、みょうなことをはている。のでは電燈を照らしたまま、池の岸にしゃがみました。そしず

すると、ふしぎなことがおこったのです。うすい紙きれが、て、ソッと池の中の竹ぎれの上に持っていきました。ポケットをさぐって、鼻紙をとりだすと、それを細くさい

出たりはいったりしているにちがいありません。んか。紙がそんなふうに動くからには、竹の筒から、空気が竹の筒の先で、ふわふわと上下に動きはじめたではありませ

ょう。命のない竹ぎれが、呼吸をするはずはないではありまなれないのです。でも、このたしかなしょうこをどうしましまさかそんなことがと、松野は、自分の想像を信じる気に

せんか。

はありません。ことに二十面相の怪物は、みずから魔術師と まえにも申しましたとおり、秋の十月、それほど寒い気候で 冬ならば、ちょっと考えられないことです。しかしそれは、

称しているほど、とっぴな冒険がすきなのです。

彼は手がらをひとりじめにしたかったのでしょう。他人の力 を借りないで、そのうたがいをはらしてみようと思いました。 彼は電燈を地面におくと、いきなり両手をのばして、 松野はそのとき、みんなを呼べばよかったのです。でも、 竹ぎ

れをつかみ、ぐいぐいと引きあげました。 竹ぎれは三十センチほどの長さでした。たぶん壮二君が庭

竹ばかりではなかったのです。竹の先には池のどろでまっ黒 ぱると、竹はなんなくズルズルとのびてきました。しかし、 で遊んでいて、そのへんにすてておいたものでしょう。 。 引っ

になった、海坊主のような人の姿が、ニューッとあらわれたいや、手ばかりではありません。手のつぎには、びしょぬれ ではありませんか。 になった人間の手が、しがみついていたではありませんか。

く読者諸君のご想像にまかせます。 それから、池の岸で、どんなことがおこったかは、 しばら

かったように、同じ池の岸に立っておりました。少し息づか 五一六分ののちには、 以前の松野運転手が、なにごともな

いがはげしいようです。そのほかにはかわったところも見え

ません。

きながら、ぐんぐん庭をよこぎって、表門までやってきまし のでしょう。少しびっこをひいています。でも、びっこをひ 彼は、いそいで母屋のほうへ歩きはじめました。どうした

ものものしく見はり番をつとめています。 表門には、ふたりの秘書が、木刀のようなものを持って、

てて、 松野はその前まで行くと、何か苦しそうにひたいに手をあ

ませてもらうよ。」 「ぼくは寒気がしてしようがない。熱があるようだ。少し休

と、力のない声でいうのです。

がひきうけるから。」 「ああ、松野君か、いいとも、 休みたまえ。ここはぼくたち -15-

秘書のひとりが元気よく答えました。

るのです。 へ姿を消しました。そのガレージの裏がわに、 松野運転手は、あいさつをして、玄関わきのガレージの中 彼の部屋があ

表門も裏門も、だれも通過したものはありません。 それから朝までは、べつだんのこともなくすぎさりました。

かげには出あいませんでした。 塀外の見はりをしていたおまわりさんたちも、賊らしい人

らべをはじめました。そして、取りしらべがすむまで、家の 七時には、警視庁から大ぜいの係官が来て、 邸内 の取りし

校五年生の壮二君とは、時間が来ると、いつものように、自がありません。門脇中学校三年生の早苗さんと、高千穂小学者はいっさい外出を禁じられたのですが、学生だけはしかた

動車でやしきを出ました。

ないというので、おして運転席についたのです。うなだれてばかりいましたが、でも、学校がおくれてはいけ運転手はまだ元気のないようすで、あまり口かずもきかず、

場の書斎で面会して、事件のてんまつをくわしく聞きとった警視庁の中村捜査係長は、まず主人の壮太郎氏と、犯罪現

うえ、ひととおり邸内の人々を取りしらべてから、庭園の捜

索にとりかかりました。

りません。この点は、じゅうぶん信用していただいていいとを出たものはひとりもありません。塀を乗りこしたものもあ「ゆうべ私たちがかけつけましてから、ただ今まで、やしき

「そうです。そうとしか考えられません。しかし、けさ夜明「すると、賊はまだ邸内に潜伏しているというのですね。」所轄警察署の主任刑事が、中村係長に断言しました。思います。」

は……。」 ころ、なんの発見もありません。ただ、犬の死がいのほかにけから、また捜索をはじめさせているのですが、今までのと

「エ、犬の死がいだって?」

しらべてみますと、ここのむすこさんに化けた二十面相のやっていたのですが、それがゆうべのうちに毒死していました。「ここの家では、賊にそなえるために、ジョンという犬を飼

中村係長と主任刑事も、声を目あてに走りだしました。 中村係長と主任刑事も、声を目あてに走りだしました。 では、もう一度庭をさがしてみましょう。ずいぶん広い庭「では、もう一度庭をさがしてみましょう。ずいぶん広い庭「ちょっと来てください。発見しました。賊を発見しました。」 そのさけび声とともに、庭のあちこちから、あわただしいるから、どこに、どんなかくれ場所があるかもしれない。」 こうから、とんきょうなさけび声が聞こえてきました。 でおっと来てください。発見しました。 財を発見しました。 かけでは、もう一度庭をさがしてみましょう。 ずいぶん広い庭でが、 きのうの夕方、庭に出てその犬に何かたべさせていたつが、きのうの夕方、庭に出てその犬に何かたべさせていた

シイの木は、根もとから三メートルほどのところで、二まおぼえがあります。」「あれです。あすこにいるのは、たしかに賊です。洋服に見立って、しきりと上のほうを指さしているのです。

こんなにさわいでも、にげだそうともせぬところをみると、してよこたわっていました。げった枝にかくれて、ひとりの人間が、みょうなかっこうをたにわかれているのですが、そのまたになったところに、し

の上で、居眠りをしているのではありますまい。(それとも、気をうしなっているのでしょうか。まさか、木賊は息絶えているのでしょうか。)

彼は森のような木立ちの中の、一本の大きなシイの木の下に、

行ってみますと、声のぬしは羽柴氏の秘書のひとりでした。

「だれか、あいつを引きおろしてくれたまえ。」

おろされました。 もの、下から受けとめるもの、三一四人の力で、賊は地上に 係長の命令に、さっそくはしごが運ばれて、それにのぼる

「おや、しばられているじゃないか。」

ばられています。そのうえさるぐつわです。 いかにも、細い絹ひものようなもので、ぐるぐる巻きにし

が雨にでもあったように、グッショリぬれているのです。 たく、くくってあります。それから、みょうなことに、洋服 「ちくしょうめ、ちくしょうめ。<u>」</u> 大きなハンカチを口の中へおしこんで、別のハンカチでか さるぐつわをとってやると、男はやっと元気づいたように、

と、うなりました。

「アッ、きみは松野君じゃないか。」

秘書がびっくりしてさけびました。

手の松野にちがいありません。 いましたけれど、顔はまったくちがうのです。おかかえ運転 それは二十面相ではなかったのです。二十面相の服を着て

校へ送るために、出かけたばかりではありませんか。その松 でも、運転手といえば、さいぜん、早苗さんと壮二君を学

「きみは、いったいどうしたんだ。」

野が、どうしてここにいるのでしょう。

係長がたずねますと、松野は

と、くやしそうにさけぶのでした。 「ちくしょうめ、やられたんです。あいつにやられたんです。」

壮二君のゆくえ

らまし、大ぜいの見ている中をやすやすと逃げさったことが ぎのようなとっぴな手段によって、まんまと追っ手の目をく わかりました。 松野の語ったところによりますと、けっきょく、賊は、つ

追っ手の立ちさるのを待っていたのでした。 あて、いっぽうのはしを水面に出し、しずかに呼吸をして、 ものですから、それを持って池の中へはいり、竹の筒を口に もちゃにして、すてておいた、節のない竹ぎれが落ちていた 水の中にもぐってしまったのです。でも、ただもぐっていた のでは呼吸ができませんが、ちょうどそのへんに壮二君がお 人々に追いまわされている間に、賊は庭の池にとびこんで、

ました。 みを感づいたのです。思いきって竹ぎれをひっぱってみます と、はたして、池の中からどろまみれの人間があらわれてき わしていた松野運転手が、その竹ぎれを発見し、 ところが、人々のあとに残って、ひとりでそのへんを見ま 賊のたくら

られたというしだいでした。 して、服をとりかえられたうえ、高い木のまたへかつぎあげ 組みふせられ、賊がちゃんとポケットに用意していた絹ひも な松野は救いをもとめるひまもなく、たちまち、賊のために でしばりあげられ、さるぐつわをされてしまったのです。そ そこで、やみの中の格闘がはじまったのですが、気のどく

おとうさまおかあさまのご心配は、くどくど、説明するまで動車で、どこかへ行ってしまったのです。人々のおどろき、さん坊ちゃんが、人もあろうに、二十面相自身の運転する自運転手は、いよいよにせ者ときまりました。たいせつなお嬢そうわかってみますと、壮二君たちを学校へ送っていった

あいい。 はいなかったのだなと、大安心をして、四話がいけられました。 では、対して、では、対はべつに誘かいするつもりでは とがわかりました。では、対はべつに誘かいするつもりでは とがわかりました。では、対はべつに誘かいするつもりでは とがわかりました。では、対はべつに誘かいするつもりでは とがわかりました。では、対はべつに誘かいするつもりでは とがわかりました。では、対はべつに誘かいするつもりでは とがわかりました。では、対はべつに誘かいするしれました。 もしれません。

車の型や番号はわかっているのですから、手がかりはじゅう柴家の自動車をさがしだす手配をとりました。さいわい自動このことを警視庁に報告し、東京全都に非常線をはって、羽さあ、大さわぎになりました。中村捜査係長は、ただちに

壮二君の消息は、いつまでもわかりませんでした。時間、二時間、三時間、時はようしゃなくたっていくのに、話をかけて、その後のようすをたずねさせていましたが、一壮太郎氏は、ほとんど三十分ごとに、学校と警視庁とへ電

ぶんあるわけです。

みようなことといいごと思いて。れた背広に鳥打ち帽の青年が、羽柴家の玄関にあらわれて、ところが、その日のお昼すぎになって、ひとりのうすよご

みょうなことをいいだしました。

こが書が、そのことを奥へ報告する。それっというので、主ておきましたから、しらべて受けとってほしいんですがね。」たのまれて自動車を運んできたのですよ。車は門の中へ入れて転手さんが、なんだか途中できゅうに私用ができたとかで、「あたしは、おたくの運転手さんにたのまれたんですがね。

こ ぱり誘かいされてしまったのです。 ません。しかし、中にはだれもいないのです。壮二君はやっへ をしらべてみますと、たしかに羽柴家の自動車にちがいありゅ 人の壮太郎氏や支配人の近藤老人が、玄関へかけだして、車

「おや、こんなみょうな封筒が落ちていますよ。」

く書いてあるばかり、裏を見ても、差出人の名はありません。拾いあげました。その表には「羽柴壮太郎殿必親展」と大き近藤老人が、自動車のクッションの上から、一通の封書を

「なんだろう。」

ったのです。と、そこには左のようなおそろしいことばが書きつらねてあと、壮太郎氏が封をひらいて、庭に立ったまま読んでみます

つに保存します。 えって、見れば見るほどみごとな宝石、家宝としてたいせ 昨夜はダイヤ六個たしかにちょうだいしました。持ちか

しかし、お礼はお礼として、少しおうらみがあるのです。

う権利があります。そのためにご子息壮二君を人質として間の傷をおわせたことです。ぼくは損害を賠 償してもら何者かが庭にわなをしかけておいて、ぼくの足に全治十日

つれてかえりました。

は当然ではありますまいか。のろわしいわなをしかけた本人です。これくらいのむくい暗やみの中でシクシク泣いております。壮二君こそ、あの壮二君は今、拙宅のつめたい地下室にとじこめられて、

の観世音像を要求します。ところで、損害の賠償ですが、それには、ぼくはご所蔵ところで、損害の賠償ですが、それには、ぼくはご所蔵

ればならないと、かたく決心したのです。 でき、どうあっても、この仏像だけはちょうだいしなけがありましたが、いかにも国宝にしたいほどのもの、美術があの観世音像は、鎌倉期の彫刻、安阿弥の作と説明書きるのですが、そのりっぱさにおどろきいりました。中でにはくは昨日、はからずも貴家の美術室を拝見する光栄を

このことを警察に知らせてはなりません。また部下のト東は二十面相の名にかけてまちがいありません。 つんで運びさる予定になっております。人質の壮二君は、のです。彼らは観世音像だけを荷づくりして、トラックにに参上しますから、だまって美術室に通していただきたい ついては、今夜正十時、ぼくの部下のもの三名が、貴家

ラックのあとをつけさせてはいけません。もしそういうこ

ることにいたします。 あけはなっておいてください。それを目じるしに参 上すすが、念のためご承諾のせつは、今夜だけ十時まで正門をださい。この申し出はかならずご承諾を得るものと信じまとがあれば、壮二君は永久に帰らないものとおぼしめしく

二十面相より

ように思われます。んながら、このむちゃな申し出に応ずるほかに手立てはないない人質をとられては、どうすることもできません。ざんねしをにぎってくやしがりましたが、壮二君というかけがえのなんという虫のよい要求でしょう。壮太郎氏はじめ、こぶ

礼をもらってたのまれただけで、賊のことは何も知りませんて、じゅうぶん詮議しましたけれど、彼はただ、いくらかおなお、賊にたのまれて自動車を運転してきた青年をとらえ

少年拐:

いのです。十時といえば、八一九時間しかありません。処置の相談がひらかれました。もうぐずぐずしてはいられなて帰ってきた早苗さんもくわわって、奥まった部屋に、善後藤老人、それに、学校の用務員さんに送られて、車をとばし青年運転手を帰すと、ただちに、主人の壮太郎氏夫妻、近

賊の手などにわたしては、日本の美術界のためにすまない。 は、どうも手ばなしたくないのだ。ああいう国宝級の名作を、 手にはいるのだからね。しかし、あの観世音像だけは、 「ほかのものならばかまわない。ダイヤなぞお金さえ出せば

わしの私有物ではないと思っているくらいだからね。」 あの彫刻は、この家の美術室におさめてあるけど、けっして んでした。しかし、羽柴夫人は、そうはいきません。かわい 壮太郎氏は、さすがにわが子のことばかり考えてはいませ

そうな壮二君のことでいっぱいなのです。 あうかわからないじゃございませんか。いくらたいせつな美 「でも、仏像をわたすまいとすれば、あの子が、どんなめに

ださいませ。」 警察などへおっしゃらないで、賊の申し出に応じてやってく 術品でも、人間の命にはかえられないとぞんじます。どうか

とりもどしてほしいのです。 地下室に、ひとりぼっちで泣きじゃくっている壮二君の姿が、 のです。たったいまでも、仏像とひきかえに、早く壮二君を まざまざとうかんでいました。今晩の十時さえ待ちどおしい おかあさまのまぶたの裏には、どこともしれぬまっくらな

だ。近藤君、何か方法はないものだろうか。」 おめおめ賊にわたすのかと思うと、ざんねんでたまらないの ダイヤを取られたうえに、あのかけがえのない美術品まで、 「ウン、壮二をとりもどすのはむろんのことだが、しかし、

らだってしまいましょうから、賊の手紙のことは今晩十時ま

「そうでございますね。警察に知らせたら、たちまち事があ

私立探偵ならば……。 では、外へもれないようにしておかねばなりません。しかし、

老人が、ふと一案を持ちだしました。

「ウン、私立探偵というものがあるね。しかし、

個人の探偵

などにこの大事件がこなせるかしらん。」

探偵がいると申すことでございますが。」 「聞くところによりますと、なんでも東京にひとり、えらい

口をはさみました。 老人が首をかしげているのを見て、早苗さんが、とつぜん

「おとうさま、それは明智小五郎探偵よ。あの人ならば、警

名探偵ですわ。」 察でさじを投げた事件を、 いくつも解決したっていうほどの

い男だそうで、二十面相とはかっこうの取り組みでございま 「そうそう、その明智小五郎という人物でした。じつにえら

しょうて。」

をそっと呼んで、ひとつ相談してみることにしようか。専門 家には、われわれに想像のおよばない名案があるかもしれ 「ウン、その名はわしも聞いたことがある。では、その探偵

とに話がきまったのでした。 そして、けっきょく、明智小五郎にこの事件を依頼するこ

で、こんな返事が聞こえてきました。 に電話をかけました。すると、電話口から、子どもらしい声 さっそく、近藤老人が、電話帳をしらべて、明智探偵の宅

「先生はいま、ある重大な事件のために、外国へ出張中です

れば、すぐおうかがいいたします。」 つとめている小林という助手がおりますから、その人でよけ から、いつお帰りともわかりません。しかし、 先生の代理を

助手の方ではどうも……。」 「ああ、そうですか。だが、ひじょうな難事件ですからねえ。

かぶせるように、元気のよい声がひびいてきました。 近藤支配人がちゅうちょしていますと、先方からは、 おっ

がいしてみることにいたしましょう。」 ぶんご信頼なすっていいと思います。ともかく、一度おうか 「助手といっても、先生におとらぬ腕ききなんです。じゅう

伝えください。ただ、おことわりしておきますが、事件をご 「そうですか。では、すぐにひとつご足労くださるようにお

生命に関することなのです。じゅうぶんご注意のうえ、だれ 依頼したことが、相手方に知れてはたいへんなのです。

「それは、おっしゃるまでもなく、よくこころえております。」 にもさとられぬよう、こっそりとおたずねください。」 そういう問答があって、いよいよ小林という名探偵がやっ

かわいらしい少年が、羽柴家の玄関に立って、案内をこいま 電話が切れて、十分もたったかと思われたころ、ひとりの その少年は

てくることになりました。

した。秘書が取りつぎに出ますと、

「ぼくは壮二君のお友だちです。」

と答えると、少年は、さもあらんという顔つきで、 「壮二さんはいらっしゃいませんが。」

> さんにちょっと会わせてください。ぼくのおとうさんからこ とづけがあるんです。ぼく、小林っていうもんです。」 「おおかた、そんなことだろうと思いました。では、おとう

と、すまして会見を申しこみました。

あたりがあるものですから、ともかく、応接室に通させまし 秘書からその話を聞くと、壮太郎氏は、小林という名に心

したほおの、目の大きい、十二―三歳の少年が立っていまし 壮太郎氏がはいっていきますと、りんごのようにつやつや

小林っていうもんです。お電話をくださいましたので、 「羽柴さんですか、はじめまして。ぼく、明智探偵事務所の

かがいしました。」 少年は目をくりくりさせて、はっきりした口調でいいまし

にしながら答えました。 でね。ご本人に来てもらいたいのだが……。」 「ああ、小林さんのお使いですか。ちとこみいった事件なの 壮太郎氏がいいかけるのを、 少年は手をあげてとめるよう

「いえ、ぼくがその小林芳雄です。ほかに助手はいないので

「ホホウ、きみがご本人ですか。」

うにゆかいな気持になってきました。こんなちっぽけな子ど もが、名探偵だなんて、ほんとうかしら。だが、顔つきやこ 壮太郎氏はびっくりしました。と同時に、なんだか、みょ

子どもに相談をかけてみるかな。 とばづかいは、なかなかたのもしそうだわい。ひとつ、この

のことだったのですか。」 「さっき、電話口で腕ききの名探偵といったのは、きみ自身

「ええ、そうです。ぼくは先生から、るす中の事件をすっか

少年は自信たっぷりです。りまかされているのです。」

して壮二の名を知っていました。」 「今、きみは、壮二の友だちだっていったそうですね。どう

るというお話があったので、早苗さんか、壮二君か、どちら りぬき帳でしらべてきたのです。電話で、人の一命にかかわ かがゆくえ不明にでもなったのではないかと想像してきまし せん。実業雑誌にあなたのご家族のことが出ていたのを、切 「それくらいのことがわからないでは、探偵の仕事はできま

りませんか。」 小林少年は、じつにこきみよく口をききます。

この事件には、

た。どうやら、その想像があたったようですね。それから、

例の二十面相の賊が、関係しているのではあ

ぞと、壮太郎氏はすっかり感心してしまいました。 なるほど、この子どもは、ほんとうに名探偵かもしれない

まつを、この少年にくわしく語り聞かせることにしたのです。 そこで、近藤老人を応接室に呼んで、ふたりで事件のてん 少年は、急所急所で、短い質問をはさみながら、熱心に聞

ました。そして、壮太郎氏の案内で、美術室を見て、もとの いていましたが、話がすむと、その観音像を見たいと申し出

> した。 応接室に帰ったのですが、しばらくのあいだ、ものもいわな いで、目をつむって、何か考えごとにふけっているようすで やがて、少年は、パッチリ目をひらくと、 ひとひざ乗りだ

すようにして、意気ごんで言いました。 「ぼくはひとつうまい手段を考えついたのです。相手が魔法

な手段です。でも、危険をおかさないで、手がらをたてるこ 使いなら、こっちも魔法使いになるのです。ひじょうに危険

さえやった経験があります。」 とはできませんからね。ぼくはまえに、もっとあぶないこと

「それはね。」 「ホウ、それはたのもしい。だがいったいどういう手段です

ささやきました。

「え、きみがですか。」 壮太郎氏は、あまりのとっぴな申し出に、目をまるくしな

いではいられませんでした。

怪盗アルセーヌ=ルパンのやつを、先生がこの手で、ひどい たちには、この方法は試験ずみなんです。先年、フランスの 「そうです。ちょっと考えると、むずかしそうですが、ぼく

めにあわせてやったことがあるんです。」

て危険ですが、二十面相ともあろうものが、約束をたがえた 「それは大じょうぶです。相手が小さな泥棒ですと、かえっ 「壮二の身に危険がおよぶようなことはありませんか。」

うぶですよ。ぼくは子どもだけれど、けっしてむちゃなことら、そのときには、またそのときの方法があります。大じょっていらっしゃるにちがいありません。もしそうでなかったというのですから、危険がおこるまえにちゃんとここへもどりはしないでしょう。壮二君は仏像とひきかえにお返しする

まんいちのことがあってはこまるが。」「明智さんの不在中に、きみにそういう危険なことをさせて、

は考えません。」

すよ。探偵なんて警察官と同じことで、犯罪捜査のためにた「ハハハ……、あなたはぼくたちの生活をごぞんじないので

おゆるしがなくても、もうあとへは引きませんよ。かってに見て見ぬふりをしてくださればいいんです。ぼくは、たとえませんよ。危険というほどの仕事じゃありません。あなたはおれたら本望なんです。しかし、こんなことはなんでもありすよ、拐債なんで警察官と同しことで、犯罪捜査のためにた

でした。 羽柴氏も近藤老人も、この少年の元気を、もてあましぎみ計画を実行するばかりです。」

えを実行することに話がきまりました。そして、長いあいだの協議の結果、とうとう小林少年の考

仏像の奇跡

くれ男が、あけはなったままの、羽柴家の門をくぐりました。午後十時、約束をたがえず、二十面相の部下の三人のあらさて、お話はとんで、その夜のできごとにうつります。

「お約束の品物をいただきにまいりましたよ。」盗人たちは、玄関に立っている秘書などをしりめに、

した。 えて、まよいもせず、ぐんぐん奥のほうへふみこんでいきまと、すてぜりふを残しながら、間どりを教えられてきたとみ

いて、賊のひとりに声をかけました。 美術室の入り口では、壮太郎氏と近藤老人とが待ちうけて

ろうね。」 「約束はまちがいないんだろうね。子どもはつれてきたんだ

すると、賊はぶあいそうに答えました。

がしてもわからねえように工夫がしてあるんです。でなきゃむだですぜ。あっしたちが荷物を運びだすまでは、いくらさ門のそばまでつれてきてありまさあ。だがね、さがしたって「ご心配にゃおよびませんよ。子どもさんは、もうちゃんと、

をとりまいているのです。の下に、まるで博物館のようなガラス棚が、グルッとまわりの下に、まるで博物館のような造りになっていて、うす暗い電燈その部屋は土蔵のような造りになっていて、うす暗い電燈いいすてて、三人はドカドカ美術室へはいっていきました。あ、こちとらがあぶないからね。」

て、その中に、問題の観世音像が安置してあるのです。に、高さ一メートル半ほどの、長方形のガラス箱が立ってい掛け軸などが、ところせましとならんでいるいっぽうのすみよしありげな刀剣、甲冑、置き物、手箱の類、びょうぶ、

の、うす黒い観音様がすわっておいでになります。もとは金色れんげの台座の上に、 ほんとうの人間の半分ほどの大きさ

りやぶれています。でも、さすがは名匠の作、その円満柔和黒く、着ていらっしゃるひだの多い衣も、ところどころす 悪人も、このお姿を拝しては、合、掌しないではいられぬほなお顔だちは今にも笑いだすかと思われるばかり、いかなる まばゆいお姿だったのでしょうけれど、今はただ一面にうす

姿を、よくも見ないで、すぐさま仕事にかかりました。 三人の泥棒は、さすがに気がひけるのか、仏像の柔和なお

「ぐずぐずしちゃいられねえ。大いそぎだぜ。」

ス箱の外を、ぐるぐると巻いていきます。たちまち、それと ますと、もうひとりの男が、そのはしを持って、仏像のガラ ひとりが持ってきたうすぎたない布のようなものをひろげ

わからぬ布包みができあがってしまいました。 「ほら、いいか。横にしたらこわれるぜ。よいしょ、よいし

ょ。

へ運びだします。 傍若無人のかけ声までして、三人のやつはその荷物を、表

るまで、三人のそばにつききって、見はっていました。仏像 ならないからです。 だけ持ちさられて、壮二君がもどってこないでは、なんにも 壮太郎氏と近藤老人は、それがトラックの上につみこまれ

車は今にも出発しそうになりました。 やがて、トラックのエンジンが、そうぞうしくなりはじめ、

うちは、この車を出発させないぞ。もし、むりに出発すれば、 「おい、壮二さんはどこにいるのだ。壮二さんをもどさない

すぐ警察に知らせるぞ。」

「心配するなってえことよ。ほら、うしろを向いてごらん。 近藤老人は、もう、一生けんめいでした。

坊ちゃんは、もうちゃんと玄関においでなさらあ。 ふりむくと、なるほど、玄関の電燈の前に、大きいのと小

さいのと、二つの黒い人かげが見えます。

壮太郎氏と老人とが、それに気をとられているうちに、

あばよ……。」

ました。 トラックは、門前をはなれて、みるみる小さくなっていき

ふたりは、いそいで玄関の人かげのそばへひきかえしまし

「おや、こいつらは、さっきから門のところにいた親子の乞

食じゃないか。さては、いっぱい食わされたかな。」

も、ぼろぼろのうすよごれた着物を着て、にしめたような手 ぬぐいでほおかむりをしています。

いかにもそれは親子と見えるふたりの乞食でした。両人と

「おまえたちはなんだ。こんなところへはいってきてはこま

るじゃないか。」 近藤老人がしかりつけますと、親の乞食がみょうな声で笑

いだしました。

「エへへへへ、お約束でございますよ。」 わけのわからぬことをいったかと思うと、彼はやにわに走

とびさってしまいました。 りだしました。まるで風のように、暗やみの中を、門の外へ

「おとうさま、ぼくですよ。」

見おぼえのある学生服、 の着物をぬぎすてたのを見ると、その下からあらわれたのは、 ませんか。そして、いきなり、ほおかむりをとり、ぼろぼろ こんどは子どもの乞食が、へんなことをいいだすではあり 白い顔。子ども乞食こそ、ほかなら

「どうしたのだ、こんなきたないなりをして。」

ぬ壮二君でした。

した。 羽柴氏が、なつかしい壮二君の手をにぎりながらたずねま

物を着せたんです。でも、今までさるぐつわをはめられてい て、ものがいえなかったのです。」 「何かわけがあるのでしょう。二十面相のやつが、こんな着

たのにちがいありません。それにしても、乞食とは、なんと 彼は乞食に変装をして、それとなく、仏像が運びだされたの い思いつきです。 ついていても、さしてあやしまれないという、 いう思いきった変装でしょう。乞食ならば、人の門前にうろ を見きわめたうえ、約束どおり壮二君をかえして、逃げさっ ああ、では今の親乞食こそ、二十面相その人だったのです。 二十面相らし

とじこめられてはいたけれど、べつに虐くされるようなこ ともなく、食事もじゅうぶんあてがわれていたということで 壮二君はぶじに帰りました。聞けば、先方では、地下室に

さまおかあさまの喜びがどんなであったかは、読者諸君のご で羽柴家の大きな心配はとりのぞかれました。 おとう

> 着物をぬぎすてますと、その下には茶色の十徳姿のおじい さんの変装が用意してありました。頭はしらが、顔もしわだ 家の門をとびだし、小暗い横町にかくれて、すばやく乞食の 想像におまかせします。 さていっぽう、乞食に化けた二十面相は、風のように羽柴

らけの、どう見ても六十をこしたご隠居さまです。

彼は姿をととのえると、かくし持っていた竹の杖をつき、

背中をまるめて、よちよちと、歩きだしました。たとえ羽柴

は見やぶられる気づかいはありません。じつに心にくいばか 氏が約束を無視して、追っ手をさしむけたとしても、これで

りの用意周到なやりくちです。

りこみましたが、二十分もでたらめの方向に走らせておいて、 べつの車に乗りかえ、こんどは、ほんとうのかぐれがへいそ 老人は大通りに出ると、一台のタクシーを呼びとめて、乗 -25-

そこで車をおりて、まっくらな原っぱをよぼよぼと歩いてい きます。さては、賊の巣くつは戸山ヶ原にあったのです。 がせました。 車のとまったところは、戸山ヶ原の入り口でした。老人は

みてもないような建物です。老人は、その洋館の戸口を、ト ポッツリと、一軒の古い洋館が建っています。荒れはてて住 ントントンと三つたたいて、少し間をおいて、トントンと二 原っぱのいっぽうのはずれ、こんもりとした杉林の中に、

かれ、さいぜん仏像をぬすみだした手下のひとりが、ニュッ すると、これが仲間のあいずとみえて、中からドアがひら

と顔を出しました。

ない、はだかろうそくの赤茶けた光に、照らしだされていまんなかに、布をまきつけたままの仏像のガラス箱が、電燈もっていきます。廊下のつきあたりに、むかしは、さぞりっぱ老人はだまったまま先に立って、ぐんぐん奥のほうへはい

だ。どっかへ行って遊んでくるがいい。」「よしよし。おまえたちうまくやってくれた。これはほうび

す。

き戸になっているガラスのとびらをひらきました。にあったはだかろうそくを片手に、仏像の正面に立ち、ひらせると、老人は、ガラス箱の布をゆっくりとりさって、そこ三人の者に数枚の千円札をあたえて、その部屋を立ちさら

だ。| なたはじつによくできていますぜ。まるで生きているようく完成しようというものですよ。ハハハ……、観音さま。あこのちょうしだと、ぼくの計画している大美術館も、まもなうは二百万円のダイヤモンド、きょうは国宝級の美術品です。「観音さま、二十面相の腕まえは、どんなもんですね。きの

におそろしい奇跡がおこったのです。ごとが、終わるか終わらぬかに、彼のことばどおりに、じつところが、読者諸君、そのときでした。二十面相のひとり

なくて一丁のピストルが、ピッタリと賊の胸にねらいをさりませんか。しかも、その指には、おきまりのハスの茎では木造の観音さまの右手が、グーッと前にのびてきたではあ

これないかいけいたではありませんか。だめて、にぎられていたではありませんか。

仏像がひとりで動くはずはありません。

の奇跡はどうしておこったのでしょう。そんなしかけがあるわけはないのです。すると、いったいこほどこされていたのでしょうか。しかし鎌倉時代の彫像に、では、この観音さまには、人造人間のような機械じかけが

いました。といわぬばかりに、思わず両手を肩のところまであげてしまけんで、たじたじとあとじさりをしながら、手むかいしないを考えているひまもありませんでした。彼は「アッ。」とさだが、ピストルをつきつけられた二十面相は、そんなこと

つく ノあい

れぬ恐怖です。

れぬ恐怖です。

これには胆をつぶしました。相手が人間ですがの怪盗も、これには胆をつぶしました。相手が人間ですがの怪盗も、これには胆をつぶしました。相手が人間ですがの怪盗も、これには胆をつぶしました。相手が人間ですがの怪盗も、これには胆をつぶしました。相手が人間

ろうそくを床において、両手を高くあげてしまいました。たじたじとあとじさりをして、ごめんなさいというように、大胆不敵の二十面相が、かわいそうに、まっさおになって、

ッと立ちあがったではありませんか。そして、じっとピスト です。観音さまが、れんげの台座からおりて、床の上に、ヌ すると、またしても、じつにおそろしいことがおこったの

「き、きさま、いったい、な、何者だっ。」

近づいてくるのです。

ルのねらいをさだめながら、

たてました。 二十面相は、追いつめられたけむののような、うめき声を

のだ。たった今、あれをわたせば、一命を助けてやる。」 「わしか、わしは羽柴家のダイヤモンドをとりかえしに来た おどろいたことには、仏像がものをいったのです。おもお

もしい声で命令したのです。 「ハハア、きさま、 羽柴家のまわしものだな。仏像に変装し

て、おれのかぐれがをつきとめに来たんだな。」 相手が人間らしいことがわかると、賊は少し元気づいてき

は、 一寸法師みたいなやつが、落ちつきはらって、老人のようない。すんぼうし おもおもしい声でものをいっているのですから、じつになん を見ると、十二―三の子どもの背たけしかありません。その わけではありません。というのは、人間が変装したのにして ました。でも、えたいのしれぬ恐怖が、まったくなくなった 仏像があまり小さすぎたからです。立ちあがったところ

「で、ダイヤモンドをわたさぬといったら?」

とも形容のできないきみ悪さです。

賊はおそるおそる、相手の気をひいてみるように、 たずね

ました。

もおまえが使うような、おもちゃじゃないんだぜ。」 「おまえの命がなくなるばかりさ。このピストルはね、 いつ

一歩、二歩、三歩、賊のほうへ うすでした。たぶん、さいぜんの手下の者との会話をもれ聞 二十面相の変装姿であることを、ちゃんと知りぬいているよ 観音さまは、このご隠居然とした白髪の老人が、そのじつ

「おもちゃでないというしょうこを、 そういったかと思うと、観音さまの右手がヒョイと動きま 見せてあげようか。」

いて、それと、察したのでしょう。

した。

トルからは、実弾がとびだしたのです。 のいっぽうの窓ガラスがガラガラとくだけ落ちました。ピス と同時に、ハッととびあがるようなおそろしい物音。

破片を、チラと見やったまま、すばやくピストルのねらいを もとにもどし、インド人みたいなまっ黒な顔で、 一寸法師の観音さまは、 めちゃめちゃにとびちるガラスの うすきみ悪

だうす青い煙がたちのぼっています。 見ると賊の胸につきつけられたピストルの筒口からは、

くニヤニヤと笑いました。

おそろしくなってしまいました。 二十面相は、この黒い顔をした小さな怪人物の肝ったまが、 こんなめちゃくちゃならんぼう者は、 何をしだすかしれた

ぬ。たといその弾丸はうまくのがれたとしても、このうえあものではない。ほんとうにピストルでうちころす気かもしれ どんなことになるかもしれぬ。 んな大きな物音をたてられては、付近の住民にあやしまれて、

「しかたがない。ダイヤモンドはかえしてやろう。」

の宝石をとりだすと、てのひらにのせて、カチャカチャいわ の前へ行き、机の足をくりぬいたかくし引きだしから、 賊はあきらめたようにいいすてて、部屋のすみの大きな机 六個

うそくの光をうけて、ギラギラと虹のようにかがやいていま ダイヤモンドは、賊の手の中でおどるたびごとに、床のろ せながらもどってきました。

「さあ、これだ。よくしらべて受けとりたまえ。」

と、老人のようなしわがれ声で、笑いました。 一寸法師の観音さまは、左手をのばして、それを受けとる

「ハハハ……、感心、感心、さすがの二十面相も、 やっぱり

命はおしいとみえるね。」

「ウム、ざんねんながら、かぶとをぬいだよ。」

賊は、くやしそうにくちびるをかみながら、

なめにあわせるやつがあろうとは、おれも意外だったよ。後学 「ところで、いったいきみは何者だね。この二十面相をこん

のために名まえを教えてくれないか。」 「ハハハ……、おほめにあずかって、光栄のいたりだね。名

まえかい。それはきみが牢屋へはいってからのおたのしみに 残しておこう。おまわりさんが教えてくれることだろうよ。」

あとじさりをはじめました。 ピストルをかまえたまま、部屋の出口のほうへ、ジリジリと 賊の巣くつはつきとめたし、ダイヤモンドはとりもどした 観音さまは、勝ちほこったようにいいながら、やっぱり、

> みさえすればよいのです。 し、あとはぶじにこのあばらやを出て、付近の警察へかけこ

です。 とっくにご承知でしょう。小林少年は怪盗二十面相を向こう は、どれほどでしたろう。どんなおとなもおよばぬ大手がら にまわして、みごとな勝利をおさめたのです。そのうれしさ この観音さまに変装した人物が何者であるかは、読者諸君、

老人姿の二十面相が、おかしくてたまらぬというように、大 き、とつぜん、異様な笑い声がひびきわたりました。見ると、 口あいて笑っているのです。 ところが、彼が今、二一三歩で部屋を出ようとしていたと

のことです。負けたとみせて、そのじつ、どんな最後の切り ああ、読者諸君、まだ安心はできません。名にしおう怪盗

札を残していないともかぎりません。

「おやっ、きさま、何がおかしいんだ。」

て、ゆだんなく身がまえました。 観音さまに化けた少年は、ギョッとしたように立ちどまっ

使って、あんまりこまっちゃくれているもんだから、つい吹 「いや、しっけい、しっけい、きみがおとなのことばなんか

きだしてしまったんだよ。」 賊はやっと笑いやんで、答えるのでした。

しまったからさ。この二十面相の裏をかいて、これほどの芸当 のできるやつは、そうたんとはないからね。 「というのはね。おれはとうとう、きみの正体を見やぶって じつをいうと、

おれはまっ先に明智小五郎を思いだした。

きみは子どもだ。明智流のやり方を会得した子どもといえば、 ほかにはない。明智の少年助手の小林芳雄とかいったっけな。 だが、そんなちっぽけな明智小五郎なんてありゃしないね。

観音像に変装した小林少年は、賊の明察に、内心ギョッと

ハハハ……、どうだ、あたったろう。」

ろで、少しもおどろくことはないのです。 目的をはたしてしまった今、相手に名まえをさとられたとこ しないではいられませんでした。しかし、よく考えてみれば、

くみたいな子どもにやっつけられたとあっては、少し名折れどもにちがいないよ。だが、二十面相ともあろうものが、ぼ だねえ。ハハハ……。」 「名まえなんかどうだっていいが、お察しのとおりぼくは子

小林少年は負けないで応しゅうしました。

に勝ったつもりでいるのか。」 「負けおしみは、よしたまえ。せっかくぬすみだした仏像は

でもまだ負けないっていうのかい。」 生きて動きだすし、ダイヤモンドはとりかえされるし、

「そうだよ。おれはけっして負けないよ。」

「で、どうしようっていうんだ!」

一こうしようというのさ!」

えてしまったように感じました。 その声と同時に、小林少年は足の下の床板が、とつぜん消

かんには、目の前に火花が散って、からだのどこかが、おそ ハッとからだが宙にういたかと思うと、そのつぎのしゅん

> ろしい力でたたきつけられたような、はげしい痛みを感じた のです。 ああ、なんという不覚でしょう。ちょうどそのとき、彼が

立っていた部分の床板が、おとしあなのしかけになっていて、 賊の指がソッと壁のかくしボタンをおすと同時に、とめ金が はずれ、そこにまっくらな四角い地獄の口があいたのでした。 痛みにたえかねて、身動きもできず、暗やみの底にうつぶ

こきみよげな嘲゚笑がひびいてきました。 している小林少年の耳に、はるか上のほうから、二十面相の

どれほどの力を持っているかということをね。ハハハ……、 ねえ。まあ、そこでゆっくり考えてみるがいい。きみの敵が

「ハハハ……、おい坊や、さぞ痛かっただろう。

気のどくだ

「坊や、かわいいねえ……。きさま、それで、この二十面相 この二十面相をやっつけるのには、きみはちっと年が若すぎ

七つ道具

たよ。ハハハ……。」

どく腰を打ったものですから、痛さに身動きする気にもなれ 中で、ついらくしたままの姿勢で、じっとしていました。ひ なかったのです。 小林少年はほとんど二十分ほどのあいだ、地底の暗やみの

ばをなげかけておいて、おとしあなのふたをピッシャリしめ てしまいました。もう助かる見こみはありません。永久のと そのまに、天井では、二十面相がさんざんあざけりのこと

りこです。もし賊がこのまま食事をあたえてくれないとした

ら、だれひとり知るものもないあばらやの地下室でうえ死に してしまわねばなりません。

さとおそろしさに、絶望のあまりシクシクと泣きだしたこと しのぶことができましょう。たいていの少年ならば、 年はもいかぬ少年の身で、このおそろしい境遇をどうたえ さびし

した。彼はけなげにも、まだ、二十面相に負けたとは思って しかし、小林少年は泣きもしなければ、絶望もしませんで

でありましょう。

いなかったのです。 やっと腰の痛みがうすらぐと、少年がまず最初にしたこと

は、変装のやぶれ 衣 の下にかくして、肩からさげていた小 さなズックのカバンに、ソッとさわってみることでした。 「ピッポちゃん、きみは、ぶじだったかい。」

カバンの中で何か小さなものが、ゴソゴソと動きました。 「ああ、ピッポちゃんは、どこも打たなかったんだね。 みょうなことをいいながら、上からなでるようにしますと、 おま

ルを拾いあつめ、それをカバンにおさめるついでに、その中の光で、床に散らばっていた六つのダイヤモンドと、ピスト 肩からはずし、中から万年筆型の懐中電燈をとりだして、そ めると、小林少年は、やみの中にすわって、その小カバンを えさえいてくれれば、ぼく、ちっともさびしくないよ。」 ピッポちゃんが、べつじょうなく生きていることをたしか

おもなものでした。

そこには、少年探偵の七つ道具が、ちゃんとそろっていま

のいろいろな品物を紛失していないかどうかを、念入りに点

具を、すっかり背中にせおって歩いたのだそうですが、それ ばかりでしたが、その役にたつことは、 はなく、ひとまとめにして両手ににぎれるほどの小さなもの を、「弁慶の七つ道具」といって、今に語りつたえられてい した。むかし、武蔵坊弁慶という豪傑は、あらゆる戦の道 ます。小林少年の「探偵七つ道具」は、そんな大きな武器で けっして弁慶の七つ

もたいせつです。また、この懐中電燈は、ときに信号の役目 をはたすこともできます。 まず万年筆型懐中電燈。夜間の捜査事業には燈火が何より

道具にもおとりはしなかったのです。

きりなど、さまざまの刃物類が折りたたみになってついてお それから、小型の万能ナイフ。これにはのこぎり、はさみ、

そのほか、やっぱり万年筆型の望遠鏡、時計、磁石、小型の ります。 手帳と鉛筆、さいぜん賊をおびやかした小型ピストルなどが たためば、てのひらにはいるほど小さくなってしまうのです。 それから、じょうぶな絹ひもで作ったなわばしご、これは

それは一羽のハトでした。かわいいハトが身をちぢめて、 バンのべつの区画に、おとなしくじっとしていました。 てはなりません。懐中電燈に照らしだされたのを見ますと、 んだよ。こわいおじさんに見つかるとたいへんだからね。」 「ピッポちゃん。きゅうくつだけれど、もう少しがまんする いや、そのほかに、もう一つピッポちゃんのことをわすれ

小林少年はそんなことをいって、頭をなでてやりますと、 カ

ハトのピッポちゃんは、そのことばがわかりでもしたように、

クークーと鳴いて返事をしました。

マスコットといっしょにいさえすれば、どんな危難にあってピッポちゃんは、少年探偵のマスコットでした。彼はこの

す。

も大じょうぶだという、信仰のようなものを持っていたので

にはラジオをそなえた自動車がありますけれど、ざんねんなは、通信機関が何よりもたいせつです。そのためには、警察のほかに、まだ重大な役目を持っていました。探偵の仕事にそればかりではありません。このハトはマスコットとして

いちばんいいのですが、そんなものは手にはいらないもので善もし洋服の下へかくせるような小型ラジオ発信器があればがら私立探偵にはそういうものがないのです。

すから、小林少年は伝書バトという、おもしろい手段を考えいちばんいいのですが、そんなものは手にはいらないもので

ついたのでした。

「ぼくのカバンの中に、ぼくのラジオも持っているし、それうな、効果をあらわすことがあるのです。じゃきな思いつきが、ときには、おとなをびっくりさせるよいかにも子どもらしい思いつきでした。でも、子どものむ

ていることがありました。なるほど、伝書バトはラジオでも小林少年は、さもとくいそうに、そんなひとりごとをいっ

からぼくの飛行機も持っているんだ。」

バンを衣の中にかくし、つぎには懐中電燈で、地下室のもよさて、七つ道具の点検を終わりますと、彼は満足そうにカ

あり、飛行機でもあるわけです。

うをしらべはじめました。

地下室は十畳敷きほどの広さで、四ほうコンクリートの壁

室から逃げだすことなど思いもおよばないのです。 かいやり方といわねばなりません。このちょうしでは、地下たりないで、階段までとりあげてしまうとは、じつに用心ぶげてあることがわかりました。出入り口をふさいだだけではすと、大きな木のはしごが、部屋のいっぽうの天井につりあでした。どこかに階段があるはずだと思って、さがしてみまにつつまれた、以前は物置きにでも使われていたらしい部屋

小林少年は、その長イスを見て、思いあたるところがあり、のは何一品ありません。まるで牢獄のような感じです。の上に一枚の古毛布がまるめてあるほかには、道具らしいも部屋のすみに一脚のこわれかかった長イスがおかれ、そ

「羽柴壮二君は、きっとこの地下室に監禁されていたんだ。

ました。

そして、この長イスの上でねむったにちがいない。」

づき、クッションをおしてみたり、毛布をひろげてみたりすそう思うと、何かなつかしい感じがして、彼は長イスに近

るのでした。

大胆不敵の少年探偵は、そんなひとりごとをいって、「じゃ、ぼくもこのベッドでひとねむりするかな。」

スの上に、ゴロリと横になりました。

そのとおりですが、このおそろしい境遇にあって、のんきに鋭気をやしなっておかねばなりません。なるほど、理くつは万事は夜が明けてからのことです。それまでにじゅうぶん

きないことでした。ひとねむりするなんて、ふつうの少年には、とてもまねので

でもみようよ。」「ピッポちゃん、さあ、ねむろうよ。そして、おもしろい夢

年の寝息が聞こえてくるのでした。なく、長イスの寝台の上から、すやすやと、さも安らかな少じそうにだいて、やみの中に目をふさぎました。そしてまも小林少年は、ピッポちゃんのはいっているカバンを、だい

云書バー

しちゃあ、へんに明るいなあ。」「ああ、地下室に監禁されていたんだっけ。でも、地下室にたちまちゆうべのできごとを思いだしました。探偵事務所の寝室とちがっているので、びっくりしましたが、小林少年はふと目をさますと、部屋のようすが、いつもの

いていることがわかりました。たが、いっぽうの天、井に近く、明りとりの小さな窓がひらおも見まわしていますと、ゆうべは少しも気づきませんでしく見えています。地下室に日がさすはずはないのだがと、な、殺風景なコンクリートの壁や床が、ほんのりと、うす明る

地面とすれすれの場所にあるのでしょう。三メートル近くもある高いところですけれど、外から見れば、のうえ太い鉄ごうしがはめてあります。地下室の床からは、その窓は三十センチ四ほうほどの、ごく小さいもので、そ

が、それがわれてしまって、大声にさけべば、外を通る人に明るい空を見あげました。窓にはガラスがはめてあるのです、小林君はいそいで長イスから起きあがり、窓の下に行って、「はてな、あの窓から、うまく逃げだせないかしら。」

聞こえそうにも思われるのです。

はできないし、ほかに踏み台にする道具とても見あたりませへとどきません。子どもの力で重い長イスをたてにすることそれを踏み台に、のびあがってみましたが、それでもまだ窓そこで、今まで寝ていた長イスを、窓の下へおしていって、

なわばしごというものがあるのです。少年探偵の七つ道具は、者諸君、ご心配にはおよびません。こういうときの用意に、をのぞくことも、できなかったのでしょうか。いやいや、読では、小林君は、せっかく窓を発見しながら、そこから外

げあげました。っぽうのはしについているかぎを、窓の鉄ごうしめがけて投っぽうのはしについているかぎを、窓の鉄ごうしめがけて投ばして、カウ・ボーイの投げなわみたいにはずみをつけ、い彼はカバンから絹ひものなわばしごをとりだし、それをのさっそく使い道ができたわけです。

び玉に足の指をかけて、よじのぼるしかけなのです。センチごとに大きなむずび玉がこしらえてあって、そのむすメートルほどもある、長いじょうぶな一本の絹ひもに、二十した。かぎはうまく一本の鉄棒にかかったのです。三度、四度失敗したあとで、ガチッと、手ごたえがありま

-32

器械体操めいたことになると、 につかまることができました。 小林君は腕力ではおとなにおよびませんけれど、そういう なんなくなわばしごをのぼって、窓の鉄ごうし だれにもひけはとりませんで

かも、 いや、 けがきがあって、いけがきの外は道路もない広っぱです。そ めれば、もとめられるのですが、そこまで声がとどくかどう の広っぱへ、子どもでも遊びに来るのを待って、 てた庭になっていて草や木がしげり、そのずっと向こうにい 鉄ごうしは深くコンクリートにぬりこめてあって、万能ナイ フぐらいでは、とてもとりはずせないことがわかりました。 ところが、そうしてしらべてみますと、失望したことには、 では、窓から大声に救いをもとめてみたらどうでしょう。 それもほとんど見こみがないのです。窓の外は荒れは うたがわしいほどです。 救いをもと

の位置がハッキリとわかったことです。 も見当がつかなかったのですが、窓をのぞいたおかげで、そ いけない、いけない、そんな危険なことができるものですか。 それに、そんな大きなさけび声をたてたのでは、広っぱの 小林少年は、すっかり失望してしまいました。でも失望の 「に聞こえるよりも先に、二十面相に聞かれてしまいます。 今の今まで、この建物がいったいどこにあるのか、 一つだけ大きな収穫がありました。といいますの

たのです。小林君はたいへん幸運だったのです。 てへんだとおっしゃるかもしれません。でも、 読者諸君は、ただ窓をのぞいただけで、位置がわかるなん それがわかっ



リとわかったのでした。ここでまた、七つ道具の中の磁石が をひらくと、手帳と鉛筆と磁石とをとりだし、方角をたしか 役にたちました。 山ヶ原の北がわ、 かない、 めながら、地図を書いてみました。すると、 読者諸君は、戸山ヶ原にある、 ょう。じつにおあつらえむきの目じるしではありませんか。 ならべたような、コンクリートの大きな建物をごぞんじでし 少年探偵は、その建物と賊の家との関係を、よく頭に入れ 窓の外、 なわばしごをおりました。そして、 は、戸山ヶ原にある、大人国のかまぼこをいくつもきわだって特徴のある建物が見えたのです。東京の 広っぱのはるかむこうに、 西よりの一隅にあるということが、ハッキ 東京にたった いそいで例のカバン

ついでに時計を見ますと、朝の六時を、 少しすぎたばかり

まだ熟睡しているのかもしれません。 です。上の部屋がひっそりしているようすでは、二十面相は

捕縛することができないなんて。」 きとめたのに、その場所がちゃんとわかっているのに、 「ああ、ざんねんだなあ。せっかく二十面相のかぐれがをつ 賊を

そく警視庁へ知らせて、おまわりさんを案内して、二十面相 ましたが、ところが、そのみょうな空想がきっかけになって、 をつかまえてしまうんだがなあ。」 がはえて、あの窓からとびだせたらなあ。そうすれば、さっ 「ぼくのからだが、童話の仙。女みたいに小さくなって、羽 彼は、そんな夢のようなことを考えて、ため息をついてい 小林君は小さいこぶしをにぎりしめて、くやしがりました。

ふと、すばらしい名案がうかんできたのです。 「なあんだ、ぼくは、ばかだなあ。そんなことわけなくでき

るじゃないか。ぼくにはピッポちゃんという飛行機があるじ

ドキおどりだすのです。 と、自分が地下室に監禁されていることをしるし、その紙を 小林君は興奮にふるえる手で、手帳に、賊の巣くつの位置

それを考えると、うれしさに、顔が赤くなって、胸がドキ

ちぎって、こまかくたたみました。

その足にむすびつけてある通信筒の中へ、今の手帳の紙をつ めこみ、しっかりとふたをしめました。 「さあ、ピッポちゃん、とうとうきみが手がらをたてるとき それから、カバンの中の伝書バトのピッポちゃんを出して、

> がきたよ。しっかりするんだぜ。道草なんか食うんじゃない よ。いいかい。そら、あの窓からとびだして、早く奥さんの ところへ行くんだ。」

ピッポちゃんは、小林少年の手の甲にとまって、かわいい

窓の外へとびだしてしまいました。 目をキョロキョロさせて、じっと聞いていましたが、ご主人 て、地下室の中を二―三度行ったり来たりすると、ツーッと の命令がわかったものとみえて、やがて勇ましく羽ばたきし

警官がここへかけつけるまで、三十分かな? 四十分かな? ぐに警視庁へ電話をかけてくださるにちがいない。それから 生のおばさんのところへとんでいくだろう。おばさんはぼく の手紙を読んで、さぞびっくりなさるだろうなあ。でも、す 「ああ、よかった。十分もすれば、ピッポちゃんは、明智先

なんにしても、今から一時間のうちには、賊がつかまるん

だ。そしてぼくは、この穴ぐらから出ることができるんだ。」

小林少年は、ピッポちゃんの消えていった空をながめなが

りむちゅうになっていたものですから、いつのまにか、天井 ら、むちゅうになって、そんなことを考えていました。 のおとし穴のふたがあいたことを、少しも気づきませんでし

「小林君、そんなところで、何をしているんだね。」

の耳をうちました。 聞きおぼえのある二十面相の声が、まるで雷のように少年

四角な穴から、ゆうべのままの、しらが頭の賊の顔が、さか ギョッとしてそこを見あげますと、天井にポッカリあいた

さまになって、のぞいていたではありませんか。

たんじゃないかしら。 アッ、それじゃ、ピッポちゃんのとんでいくのを、見られ

小林君は、思わず顔色をかえて賊の顔を見つめました。

よ。気のどくだね。」 窓の鉄棒は、きみの力じゃはずせまい。そんなところに立っ 感心、きみは、じつに考えぶかい子どもだねえ。だが、その ゃないか。ははあ、用意のなわばしごというやつだね。感心、 ハ……、おや、窓になんだか黒いひもがぶらさがっているじ 「少年探偵さん、どうだったね、ゆうべの寝ごこちは。ハハ いつまで窓をにらんでいたって逃げだせっこはないんだ

賊は、にくにくしくあざけるのでした。

よ。居ごこちがいいんだもの。この部屋は気にいったよ。ぼ 「やあ、おはよう。ぼくは逃げだそうなんて思ってやしない

もうしめたものです。二十面相が、どんなに毒口をたたいた うすも見えませんので、すっかり安心してしまいました。 ドキさせていたのですが、二十面相の口ぶりでは、そんなよ をとばしたのを、賊に感づかれたのではないかと、胸をドキ くはゆっくり滞在するつもりだよ。」 って、なんともありません。最後の勝利はこっちのものだと ピッポちゃんさえ、ぶじに探偵事務所へついてくれたら、 小林少年も負けてはいませんでした。今、窓から伝書バト

わかっているからです。

きみは、もうおなかがすいている時分だろう。うえ死にして だ。だが、小林君、少し心配なことがありゃしないかい。え、 もいいというのかい。」 ねえ。さすがは明智の片腕といわれるほどあって、いい度胸 「居ごこちがいいんだって? ハハハ……、ますます感心だ

で。小林君は何もいわないで、心の中であざわらっていまし らたくさんのおまわりさんが、 何をいっているんだ。今にピッポちゃんの報告で、警察か かけつけてくるのも知らない

がっているのでした。それを食事の代価としてとりあげると 事の代価というのはね、きみの持っているピストルだよ。そ 朝ご飯をたべさせてあげるよ。いやいや、お金じゃない。 ろうか。きみは代価をはらうんだよ。そうすれば、おいしい いいつけて、さっそく朝ご飯を運ばせるんだがねえ。」 のピストルを、おとなしくこっちへひきわたせば、コックに 「ハハハ……、少ししょげたようだね。いいことを教えてや 賊は大きなことはいうものの、やっぱりピストルをきみ悪

ら、それまで食事をがまんするのは、なんでもないのですが、 用事はないのです。 あまり平気な顔をしていて、相手にうたがいをおこさせては まずいと考えました。それに、どうせピストルなどに、もう 小林少年は、やがて救いだされることを信じていましたか

は、うまいことを思いついたものです。

「ざんねんだけれど、きみの申し出に応じよう。ほんとうは、

おなかがペコペコなんだ。」

わざと、くやしそうに答えました。

賊は、それをお芝居とは心づかず、計略が図にあたったと

ばかり、とくいになって、

らね。」 ないとみえるね。よしよし、今すぐに食事をおろしてやるか 「ウフフフ……、さすがの少年探偵も、ひもじさにはかなわ

といいながら、おとし穴をしめて姿を消しましたが、やがて、 何かコックに命じているらしい声が、天井から、かすかに聞

こえてきました。

おとし穴をひらいて顔を出したのは、それから二十分もたっ あんがい食事の用意がてまどって、ふたたび二十面相が、

価のほうを、さきにちょうだいすることにしよう。さあ、こ のかごにピストルを入れるんだ。」 「さあ、あたたかいご飯を持ってきてあげたよ。が、まず代 綱のついた小さなかごが、スルスルとおりてきました。小

りました。とりこの身分にしては、なかなかのごちそうです。 度おりてきたときには、その中に湯気のたっているおにぎり 林少年が、いわれるままに、ピストルをその中へ入れますと、 のご飯には、こんどはダイヤモンドだぜ。せっかく手に入れ はらってくれたら、いくらでもごちそうしてあげるよ。お昼 が三つと、ハムと、なま卵と、お茶のびんとが、ならべてあ かごは、手ばやく天井へたぐりあげられ、それから、もう一 「さあ、ゆっくりたべてくれたまえ。きみのほうで代価さえ

> ……、ホテルの主人も、なかなかたのしみなものだねえ。」 するよ。いくらざんねんだといって、ひもじさにはかえられ たのを、気のどくだけれど、一粒ずつちょうだいすることに ないからね。つまり、そのダイヤモンドを、すっかり、返し てもらうというわけなんだよ。一粒ずつ、一粒ずつ、ハハハ

ようすでした。しかし、そんな気のながいことをいっていて、 ほんとうにダイヤモンドがとりかえせるのでしょうか。 二十面相は、この奇妙な取りひきが、ゆかいでたまらない そのまえに、彼自身がとりこになってしまうようなことは

小林少年の勝利

りあげたばかりのピストルを、手のひらの上でピョイピョイ 林少年をからかってたのしもうと、何かいいかけたときでし とはずませながら、とくいの絶頂でした。そして、なおも小 これでは、おとし戸のところにしゃがんだまま、今、と -36-

ゃ乗っているんです……。二階の窓から見ていると、門の外 ひきつった顔があらわれました。 「たいへんです……。自動車が三台、おまわりがうじゃうじ バタバタと二階からかけおりる音がして、コックの恐怖に

そして、小林君の考えていたよりも早く、もう警官隊が到着 でとまりました……。早く逃げなくっちゃ。」 ああ、はたしてピッポちゃんは使命をはたしたのでした。

は、うれしさにとびたつばかりです。 したのでした。地下室で、このさわぎを聞きつけた少年探偵

この不意うちには、さすがの二十面相も仰。天しないでは

いられません。

一なに?」

ともわすれて、いきなり表の入り口へかけだしました。 と、うめいて、スックと立ちあがると、おとし戸をしめるこ

外からはげしくたたく音が聞こえてきました。戸のそばに設 けてあるのぞき穴に目をあててみますと、外は制服警官の人

でも、もうそのときはおそかったのです。入り口の戸を、

がきでした。

「ちくしょうっ。」

りませんか。賊の巣くつは、今や警官隊によって、まったく の裏口のドアにも、はげしくたたく音が聞こえてきたではあ 向かって走りました。しかし、中途までも行かぬうちに、そ 二十面相は、怒りに身をふるわせながら、こんどは裏口に

包囲されてしまったのです。

「かしら、もうだめです。逃げ道はありません。」

コックが絶望のさけびをあげました。

「しかたがない、二階だ。」

「とてもだめです。すぐ見つかってしまいます。」 二十面相は、二階の屋根裏部屋へかくれようというのです。

まわず、いきなり男の手をとって、ひきずるようにして、屋 コックは泣きだしそうな声でわめきました。賊はそれにか

根裏部屋への階段をかけあがりました。

もあいて、そこからも数名の制服警官。 指揮官は、警視庁の鬼とうたわれた中村捜査係長その人で

になだれこんできました。それとほとんど同時に、裏口の戸 しい音をたてて、たおれたかとおもうと、数名の警官が屋内

ふたりの姿が階段に消えるとほどなく、表口のドアがはげ

す。係長は、表と裏の要所要所に見はりの警官を立たせてお から捜索させました。 いて、残る全員をさしずして、部屋という部屋をかたっぱし

「あっ、ここだ。ここが地下室だ。」

ちかけよる人々、そこにしゃがんで、うす暗い地下室をのぞ いていたひとりが、小林少年の姿をみとめて、 ひとりの警官が例のおとし戸の上でどなりました。たちま

と呼びかけますと、待ちかまえていた少年は、 「いる、いる。きみが小林君か。」

「そうです。早くはしごをおろしてください。」

と叫ぶのでした。

賊の姿はどこにも見えません。 いっぽう、階下の部屋部屋は、くまなく捜索されましたが、

「小林君、二十面相はどこへ行ったか、きみは知らないか。」

やっと地下室からはいあがった、異様な衣姿の少年をとら

えて、中村係長があわただしくたずねました。 「つい今しがたまで、このおとし戸のところにいたんです。

外へ逃げたはずはありません。二階じゃありませんか。」 ただならぬさけび声がひびいてきました。 小林少年のことばが終わるか終わらぬかに、 その二階から

「早く来てくれ、賊だ、賊をつかまえたぞ!」

で夕方のようにうす暗いのです。がると、そこは屋根裏部屋で、小さな窓がたった一つ、まる段へ殺到しました。ドカドカというはげしい靴音、階段をあくれっというので、人々はなだれをうって、廊下の奥の階

「ここだ、ここだ。早く加勢してくれ。」

ようすです。ともすればはねかえしそうで、組みしいているのがやっとのみしいて、どなっています。老人はなかなか手ごわいらしく、そのうす暗い中で、ひとりの警官が、白髪白髯の老人を組って、

が折りかさなって、賊の上におそいかかりました。した。それを追って、四人、五人、六人、ことごとくの警官先にたった二―三人が、たちまち老人に組みついていきま

実検のためです。
にとき、中村係長が小林少年をつれてあがってきました。首たとき、中村係長が小林少年をつれてあがってきました。首の髪の老人が、グッタリとして、部屋のすみにうずくまっん。みるみるうちに高手小手にいましめられてしまいました。もうこうなっては、いかな凶賊も抵抗のしようがありませ

「二十面相は、こいつにちがいないだろうね。」

「そうです。こいつです。二十面相がこんな老人に変装して係長がたずねますと、少年はそくざにうなずいて、

いるのです。」

と答えました。

「きみたち、そいつを自動車へ乗せてくれたまえ。

ぬかりの

ないように。」

て、階段をおりていきました。(係長が命じますと、警官たちは四ほうから老人をひったて)

わたるんだぜ。」物だからねえ。あすになったら、きみの名は日本中にひびきら、さぞびっくりすることだろう。相手が二十面相という大

「小林君、大手がらだったねえ。外国から明智さんが帰った

ように、にぎりしめるのでした。中村係長は少年名探偵の手をとって、感謝にたえぬものの!

「ぼく、なんだかうそみたいな気がします。二十面相に勝ったばかりか、せっかく監禁した小林少年は救いだされ、彼自ほどの苦心にもかかわらず、一物をも得ることができなかっはどの苦心にもかかわらず、一物をも得ることができなかったばかりか、せっかく監禁した小林少年の勝利でした。賊は、あれい像は、最初からわたさなくてすんだのですし、ダイヤモンかくして、たたかいは、小林少年の勝利に終わりました。

うにいうのでした。
小林君は、興奮に青ざめた顔で、何か信じがたいことのよ

たなんて。」

しぎではありませんか。いどこへ雲がくれしてしまったのでしょう。あれほどの家さいどこへ雲がくれしてしまったのでしょう。あれほどの家さ二十面相のやとっていたコックのゆくえです。彼は、いった少年探偵がすっかり忘れていたことがらがあります。それはしかし、ここに一つ、賊が逮捕されたうれしさのあまり、

うな捜索に、そんな手ぬかりがあったとは考えられないかられはまったく不可能なことです。大ぜいの警官隊のげんじゅ彼はまだ屋内のどこかに身をひそめているのでしょうか。そるよゆうがあれば、二十面相も逃げているはずです。では、逃げるひまがあったとは思われません。もしコックに逃げ

されているのかを。コックの異様なゆくえ不明には、そもそもどんな意味がかく読者諸君、ひとつ本をおいて、考えてみてください。この

です。

おそろしき挑戦状

りのさし向かいです。こに中村捜査係長と老人に変装したままの怪盗と、ふたりきれました。なんの飾りもない、うす暗い部屋に机が一脚、そ視庁の陰気な調べ室で、怪盗二十面相の取り調べがおこなわ戸山ヶ原の廃屋の捕り物があってから二時間ほどのち、警

一言も、ものをいわないのです。かっています。さいぜんから、おしのようにだまりこくって、敗はうしろ手にいましめられたまま、傍若無人に立ちはだ

「ひとつ、きみの素顔を見せてもらおうか。」

らがのつけひげを、むしりとりました。そして、いよいよ賊々とした頭があらわれました。つぎには、顔いっぱいの、しかけて、スッポリと引きぬきました。すると、その下から黒係長は、賊のそばへよると、いきなり白髪のかつらに手を

「おやおや、きみは、あんがいぶおとこだねえ。」の素顔がむきだしになったのです。

では、大きなですがある。 では、大きにでは、大きにない。 では、大きにでは、大きにない。 では、大きにでは、大きにない。 では、大きにでは、大きにない。 をころの感じられない、野蛮人のような、異様な相好でした。 ところの感じられない、野蛮人のような、異様な相好でした。 ところの感じられない、野蛮人のような、異様な相好でした。 ところの感じられない、野蛮人のような、異様な相好でした。 ところの感じられない、かまかにも、ないな短いまゆ、 は、せまいひたい、クシャクシャと不ぞろいな短いまゆ、 が表がそういって、みょうな顔をしたのももっともでした。

ました。係長は、じっと賊の顔をにらみつけて、思わず、声中村係長は、なんともたとえられないぶきみなものを感じり変装なのかもしれない。のだろう。もしかしたら、この野蛮人みたいな顔が、やっぱくれにしても、これはまあ、なんてみにくい顔をしている

い質問をしないではいられぬ気持でした。 じつにへんてこな質問です。しかし、そういうばかばかし「おい、これがおまえのほんとうの顔なのか。」 を大きくしないではいられませんでした。

したのです。いっそうしまりなくして、ニヤニヤと笑いだいくちびるを、いっそうしまりなくして、ニヤニヤと笑いだすると怪盗は、どこまでもおしだまったまま、しまりのな

それを見ると、中村係長は、なぜかゾッとしました。目の

るような気がしたのです。前に、何か想像もおよばない奇怪なことがおこりはじめてい

「エヘヘへ……、くすぐってえや、よしてくんな、くすぐっい顔をしていたとは、じつに意外というほかはありません。なりすました賊が、そのじつ、こんな化け物みたいなみにくなりすました賊が、そのじつ、こんな化け物みたいなみにくなりすましたが、そうしていくらしらべてみても、賊は変装してと、いきなり両手をあげて、賊の顔をいじりはじめました。と、いきなり両手をあげて、賊の顔をいじりはじめました。係長は、その恐怖をかくすように、いっそう相手に近づく

しかしたら……。まで警察をばかにしようというのでしょうか。それとも、もまで警察をばかにしようというのでしょうか。それとも、もないことばでしょう。彼は口のきき方までいつわって、あく賊がやっと声をたてました。しかし、なんというだらしの

てえや。一

そんなことがありうるでしょうか。あまりにばかばかしい空の中に、ある、とほうもない考えがひらめいたのです。ああ、(係長はギョッとして、もう一度賊をにらみつけました。頭

「きみはだれだ。きみは、いったいぜんたい何者なんだ。」たしかめてみないではいられませんでした。

想です。まったく不可能なことです。でも、係長は、それを

すると、賊はその声に応じて、まちかまえていたように答またしても、へんてこな質問です。

えました。

えば世間に聞こえた大盗賊じゃないか。ひきょうなまねをすしたって、だめだぞ。ほんとうのことをいえ。二十面相とい「だまれ!」そんなばかみたいな口をきいて、ごまかそうと「あたしは、木下虎吉っていうもんです。職業はコックです。」

したというのでしょう。賊は、いきなりゲラゲラと笑いだしどなりつけられて、ひるむかと思いのほか、いったいどうるなっ。」

たではありませんか。したというのでしょう。賊は、いきなりゲラゲラと気

中村係長は、それを聞くと、ハッと顔色をかえないでいらえ。いいかげんにわかりそうなもんじゃありませんか。」たねえ男だと思っているんですかい。警部さんも目がないねハ……、とんだことになるものですね。二十面相がこんなき「ヘエー、二十面相ですって、このあたしがですかい。ハハ

「だまれッ、でたらめもいいかげんにしろ。そんなばかなこれませんでした。

年がちゃんと証明しているじゃないか。」とがあるものか。きさまが二十面相だということは、小林少いでは、

「ワハハハ……、それがまちがっているんだから、お笑いぐ

くださりゃ、すぐわかることです。」ってもんですよ。なんなら、コックの親方のほうをしらべてないが、十日ばかりまえ、あの家へやとわれたコックの虎吉えはねえ、ただのコックですよ。二十面相だかなんだか知らさでさあ。あたしはね、べつになんにも悪いことをしたおぼ

をしているんだ。」 「その、なんでもないコックが、どうしてこんな老人の変装

みこんできなすったときに、主人が、あたしの手をとって、 られ、かつらをかぶせられてしまったんでさあ。あたしも、 じつは、よくわけがわからないんだが、おまわりさんが、ふ 「それがね、いきなりおさえつけられて、着物を着かえさせ なかったかね。そいつは警官の服装をしていたかもしれない のだ。だれか見かけなかったかね。」

は、どうすることもできなかったんですよ。なにしろ、 たわけですね。屋根裏部屋はうす暗いですからね。あのさわ だして、いきなりとびかかったという、お芝居をやってみせ ときたら、えらいちからですからねえ。」 ぎのさいちゅう、顔なんかわかりっこありませんや。あたし つまり警部さんの部下のおまわりさんが、二十面相を見つけ いようにおさえつけてしまったんです。今から考えてみると、 なり、『賊をつかまえた。』とどなりながら、身動きもできな 今まで着ていたおじいさんの着物を、あたしに着せて、いき んの洋服や、帽子などをとりだして、手早く身につけると、 の衣装が入れてあるんです。主人はその中から、おまわりさ 屋根裏部屋へかけあがったのですよ。 あの部屋にはかくし戸棚があってね、そこにいろんな変装

たのです。 はり番をつとめた四人の警官に、すぐ来るようにと伝えさせ けさ戸山ヶ原の廃屋を包囲した警官のうち、表口、裏口の見 しく卓上のベルをおしました。そして、警部が顔を出すと、 中村係長は、青ざめてこわばった顔で、無言のまま、 はげ

にらみつけました。 「こいつを逮捕していたとき、あの家から出ていったものは やがて、はいってきた四人の警官を、係長は、こわい顔で

その問いに応じて、ひとりの警官が答えました。

早く二階へ行けと、どなっておいて、ぼくらがあわてて階段 のほうへかけだすのと反対に、その男は外へ走っていきまし 「警官ならばひとり出ていきましたよ。賊がつかまったから

その男の顔を見なかったのかね。いくら警官の制服を着てい ゃないか。」 たからって、顔を見れば、にせ者かどうかすぐわかるはずじ 「なぜ、それを今までだまっているんだ。だいいち、きみは

す。 係長のひたいには、静脈がおそろしくふくれあがっていま

「それが、顔を見るひまがなかったんです。風のように走っ

ぼくはちょっとふしんに思ったので、きみはどこへ行くんだ、 と声をかけました。するとその男は、電話だよ、係長のいい ってしまいました。 つけで電話をかけに行くんだよ、 てきて、風のようにとびだしていったものですから。しかし、 とさけびながら、走ってい

れてしまって、ついご報告しなかったのですよ。」 まったのですから、かけだしていった警官のことなんかわす れ以上うたがいませんでした。それに、賊が、つかまってし 電話ならば、これまで例がないこともないので、ぼくはそ

賊の計画が、じつに機敏に、 聞いてみれば、むりのない話でした。むりがないだけに、 しかも用意周到におこなわれた

ことを、おどろかないではいられませんでした。

あまりのことに、ただ、ぼうぜんと顔を見あわせるほかはああの大さわぎを演じたのかと思うと、係長も四人の警官も、そのつまらないコックをつかまえるために十数名の警官が、蛮人みたいな、みにくい顔の男は、怪盗でもなんでもなかっせう、うたがうところはありません。ここに立っている野

た一枚の紙きれを取りだし、係長の前にさしだしました。(コックの虎吉が、十徳の胸をひらいて、もみくちゃになっいって、こんなものを書いていったんですが。」(「それから、警部さん、主人があなたにおわたししてくれと

りませんでした。

あったのです。
そこには、つぎのようなばかにしきった文言が書きつけての顔は、憤怒のあまり、紫色にかわったかと見えました。のばして、すばやく読みくだしましたが、読みながら、係長中村係長は、ひったくるようにそれを受けとると、しわを

とは、もうあきらめたがよいと伝えてくれたまえ。これにったわけだ。子どものやせ腕でこの二十面相に敵対するこ子どもには気のどくだが、少々実世間の教訓をあたえてや一身を犠牲にすることはできない。勝利によっているあのいる。だが、いくらかわいい小林君のためだって、ぼくのい子どもだ。ぼくはかわいくてしかたがないほどに思ってい子どもだ。ぼくはかわいくてしかたがないほどに思っていかが君によろしく伝えてくれたまえ。あれはじつにえら

のうちまたゆっくりお目にかかろう。
のだ。ぼくはいそがしい。じつなう、もっと大きなものに、ぼくはいそがしい。じつをいうと、ぼくはあんな貧弱なやますことはしない。じつをいうと、ぼくはあんな貧弱なやますことはしない。じつをいうと、ぼくはあんな貧弱いでながら、警官諸公に、少しばかりぼくの計画をもらこりないと、とんだことになるぞと、伝えてくれたまえ。

十面相より

中村善四郎君

恵との一騎うち、その日が待ちどおしいではありませんか。の手におえないかもしれません。待たれるのは、明智小五郎の手におえないかもしれません。待たれるのは、明智小五郎の帯国です。それもあまり遠いことではありますまい。の帰国です。それもあまり遠いことではありますまい。がも二十面相は、羽柴家の宝庫を貧弱とあざけり、大事業にある、北海がら、けっきょく、怪盗の勝利に終わりました。し続者諸君、かくして二十面相と小林少年のたたかいは、ざいまなの一騎うち、その日が待ちどおしいではありませんか。

美術城

伊豆半島の修善寺温泉から四キロほど南、下田街道にそっい。

きが建っているのです。 た山の中に、谷口村というごくさびしい村があります。その 村はずれの森の中に、 みょうなお城のようないかめしいやし

りまいていて、 もとびこすことのできないお堀が、堀りめぐらしてあるとい です。たとい針の山の土塀を乗りこえても、その中に、 たぬほど深いのです。これはみな人をよせつけぬための用心 土塀の内がわには、四メートル幅ほどのみぞが、ぐるっとと するどくとがった鉄棒を、まるで針の山みたいに植えつけ、 まわりには高い土塀をきずき、土塀の上には、 、青々とした水が流れています。 深さも背がた ずっと先の とて

せあつめたような、大きな建物が建っています。 体に厚い白壁造りの、 その付近の人たちは、この建物を「日下部のお城」と呼ん そして、そのまんなかには、天守閣こそありませんが、 窓の小さい、 、まるで土蔵をいくつもよ

全

したら数十億円にもなろうといううわさでした。

うわけです。

では、このばかばかしく用心堅固な建物は、小さな村にお城などあるはずはないのです。 の住まいでしょう。 でいますが、 むろんほんとうのお城ではありません。こんな どんなお金持だって、これほど用心ぶかい邸 警察のなかった戦国時代ならば知らぬこ い ったい 何者

んなふうに答えます。 「あすこには、いったいどういう人が住んでいるのですか。」 旅のものなどがたずねますと、村人はきまったように、こ

「あれですかい。ありゃ、日下部の気ちがい旦那のお城だよ。

宅に住んでいるものは

ありますまい。

宝物をぬすまれるのがこわいといってね、 しねえかわり者ですよ。」 村ともつきあいを

今の左門氏の代になって、広大な地所もすっかり人手にわた されているおびただしい古名画ばかりになってしまいまし ってしまって、残るのはお城のような邸宅と、その中に所蔵 日下部家は、先祖代々、この地方の大地主だったのですが、

学校の本にさえ名の出ている、古来の大名人の作は、 術といってもおもに古代の名画で、雪舟とか探幽とか、左門老人は気ちがいのような美術収集家だったのです。 どもれなく集まっているといってもいいほどでした。 という絵の大部分が、国宝にもなるべき傑作ばかり、 何ほとに 価格に

画を命よりもだいじがっていたのです。 きているわけがおわかりでしょう。左門老人は、それらの名 ない心配でした。 れはしないかと、 これで、日下部家のやしきが、 そればかりが、 寝てもさめてもわすれられ 、もしや泥棒にぬすま

交際をしないようになってしまいました。来たのではないかとうたがいだして、正直な村の人たちとも、 きません。 堀を掘っても、 しまいには、 塀の上に針を植えつけても、 訪問者の顔を見れば、 絵をぬすみに まだ安心がで

お城のように用心堅固にで



まったのでした。うな生活が、ずっとつづいて、いつしか六十の坂をこしてしりな生活が、ずっとつづいて、いつしか六十の坂をこしてしたがって子どももなく、ただ名画の番人に生まれてきたよのです。美術にねっちゅうするあまり、お嫁さんももらわず、

い。 つまり、老人は美術のお城の、奇妙な城主というわけでし

わっていました。 室で、古今の名画にとりかこまれて、じっと夢みるようにすきょうも老人は、白壁の土蔵のような建物の、奥まった一

は、まるで牢獄のようにつめたくて、うす暗いのです。すが、用心のために鉄ごうしをはめた小さい窓ばかりの室内戸外にはあたたかい日光がうらうらとかがやいているので

す。 使いといっては、このじいやとその女房のふたりきりなので善部屋の外に年とった下男の声がしました。広いやしきに召「旦那さま、あけておくんなせえ。お手紙がまいりました。」

人と同じようにしわくちゃのじいやが、一通の手紙を手にし老人が返事をしますと、重い板戸がガラガラとあいて、主「手紙?」めずらしいな。ここへ持ってきなさい。」

ことに差出人の名まえがありません。 左門老人は、それを受けとって裏を見ましたが、みょうな てはいってきました。

「だれからだろう。見なれぬ手紙だが……。」

く封を切って、読みくだしてみました。あて名はたしかに日下部左門様となっているので、

ともか

ありますだかね。」「おや、旦那さま、どうしただね。何か心配なことが書いて

安らしく光っているのです。たくちびるがブルブルふるえ、老眼鏡の中で、小さな目が不わくちゃの顔が、しなびたように色をうしなって、歯のぬけれほど、左門老人のようすがかわったのです。ひげのないしじいやが思わず、とんきょうなさけび声をたてました。そ

っちへ行っていなさい。」 ちへ行っていなさい。」 「いや、な、なんでもない。おまえにはわからんことだ。

たおれなかったのが、ふしぎなくらいです。しましたが、なんでもないどころか、老人は気をうしなって、るるえ声でしかりつけるようにいって、じいやを追いかえ

その手紙には、じつに、つぎのようなおそろしいことばが、

したためてあったのですから。

新聞紙上でよくご承知のことと思います。しかし、紹介者などなくても、小生が何者であるかは、紹介者もなく、とつぜんの申し入れをおゆるしください。

る十一月十五日夜、かならず参上いたします。を、一幅も残さずちょうだいする決心をしたのです。きた用件をかんたんに申しますと、小生は貴家ご秘蔵の古画

二十面相

と存じ、あらかじめご通知します。

とつぜん推参して、ご老体をおどろかしてはお気のどく

日下部左門殿

外な山奥の、日下部家の美術城でした。

大ちを集めて、第二、第三のおそろしい陰謀をたくらんでいたのでしょう。そして、まず白羽の矢をたてられたのが、意たのを集めて、第二、第三のおそろしいたか、だれも知るものそのあいだ、怪盗がどこで何をしていたか、だれも知るものの事狂に、目をつけたのでした。彼が警官に変装して、戸山収集狂に、目をつけたのでした。彼が警官に変装して、戸山外な山奥の、怪盗二十面相は、とうとう、この伊豆の山中の美術

ように、部屋の中をグルグル歩きはじめました。 左門老人は、いきなり立ちあがって、じっとしていられぬいなら、いっそ死んだほうがましじゃ。」 ああ、わしはもう破滅だ。この宝物をとられてしまうくら

「ああ、運のつきじゃ。もうのがれるすべはない。」

れていました。 いつのまにか、老人の青ざめたしわくちゃな顔が、涙にぬ

かなかったのだろう。ぞ。わしは思いだしたぞ。どうして、今まで、そこへ気がつ「おや、あれはなんだったかな……ああ、わしは思いだした

何を思いついたのか、老人の顔には、にわかに生気がみなあの人さえいてくれたら、わしは助かるかもしれないぞ。」……神さまは、まだこのわしをお見すてなさらないのじゃ。

「おい、作蔵、作蔵はいないか。」ぎってきました。

きりと、じいやを呼びたてました。 老人は部屋の外へ出て、パンパンと手をたたきながら、

て持ってきてくれ。早くだ、早くだぞ。」新聞だったと思うが、なんでもいいから三―四日ぶんまとめ「早く、『伊豆日報』を持ってきてくれ。たしかおとといの、ただならぬ主人の声に、じいやがかけつけてきますと、

めいて、その『伊豆日報』という地方新聞のたばを持ってきと、おそろしいけんまくで命じました。作蔵が、あわてふた

しの宝物はなくなったも同然だ。あいつは、警視庁の力でも、ればよいのじゃ。二十面相にねらわれたからには、もう、わ

「十一月十五日の夜といえば、今夜だ。ああ、わしはどうす

ぎのような記事が出ていました。ていきましたが、やっぱりおとといの十三日の消息欄に、つますと、老人は取る手ももどかしく、一枚一枚と社会面を見

明智小五郎氏来修

四―五日滞在の予定である。かれを休めるために、本日修繕寺温泉富士屋旅館に投宿、出張中であったが、このほど使命をはたして帰京、旅のつ民間探偵の第一人者明智小五郎氏は、ながらく、外国に

がいはないて。どんなことがあっても、この名探偵をひっぱ先生明智探偵ならば、きっとわしの破滅を救ってくれるにちかいう子どもでさえ、あれほどのはたらきをしたんだ。その探偵のほかにはない。羽柴家の盗難事件では、助手の小林と「これだ。これだ。二十面相に敵対できる人物は、この明智

ソソクサとやしきを出かけました。に、その前で見はり番をしているように、かたくいいつけて、な板戸をピッタリしめ、外からかぎをかけ、ふたりの召使いの女房を呼んで着物をきかえますと、宝物部屋のがんじょうを人は、そんなひとりごとをつぶやきながら、作蔵じいや

ってこなくてはならん。」

もうというわけです。です。そこへ行って、明智探偵に面会し、宝物の保護をたのいうまでもなく、行く先は、近くの修繕寺温泉富士屋旅館

ああ、待ちに待った名探偵明智小五郎が、とうとう帰って

老人にとっては、じつに、ねがってもないしあわせといわね部氏の美術城のすぐ近くに、入る湯に来ていようとは、左門もしたように、ちょうど、二十面相がおそおうという、日下きたのです。しかも、時も時、所も所、まるで申しあわせで

名探偵明智小五郎

ばなりません。

についたのは、もう午後一時ごろでした。長い坂道をチョコチョコと走らんばかりにして、富士屋旅館、ネズミ色のトンビに身をつつんだ、小がらの左門老人が、

とたずねますと、裏の谷川へ魚釣りに出かけられましたとの「明智小五郎先生は?」

川へおりていかなければなりませんでした。答え。そこで、女中を案内にたのんで、またテクテクと、谷

た。におりると、美しい水がせせらぎの音をたてて流れていましにおりると、美しい水がせせらぎの音をたてて流れていましクマザサなどのしげった、あぶない道を通って、深い谷間

姿のひとりの男が、背をまるくして、たれた釣りざおの先を出しています。そのいちばん大きな平らな岩の上に、どでら流れのところどころに、飛び石のように、大きな岩が頭を

じっと見つめています。

「あの方が、明智先生でございます。」

その男のそばへ近づいていきました。女中が先にたって、岩の上をピョイピョイととびながら、

「先生、あの、このお方が、先生にお目にかかりたいといっ わざわざ遠方からおいでなさいましたのですが。」

いて、 その声に、どでら姿の男は、うるさそうにこちらをふりむ

いか。」 「大きな声をしちゃいけない。さかなが逃げてしまうじゃな

としかりつけました。

えば青白い引きしまった顔、高い鼻、ひげはなくて、キッと ちがいありません。 力のこもったくちびる、写真で見おぼえのある明智名探偵に モジャモジャにみだれた頭髪、するどい目、どちらかとい

「あたしはこういうものですが。」

左門老人は名刺をさしだしながら、

「先生におりいっておねがいがあっておたずねしたのです

と、小腰をかがめました。

が、よく見もしないで、さもめんどうくさそうに、 すると明智探偵は、 名刺を受けとることは受けとりました

といいながら、また釣りざおの先へ気をとられています。

老人は女中に先へ帰るようにいいつけて、そのうしろ姿を

「ああ、そうですか。で、どんなご用ですか。」

見おくってから

りざおばかり見ている探偵の顔の前へ、つきだしました。 と、ふところから例の、二十面相の予告状をとりだして、 「先生、じつはきょう、こんな手紙を受けとったのです。」

> す。 いその手紙が、ぼくにどんな関係があるとおっしゃるので んなに釣りのじゃまをなすっちゃ。手紙ですって? いった 「ああ、また逃げられてしまった……。こまりますねえ、そ

明智はあくまでぶあいそうです。

「先生は二十面相と呼ばれている賊をごぞんじないのですか

ました。 左門老人は、少々むかっ腹をたてて、するどくいいはなち

しゃるのですか。」 「ホウ、二十面相ですか。 二十面相が手紙をよこしたとおっ

りざおの先を見つめているのです。 名探偵はいっこうおどろくようすもなく、あいかわらず釣

あげ、日下部家の「お城」にどのような宝物が秘蔵されてい そこで、老人はしかたなく、怪盗の予告状を、自分で読み

るかを、くわしく物語りました。

「ああ、あなたが、あの奇妙なお城のご主人でしたか。」 明智はやっと興味をひかれたらしく、老人のほうへ向きな

おりました。

い宝物です。明智先生、どうかこの老人を助けてください。 「はい、そうです。あの古名画類は、わしの命にもかえがた

おねがいです。」

「すぐに、わたしの宅までおこしねがいたいのです。そして、 「で、ぼくにどうしろとおっしゃるのですか。」

わしの宝物を守っていただきたいのです。」

よりも先生をたよりにしておるのです。二十面相を向こうに「いや、それがですて、こう申しちゃなんだが、わしは警察よりも、まず、警察の保護をねがうのが順序だと思いますが。」「警察へおとどけになりましたか。ぼくなんかにお話になる

ろ二十面相は、今夜わしのところをおそうというのですからききの刑事を呼ぶにしたって、時間がかかるのです。なにしそれに、ここには小さい警察分署しかありませんから、腕うことを、わしは信じておるのです。

うことを、まわして、

が一生のおねがいです。どうかわしを助けてください。」まったく神さまのおひきあわせと申すものです。先生、老人ちょうどその日に、先生がこの温泉に来ておられるなんて、ね。ゆっくりはしておられません。

るのを、待ちかねていたほどです。う。二十面相はぼくにとっても敵です。早くあらわれてくれ「それほどにおっしゃるなら、ともかくおひきうけしましょ

す。

あなたは一足先へお帰りください。ぼくは刑事といっしょに、の用意に、二―三人刑事の応援をたのむことにしましょう。宿へ帰ってぼくから電話をかけましょう。そして、まんいちおうは警察とも打ちあわせをしておかなければなりません。(では、ごいっしょにまいりましょうか、そのまえに、いち

明智の口調は、にわかに熱をおびてきました。もう釣りざ

おなんか見向きもしないのです。

老人は胸をなでおろしながら、くりかえしくりかえし、お思いです。」

礼をいうのでした。

ひけをとらぬ探偵さんは、先生のほかにないとい

不安の一夜

郎の一行が到着しました。谷口村の「お城」へ帰ってから、三十分ほどして、明智小五日下部左門老人が、修善寺でやとった自動車をとばして、

左門老人は、手をあわさんばかりにして、かきくどくので づめの刑事で、それぞれ肩書きつきの名刺を出して、左門老 のほかに、背広服のくっきょうな紳士が三人、みな警察分署 一行は、ピッタリと身にあう黒の洋服に着かえた明智探偵

人とあいさつをかわしました。

ある、おびただしい国宝的傑作をしめし、いちいちその由緒壁にかけならべた掛け軸や、箱におさめて棚につみかさねて老人はすぐさま、四人を奥まった名画の部屋へ案内して、

集まっているのを、見たことがありませんよ。どを見てまわるのですが、歴史的な傑作が、こんなに一室にくも古画は大すきで、ひまがあると、博物館や寺院の宝物な「こりゃあどうも、じつにおどろくべきご収集ですねえ。ぼを説明するのでした。

ね。ぼくでもよだれがたれるようですよ。」(美術ずきの二十面相が目をつけたのは、むりもありません)

門老人もびっくりしてしまいました。そして、名探偵への尊 その道の専門家もおよばぬほどくわしいのには、さすがの左 について、賛辞をならべるのでしたが、その批評のことばが、 明智探偵は、感嘆にたえぬもののように、一つ一つの名画

さて、少し早めに、一同夕食をすませると、いよいよ名画

敬の念が、ひとしお深くなるのでした。

守護の部署につくことになりました。

きめたのです。 みとめたら、ただちに呼び子を吹きならすというあいずまで れぞれ徹夜をして、見はり番をつとめ、あやしいものの姿を ひとりは名画室の中へ、ひとりは表門、ひとりは裏口に、そ 刑事たちが、めいめいの部署につくと、明智探偵は名画 明智は、テキパキした口調で、三人の刑事にさしずをして、

ぎをかけさせてしまいました。 のがんじょうな板戸を、外からピッシャリしめて、老人にか 室

しょう。 「ぼくは、この戸の前に、一晩中がんばっていることにしま

うかね。」

りました。 名探偵はそういって、板戸の前の畳廊下に、ドッカリすわ

は、失礼かもしれませんが、相手はなにしろ、魔法使いみた 「先生、大じょうぶでしょうな。先生にこんなことを申して

なような気がするのですが。」 いなやつだそうですからね。わしは、なんだかまだ、不安心 老人は明智の顔色を見ながら、 いいにくそうにたずねるの

です。

うしがはめてあるし、壁は厚さが三十センチもあって、ちっ 刑事君が、目を見はっているんだし、そのうえ、たった一つ とやそっとでやぶれるものではないし、部屋のまんなかには これ以上、用心のしようはないくらいですよ。 の出入り口には、ぼく自身ががんばっているんですからね。 き、じゅうぶんしらべたのですが、部屋の窓には厳重な鉄ご 「ハハハ……、ご心配なさることはありません。ぼくはさっ

ここにおいでになっても、同じことですからね。」 あなたは安心して、おやすみなすったほうがいいでしょう。

いったって、ねむられるものではありませんからね。」 「いや、わしもここで徹夜することにしましょう。寝床へは 明智がすすめても、老人はなかなか承知しません。

話し相手ができて好都合です。絵画論でもたたかわしましょ 「なるほど、では、そうなさるほうがいいでしょう。ぼくも そういって、探偵のかたわらへすわりこんでしまいました。

っています。 さすがに百戦錬磨の名探偵、にくらしいほど落ちつきはら

人はソワソワと落ちつきがなく、 の話をはじめたものですが、しゃべるのは明智ばかりで、老 それから、ふたりはらくな姿勢になって、ポツポツ古名画 ろくろく受け答えもできな

いありさまです。

時間のあとで、やっと、十二時がうちました。真夜中です。 明智はときどき、板戸ごしに、室内の刑事に声をかけてい 左門老人には、一年もたったかと思われるほど、長い長い

ましたが、そのつど、中からハッキリした口調で、異状はな いという返事が聞こえてきました。

「アーア、ぼくは少しねむくなってきた。」

明智はあくびをして

でしょうからね……。ご老人、いかがです。ねむけざましに こんなげんじゅうな警戒の中へとびこんでくるばかでもない 一本。外国ではこんなぜいたくなやつを、スパスパやってい 「二十面相のやつ、今夜はやってこないかもしれませんよ。

と、たばこ入れをパチンとひらいて、 自分も一本つまんで、

るんですよ。

老人の前にさしだすのでした。

「そうでしょうかね。今夜は来ないでしょうかね。」

まだ不安らしくいうのです。 左門老人は、さしだされたエジプトたばこを取りながら、

せん。ぼくが、ここにがんばっていると知ったら、まさかノ コノコやってくるはずはありませんよ。」 「いや、ご安心なさい。あいつは、けっしてばかじゃありま

ありませんか。

それがすっかり灰になったころ、明智はまたあくびをして、 えごとをしながら、おいしそうにたばこをすっていましたが、 それからしばらくことばがとだえて、ふたりはてんでの考

いますが、ぼくは職業がら、どんなしのび足の音にも目をさ に、大じょうぶです。武士はぐつわの音に目をさますってい 「ぼくは少しねむりますよ。あなたもおやすみなさい。なあ

ますのです。心までねむりはしないのですよ。」

そんなことをいったかと思うと、板戸の前に長々と横にな

かすかな物音も聞きもらすまいと、いっしょうけんめいでし ません。ねむるどころか、ますます耳をそばだてて、どんな あまりなれきった探偵のしぐさに、老人は気が気ではあり

とおだやかな寝息が聞こえはじめたのです。

って、目をふさいでいました。そして、まもなく、

スヤスヤ

くのが、ハッキリわかるようです。 かしら、それとも近くの森のこずえにあたる風の音かしら。 そして、耳をすましていますと、しんしんと夜のふけてい 何かみょうな音が聞こえてくるような気がします。耳鳴り

らした黒装束の男が、もうろうと立ちはだかっているでは にかすんでいきます。 頭の中がだんだんからっぽになって、目の前がもやのよう ハッと気がつくと、そのうす白いもやの中に、目ばかり光

「アッ、明智先生、賊です、賊です。」 「なんです。そうぞうしいじゃありませんか。どこに賊がい 思わず大声をあげて、寝ている明智の肩をゆさぶりました。

るんです。夢でもごらんになったのでしょう。

せん。いくら見まわしても、黒装束の男など、どこにもいや なるほど、今のは夢か、それとも。幻だったのかもしれま 探偵は身動きもせず、しかりつけるようにいうのでした。

もどり、また耳をすましましたが、 老人は少しきまりが悪くなって、 するとさっきと同じよう 無言のままもとの姿勢に しないのです。

らがりはじめるのです。 に、頭の中がスーッとからっぽになって、目の前にもやがむ

っくらになってしまうと、からだが深い深い地の底へでも落 そのもやが少しずつ濃くなって、やがて、黒雲のようにま

とねむってしまいました。 ちこんでいくような気持がして、老人は、いつしかウトウト

ふと目をさましますと、びっくりしたことには、あたりがす へでも落ちたような、おそろしい夢ばかりみつづけながら、 どのくらいねむったのか、そのあいだじゅう、まるで地獄

つめていたのに、どうして寝たりなんぞしたんだろう。」 っかり明るくなっているのです。 「ああ、わしはねむったんだな。しかし、あんなに気をはり

左門老人はわれながら、ふしぎでしかたがありませんでし

た。 見ると、明智探偵はゆうべのままの姿で、まだスヤスヤと

ありがたい。」 ねむっています。 をなして、とうとうやってこなかったとみえる。ありがたい、 「ああ、助かった。それじゃ二十面相は、明智探偵におそれ

しました。 老人はホッと胸をなでおろして、しずかに探偵をゆりおこ

「先生、起きてください。もう夜が明けましたよ。」

明智はすぐ目をさまして、

さい。なにごともなかったじゃありませんか。」 「ああ、よくねむってしまった……。ハハハ……、ごらんな

といいながら、大きなのびをするのでした。

うぶですから、ご飯でもさしあげて、ゆっくりやすんでいた だこうじゃありませんか。」 「見はり番の刑事さんも、さぞねむいでしょう。もう大じょ

「そうですね。では、この戸をあけてください。」 老人は、いわれるままに、懐中からかぎをとりだして、締

まりをはずし、ガラガラと板戸をひらきました。

ところが、戸をひらいて、部屋の中を一目見たかと思うと、

老人の口から「ギャーッ。」という、まるでしめころされる ような、さけび声がほとばしったのです。

「どうしたんです。どうしたんです。」

「あ、あれ、あれ……。」 明智もおどろいて立ちあがり、部屋の中をのぞきました。

老人は口をきく力もなく、みょうな片言をいいながら、ふ 51

たのです。部屋の中の古名画は、壁にかけてあったのも、箱 るえる手で、室内を指さしています。 見ると、ああ、老人のおどろきもけっしてむりではなかっ

き消すようになくなっているではありませんか。 におさめて棚につんであったのも、一つのこらず、 まるでか

番人の刑事は、畳の上に打ちのめされたようにたおれて、

なんというざまでしょう。グウグウ高いびきをかいているの

は…。」 「せ、先生、ぬ、ぬ、ぬすまれました。ああ、わしは、わし

左門老人は、一しゅんかんに十年も年をとったような、す

さまじい顔になって、 明智の胸ぐらをとらんばかりです。

けです。まったく不可能なことを、こんなにやすやすとやっ 面相というやつは、人間ではなくて、えたいのしれないお化 ああ、またしてもありえないことがおこったのです。二十

てのけるのですからね。

でした。 のためにだしぬかれて、もうすっかり腹をたてているようす いている刑事の腰のあたりを、いきなりけとばしました。賊 明智はツカツカと部屋の中へはいっていって、いびきをか

りぬすまれてしまったじゃないか。」 くださいってたのんだんじゃないんだぜ。見たまえ、すっか 「おい、おい、起きたまえ。ぼくはきみに、ここでおやすみ

ありさまです。 刑事は、やっとからだを起こしましたが、まだ夢うつつの

むってしまった……。おや、ここはどこだろう。」 「ウ、ウ、何をぬすまれたんですって? ああ、すっかりね 寝ぼけた顔で、キョロキョロ部屋の中を見まわすしまつで

があったか。」 れたんじゃないか。思いだしてみたまえ、ゆうべどんなこと 「しっかりしたまえ。ああ、 わかった。きみは麻酔剤でやら

明智は刑事の肩をつかんで、らんぼうにゆさぶるのでした。

す。

鼻と口をふさいでしまったのです。それっきり、それっきり、 そして、何かやわらかいいやなにおいのするもので、ぼくの うなものが、ぼくのうしろへしのびよったのです。そして、 ぼくは何もわからなくなってしまったんです。」 すよ。そうです、麻酔剤です。ゆうべ真夜中に、黒い影のよ こは日下部の美術城だった。しまった。ぼくはやられたんで 「こうっと、おや、ああ、あんた明智さんですね。ああ、こ

事諸君も、同じ目にあっているかもしれない。」 に、からっぽの絵画室を見まわすのでした。 「やっぱりそうだった。じゃあ、表門と裏門を守っていた刑 刑事はやっと目のさめたようすで、さも申しわけなさそう

えてきました。 したが、しばらくすると、台所のほうで大声に呼ぶのが聞こ-52 明智はひとりごとをいいながら、部屋をかけだしていきま

「日下部さん。ちょっと来てください。」

います。 ますと、明智は下男部屋の入り口に立ってその中を指さして なにごとかと、老人と刑事とが、声のするほうへ行ってみ

す。 かりじゃない。ごらんなさい、かわいそうに、このしまつで 「表門にも裏門にも、刑事君たちの影も見えません。それば

じゃまだてをしないように、ふたりの召使いをしばりつけて さんとが、高手小手にしばられ、さるぐつわまでかまされて、 ころがっているではありませんか。むろん賊のしわざです。 見ると、下男部屋のすみっこに、作蔵じいやとそのおかみ

「ああ、 なんということじゃ。明智さん、これはなんという

おいたのです。

ことです。」

のうちに消えうせてしまったのですから、むりもないことで した。命よりもたいせつに思っていた宝物が夢のように一夜 日下部老人は、もう半狂乱のていで、明智につめよりま

れほどの腕まえとは知りませんでした。相手をみくびってい 「いや、なんとも申しあげようもありません。二十面相がこ

たのが失策でした。」

偵と評判ばかりで、なんだこのざまは……。」 わしは、いったいどうすればよいのです。……名探偵、 「失策? 明智さん、あんたは失策ですむじゃろうが、 この 名探

て、今にも、とびかからんばかりのけんまくです。 老人はまっさおになって、血走った目で明智をにらみつけ

笑いだしたではありません 笑いが顔いちめんにひろがっていって、しまいにはもうおか しくておかしくてたまらぬというように、大きな声をたてて、 うのでしょう。名探偵は笑っているではありませんか。その やがて、ヒョイとあげた顔を見ますと、これはどうしたとい 明智はさも恐縮したように、さしうつむいていましたが、 か。

にだしぬかれたくやしさに、気でもちがったのでしょうか。 日下部老人は、あっけにとられてしまいました。明智は賊 あんた何がおかしいのじゃ。これ、何がおかし

いのじゃというに。」

はないですね。まるで赤子の手をねじるように、やすやすと えらいですねえ。ぼくはあいつを尊敬しますよ。」 やられてしまったじゃありませんか。二十面相というやつは 「ワハハハ……、おかしいですよ。名探偵明智小五郎、ざま

明智のようすは、いよいよへんです。

そうじゃ。刑事さん、ぼんやりしてないで、早くなわをとい てやってください。さるぐつわもはずして。そうすれば作蔵 ああ、それに、作蔵たちを、このままにしておいてはかわい いるばあいではない。チェッ、これはまあなんというざまだ。 「これ、これ、明智さん、どうしたんじゃ、賊をほめたてて

に、日下部老人が探偵みたいにさしずをするしまつです。 「さあ、ご老人の命令だ。なわをといてやりたまえ。」 明智が、いっこうたよりにならぬものですから、あべこべ

の口から賊の手がかりもつくというもんじゃないか。」

と立ちなおって、ポケットから一たばの捕縄をとりだしたか と思うと、いきなり日下部老人のうしろにまわって、パっと すると、今までぼんやりしていた刑事が、にわかにシャン

明智が刑事にみょうな目くばせをしました。

なわをかけ、グルグルとしばりはじめました。 「これ、何をする。ああ、どいつもこいつも、気ちがいばか

これ、わしではないというに。」 りじゃ。わしをしばってどうするのだ。わしをしばるのでは ない。そこにころがっている、ふたりのなわをとくのじゃ。

言のまま、とうとう老人を高手小手にしばりあげてしまいま しかし、刑事はいっこう手をゆるめようとはしません。

とくようにいってください。これ、明智さんというに。」 くださらんか。この男は気がちがったらしい。早く、なわを というに。明智さん、あんた何を笑っているのじゃ。とめて 「これ、気ちがいめ。これ、何をする。あ、痛い痛い。痛い

またそれを見て、探偵がニヤニヤ笑っているなんてばかなこ れば、事件の依頼者をしばりあげるなんて法はありません。 た。みんなそろって気ちがいになったのでしょうか。でなけ 老人は、何がなんだかわけがわからなくなってしまいまし

とはありません。

しゃったようですが。」 「ご老人、だれをお呼びになっているのです。明智とかおっ 明智自身が、こんなことをいいだしたのです。

まさか自分の名をわすれたのではあるまい。」 「何をじょうだんをいっているのじゃ。明智さん、あんた、

のですか。」 「このぼくがですか。このぼくが明智小五郎だとおっしゃる

「きまっておるじゃないか。何をばかなことを……。」 明智はすまして、いよいよへんなことをいうのです。

ありませんか。ここには明智なんて人間はいやしませんぜ。」 つままれたような顔をしました。 「ハハハ……、ご老人、あなたこそ、どうかなすったんじゃ 老人はそれを聞くと、ポカンと口をあけて、キツネにでも

「ご老人、あなたは以前に明智小五郎とお会いになったこと あまりのことにきゅうには口もきけないのです。

があるのですか。」

「会ったことはない。じゃが、写真を見てよく知っておりま

が似ているとでもおっしゃるのですか。」 「写真? 写真ではちと心ぼそいですねえ。 その写真にぼく

変装の名人だったじゃありませんか。」 おわすれになっていたのですね。二十面相、 「ご老人、あなたは、二十面相がどんな人物かということを、 ほら、あいつは

「そ、それじゃ、き、きさまは……。」

老人はやっと、事のしだいがのみこめてきました。そして

がくぜんとして色をうしなったのでした。 「ハハハ……、おわかりになりましたかね。」

新聞を見たのじゃ。『伊豆日報』にちゃんと『明智探偵来修』 「いや、いや、そんなばかなことがあるはずはない。わしは

と書いてあった。それから、富士屋の女中がこの人だと教え てくれた。どこにもまちがいはないはずじゃ。」

五郎は、まだ、外国から帰りゃしないのですからね。」

「ところが大まちがいがあったのですよ。なぜって、明智小

が、こちらの計略にかかってね、編集長にうその原稿をわた 「ところが、うそを書いたのですよ。社会部のひとりの記者 「新聞がうそを書くはずはない。」

の明智探偵にごまかされるはずはあるまい。」 「フン、それじゃ刑事はどうしたんじゃ。まさか警察がにせ

小五郎にしておきたかったのです。 い二十面相だとは、 老人は、目の前に立ちはだかっている男を、 信じたくなかったのです。 むりにも明智 あのおそろし

あ、この男ですか、それから表門裏門の番をしたふたりです か。血のめぐりが悪いじゃありませんか。刑事ですって? 「ハハハ……、ご老人、まだそんなことを考えているのです

か、ハハハ……、なにね、ぼくの子分がちょいと刑事のまね

をしただけですよ。」

すなわち、盗賊だったなんて。日下部老人は、人もあろうに 二十面相、その人だったのです。 どころか、大盗賊だったのです。おそれにおそれていた怪盗 んでした。明智小五郎とばかり思いこんでいた男が、名探偵 老人は、もう信じまいとしても信じないわけにはいきませ 、なんというとびきりの思いつきでしょう、探偵が、

物を運びだし、自動車へつみこむあいだ、ご老人に一ねむり してほしかったものですからね。あの部屋へどうしてはいっ かけてあったのですよ。ふたりの刑事が部屋へはいって、荷 二十面相に宝物の番人をたのんだわけでした。 ハハ……、思いだしましたか。あの中にちょっとした薬がし 「ご老人、ゆうべのエジプトたばこの味はいかがでした。ハ

よ。あなたのふところから、ちょっとかぎを拝借すればよ なことばを使いました。しかし、老人にしてみれば、いやに かったのですからね。」 二十面相は、まるで世間話でもしているように、おだやか

たかとおっしゃるのですか。ハハハ……、わけはありません

たにちがいありません。 「では、ぼくたちは急ぎますから、これで失礼します。美術

ていねいすぎるそのことばづかいが、いっそう腹だたしかっ

品はじゅうぶん注意して、たいせつに保管するつもりですか

ら、どうかご安心ください。では、さようなら。」

たがえ、ゆうぜんと、その場をたちさりました。 二十面相は、ていねいに一礼して、刑事に化けた部下をし

と悲しさに、歯ぎしりをかみ、涙さえ流して、身もだえする とたおれてしまいました。そして、たおれたまま、くやしさ ぐる巻きにしたなわのはしが、そこの柱にしばりつけてある がら、賊のあとを追おうとしましたが、からだじゅうをぐる ので、ヨロヨロと立ちあがってはみたものの、すぐバッタリ かわいそうな老人は、何かわけのわからぬことをわめきな

のでありました。

者諸君にはおなじみの明智探偵の少年助手です。 しい少年の姿が見えました。ほかならぬ小林芳雄君です。読 東京駅のプラットホームの人ごみの中に、ひとりのかわいら 美術城の事件があってから半月ほどたった、ある日の午後、

のようにまるめてにぎっています。読者諸君、じつはこの新 ムを行ったり来たりしています。手には、一枚の新聞紙を棒 て、ピカピカ光る靴をコツコツいわせながら、プラットホー 小林君は、ジャンパー姿で、よく似合う鳥打ち帽をかぶっ

聞には二十面相に関する、あるおどろくべき記事がのってい しましょう。 るのですが、 しかし、それについては、 もう少しあとでお話

出むかえるためでした。名探偵は、こんどこそ、ほんとうに 小林少年が東京駅にやってきたのは、先生の明智小五郎を

外国から帰ってくるのです。

凱旋将軍です。本来ならば、外務省とか民間団体から、大がは世紀できない。 ほんらい みごとに成功をおさめて帰ってくるのですから、いわば ぜいの出むかえがあるはずですが、 明智は某国からの招きに応じ、ある重大な事件に関係し、 明智はそういうぎょうぎ

ょうしいことが大きらいでしたし、探偵という職業上、でき

****** の方面にはわざと通知をしないで、ただ自宅だけに東京 るだけ人目につかぬ心がけをしなければなりませんので、 夫人は出むかえをえんりょして、小林少年が出かけるならわ 駅着の時間をしらせておいたのでした。それも、いつも明智

しになっていました。

ど、三月ぶりでお会いするのです。なつかしさに、なんだか 胸がワクワクするようでした。 つと、待ちかねた明智先生の汽車が到着するのです。ほとん 小林君は、しきりと腕時計をながめています。もう五分た

こうぶちのめがねが光っています。先方では、にこにこ笑い キ、半白の頭髪、半白の口ひげ、デップリ太った顔に、べっ をつくりながら、小林少年に、近づいてきました。 ふと気がつくと、ひとりのりっぱな紳士が、にこにこ笑顔 ネズミ色のあたたかそうなオーバー・コート、籐のステッ

> かけていますけれど、小林君はまったく見知らぬ人でした。 「もしやきみは、明智さんのところの方じゃありませんか。 紳士は、太いやさしい声でたずねました。

「ええ、そうですが……。」

けげん顔の少年の顔を見て、紳士はうなずきながら、

えにきたのですよ。少し内密の用件もあるのでね。」 んが帰られることがわかったものだから、非公式にお出むか 「わたしは、外務省の辻野という者だが、この列車で明智さ

と説明しました。

す。」 「ああ、そうですか。 ぼく、先生の助手の小林っていうんで

やかな顔になって、 帽子をとって、おじぎをしますと、 辻野氏はいっそうにこ

「ああ、きみの名は聞いていますよ。じつは、いつか新聞に

出た写真で、きみの顔を見おぼえていたものだから、こうし 子どもたちも大の小林ファンです。 て声をかけたのですよ。二十面相との一騎うちはみごとでし たねえ。きみの人気はたいしたものですよ。わたしのうちの

はいられませんでした。 と、しきりにほめたてるのです。 小林君は少しはずかしくなって、パッと顔を赤くしないで

ないか。じつに警察をばかにしきった、あきれた態度だ。け の新聞では、いよいよ国立博物館をおそうのだっていうじゃ たりして、ずいぶん思いきったまねをするね。それに、けさ 「二十面相といえば、修善寺では明智さんの名まえをかたっ

かねていたんだ。」ためだけでも、明智さんが帰ってこられるのを、ぼくは待ちっしてうっちゃってはおけませんよ。あいつをたたきつぶす

たんです。」

・たんです。」

・たんです。

・たらさ

・たんです。

・たらさ

・たんです。

・たらなたさ

・たんです。

・たんです。

・たんです。

・たんです。

・たんです。

・ たんです。

・ たんです。
・ たんです。

「きみが持っている新聞は、けさの?」

いる新聞です。」 「ええ、そうです。博物館をおそうっていう予告状ののって

二月十日といえば、あますところ、もう九日間しかないのであったのです。例によって十二月十日というぬすみだしちょうだいするという、じつにおどろくべき宣告文がしたたちょうだいするという、じつにおどろくべき宣告文がしたたちょうだいするという、じつにおどろくべき宣告文がしたためであったのです。その意味をかいつまんでしるしますと、ずまっているのです。その意味をかいつまんでしるしますと、小林君はそういいながら、その記事ののっている個所をひ

例のないことではありません。しかし、博物館をおそうといの財宝で、にくむべきしわざにはちがいありませんが、世にしてたたかおうというのです。今までおそったのはみな個人思われます。あろうことか、あるまいことか、国家を相手に怪人二十面相のおそるべき野心は、頂上にたっしたように

そろしい盗賊です。大胆とも無謀ともいいようのないおってあったでしょうか。大胆とも無謀ともいいようのないおら、こんなだいそれた泥棒を、もくろんだものが、ひとりだうのは、国家の所有物をぬすむことになるのです。むかしか

人がつめているのです。守衛もいます。おまわりさんもいまできることでしょうか。博物館といえば、何十人というお役しかし考えてみますと、そんなむちゃなことが、いったい

す。そのうえ、こんな予告をしたんでは、どれだけ警戒がげ

ああ、二十面相は気でもくるったのではありますまいか。いとはいえません。さんの人がきでとりかこんでしまうようなことも、おこらなんじゅうになるかもしれません。博物館ぜんたいをおまわり

、では想像もできないような、悪魔のはかりごとがあるとでもにいことをやってのける自信があるのでしょうか。人間の知恵、それとも、あいつには、このまるで不可能としか考えられな

「ああ、列車が来たようだ。」は明智名探偵をむかえなければなりません。 さて、二十面相のことはこのくらいにとどめ、わたしたち

いうのでしょうか。

出むかえの人がきの前列に立って左のほうをながめますのはしへとんでいきました。辻野氏が注意するまでもなく、小林少年はプラットホーム

しながら、近づいてきます。と、明智探偵をのせた急行列車は、刻一刻、その形を大きくと、明智探偵をのせた急行列車は、刻一刻、その形を大きく

サーッと空気が震動して、黒い鋼鉄の箱が目の前をかすめ

背広に、黒いがいとう、黒いソフト帽という、黒ずくめのいに、なつかしいなつかしい明智先生の姿が見えました。黒いしりとともに、やがて列車が停止しますと、一等車の昇降口ました。チロチロとすぎていく客車の窓の顔、ブレーキのき

「先生、お帰りなさい。」

まねきをしているのです。

でたちで、早くも小林少年に気づいて、にこにこしながら手

そばへかけよりました。 小林君はうれしさに、もうむがむちゅうになって、先生の

トホームへおりたち、小林君のほうへよってきました。明智探偵は赤帽にいくつかのトランクをわたすと、プラッ

「小林君、いろいろ苦労をしたそうだね。新聞ですっかり知トオームへよりたち、小材君のほうへよってきました。

っているよ。でも、ぶじでよかった。」

たい握手がかわされたのでした。ました。そして、どちらからともなく手がのびて、師弟のかで名探偵をじっと見ながら、いっそう、そのそばへよりそいああ、三月ぶりで聞く先生の声です。小林君は上気した顔

肩書きつきの名刺をさしだしながら、声をかけました。そのとき、外務省の辻野氏が、明智のほうへ歩みよって、

とを、ある筋から耳にしたものですから、きゅうに内密でおわたしはこういうものです。じつは、この列車でお帰りのこ「明智さんですか、かけちがってお目にかかっていませんが、「『『『『『『『『『『『『『』』

話したいことがあって、出むいてきたのです。」

しばらくそれをながめていましたが、やがて、ふと気をかえ明智は名刺を受けとると、なぜか考えごとでもするように、

たように、快活に答えました。

ざ、らせら、ことを仕てお宿でしてらして、外務省のほうへまいるつもりだったのですが、わざわます。じつは、ぼくも一度帰宅して、着がえをしてから、す「ああ、辻野さん、そうですか。お名まえはよくぞんじてい

ざ、お出むかえを受けて恐縮でした。」

ば、ここの鉄道ホテルで、お茶を飲みながらお話したいので「おつかれのところをなんですが、もしおさしつかえなけれ

「鉄道ホテルですか。ホウ、鉄道ホテルでね。」すが、けっしておてまはとらせません。」

うにつぶやきましたが、明智は辻野氏の顔をじっと見つめながら、何か感心したよ

もしましょう。」 「ええ、ぼくはちっともさしつかえありません。では、おと

それから、少しはなれたところに待っていた小林少年に近し

づいて、何か小声にささやいてから、

きみは荷物をタクシーにのせて、一足先に帰ってくれたま「小林君、ちょっとこの方とホテルへよることにしたからね、

と命じるのでした。

「ええ、では、ぼく、先へまいります。」

道ホテルへのぼっていきました。に話しあいながら、地下道をぬけて、東京駅の二階にある鉄りますと、名探偵と辻野氏とは、肩をならべ、さもしたしげー小林君は赤帽のあとを追って、かけだしていくのを見おく

あらかじめ命じてあったものとみえ、ホテルの最上等の一

室に、客を迎える用意ができていて、かっぷくのよいボーイ 長が、うやうやしくひかえています。

べつのボーイが茶菓を運んできました。 で、安楽イスに腰をおろしますと、待ちかまえていたように、 ふたりがりっぱな織り物でおおわれた丸テーブルをはさん

ルをおすまで、だれもはいってこないように。」 「きみ、少し密談があるから、席をはずしてくれたまえ。べ

う。一日千 秋の思いで待ちかねていたのですよ。」 しめきった部屋の中に、ふたりきりのさし向かいです。 「明智さん、ぼくは、どんなにかきみに会いたかったでしょ 辻野氏は、いかにもなつかしげに、ほほえみながら、 辻野氏が命じますと、ボーイ長は一礼して立ちさりました。 、しか

めました。 し目だけはするどく相手を見つめて、こんなふうに話しはじ

辻野氏におとらぬ、にこやかな顔で答えました。 明智は、安楽イスのクッションにふかぶかと身をしずめ、

車の中で、ちょうどこんなことを考えていたところでしたよ。 いかとね。」 ひょっとしたら、きみが駅へ迎えに来ていてくれるんじゃな 「ぼくこそ、きみに会いたくてしかたがなかったのです。汽

えもごぞんじでしょうねえ。 「さすがですねえ。すると、きみは、ぼくのほんとうの名ま

いました。興奮のために、イスのひじ掛けにのせた左手の先 辻野氏のなにげないことばには、おそろしい力がこもって

が、かすかにふるえていました。

きみのことを怪人二十面相と呼んでいるようですね。」 しやかな名刺を見たときから、わかっていましたよ。本名と いわれると、ぼくも少しこまるのですが、新聞なんかでは、 「少なくとも、外務省の辻野氏でないことは、あの、まこと

くに、それと知りながら、賊のさそいにのり、賊のお茶をよ ばれるなんて、そんなばかばかしいことがおこりうるもので しょうか。 か。盗賊が探偵を出むかえるなんて。探偵のほうでも、とっ ああ、読者諸君、これがいったい、ほんとうのことでしょう 明智は平然として、このおどろくべきことばを語りました。

くの招待に応じるなんて、シャーロック=ホームズにだって できない芸当です。ぼくはじつにゆかいですよ。なんて生き 最初ぼくを見たときから気づいていて、気づいていながらぼ 「明智君、きみは、ぼくが想像していたとおりの方でしたよ。

がいのある人生でしょう。ああ、この興奮の一時のために、

彼は国中を敵にまわしている大盗賊です。ほとんど死にもの るかのようにいうのでした。しかし、ゆだんはできません。 ぼくは生きていてよかったと思うくらいですよ。」 の用意がなくてはなりません。ごらんなさい。辻野氏の右手 ぐるいの冒険をくわだてているのです。そこには、それだけ いではありませんか。いったいポケットの中で何をにぎって 辻野氏に化けた二十面相は、まるで明智探偵を崇拝してい 洋服のポケットに入れられたまま、一度もそこから出な

「ハハハ……、きみは少し興奮しすぎているようですね。ぼ

美術品には一指もそめさせませんよ。また、伊豆の日下部家 これだけははっきり約束しておきます。」 よ。だが、二十面相君、きみには少しお気のどくですね。ぼ の宝物も、きみの所有品にはしておきませんよ。いいですか、 てしまったのだから。ぼくが帰ってきたからには、博物館の くが帰ってきたので、せっかくのきみの大計画もむだにな くには、こんなことは、いっこうにめずらしくもありません

つ

です。

つけて、にこにこ笑っています。 深くすいこんだ、たばこの煙を、フーッと相手の面前に吹き そんなふうにいうものの、明智もなかなか楽しそうでした。

「それじゃ、ぼくも約束しましょう。」

二十面相も負けてはいませんでした。

お目にかけます。それから、日下部家の宝物……、ハハハ… 「博物館の所蔵品は、予告の日には、 かならずうばいとって

あれが返せるものですか。なぜって、明智君、あの事件

では、きみも共犯者だったじゃありませんか。」 「共犯者? ああ、なるほどねえ。きみはなかなかしゃれが

ちのように談笑しております。しかし、ふたりとも、 にもえたふたり、大盗賊と名探偵は、まるで、したしい友だ うまいねえ。ハハハ……。」 たがいに、相手をほろぼさないではやまぬ、はげしい敵意 心の中

いのは賊のポケットのピストルだけではないのです。 面には、どんな用意ができているかわかりません。おそろし これほどの大胆のしわざをする賊のことですから、その 裏

寸分のゆだんもなくはりきっているのです。

ほど賊の手下がまぎれこんでいるか、知れたものではないの はかぎりません。そのほかにも、このホテルの中には、どれ さいぜんの一くせありげなボーイ長も、賊の手下でないと

えてにらみあっているのと、少しもかわりはありません。気 力と気力のたたかいです。うの毛ほどのゆだんが、たちどこ 今のふたりの立ち場は剣道の達人と達人とが、白刃をかま

ろに勝負を決してしまうのです。

がやいていました。 とも、その目だけは、 たいには、この寒いのに、汗の玉がういていました。ふたり 顔はにこやかに笑みくずれています。しかし、二十面相のひ ふたりは、ますますあいきょうよく話しつづけています。 まるで火のように、らんらんともえか

トランクとエレベーター

ぞえきれぬ盗難品も、すっかり取りかえす信念がありました。 してしまったのでしょう。読者諸君は、くやしく思っている です。賊を見くびっていればこそ、こういう放れわざができ ない自信がありました。例の美術城の宝物も、 るのです。探偵は博物館の宝物には、賊の一指をもそめさせ かもしれませんね。 んのわけもなかったのです。どうして、この好機会を見のが しかし、これは名探偵の自信がどれほど強いかを語るもの 名探偵は、プラットホームで賊をとらえようと思えば、な そのほかのか

からです。逮捕は、そのたいせつな宝物のかくし場所をたし物を、どんなふうに処分してしまうか、知れたものではないがとらえられたならば、その部下のものが、ぬすみためた宝のです。二十面相には、多くの手下があります。もし首 領るれには、今、賊をとらえてしまっては、かえって不利な

した。恵の程度をためしてみるのも、一興であろうと考えたので恵の程度をためしてみるのも、一興であろうと考えたのでは、いっそ、そのさそいに乗ったと見せかけ、二十面相の知るこで、せっかく出むかえてくれた賊を、失望させるよりかめてからでもおそくはありません。

¬ \ \ \ \

の、今、きみをとらえる気なんか少しもないのだよ。ぼくはの正体を知りながら、ノコノコここまでやってきたぼくだも「きみ、なにもそうビクビクすることはありゃしない。きみ

明智小五郎も、負けない大笑いをしました。

か。まあ、ゆっくり、きみのむだ骨折りを拝見するつもりだゃしない。博物館の襲。撃まで、まだ九日間もあるじゃないけさ。なあに、きみをとらえることなんか、急ぐことはありただ、有名な二十面相君と、ちょっと話をしてみたかっただ

ょ。」

みをとりこにすることになりそうだねえ。」でぼくをとらえないとすれば、どうやら、ぼくのほうで、ききみにほれこんでしまったよ……。ところでと、きみのほう

「ああ、さすがは名探偵だねえ。太っぱらだねえ。ぼくは、

「明智君、こわくはないかね。それともきみは、ぼくが無意ヤとうすきみ悪く笑うのでした。

二十面相はだんだん、声の調子をすごくしながら、ニヤニ

まって、きみをこの部屋から外へ出すとでも、かんちがいしのほうに、なんの用意もないと思っているのかね。ぼくがだ味にきみをここへつれこんだとでも思っているのかい。ぼく

の(ればならない。いそがしいからだだからね。」)、「ぼくはむろんここを出ていくよ。これから外務省へ行かなけ、「さあ、どうだかねえ。きみがいくら出さないといっても、

ているのじゃないのかね。」

かるくあくびをしながら、ハンカチをとりだして、顔をぬぐるように、のんきらしく、ガラスごしに窓の外を見やって、のほうへ歩いていきました。そして、なにか景色でもながめ明智はいいながら、ゆっくり立ちあがって、ドアとは反対

そのとき、いつのまにベルをおしたのか、さいぜんのがん

「おい、おい、明智君、きみは、ぼくの力をまだ知らないよテーブルの前で、直立不動の姿勢をとりました。イとが、ドアをあけてツカツカとはいってきました。そして、じょうなボーイ長と、同じくくっきょうなもうひとりのボー

二十面相はそういっておいて、ふたりの大男のボーイのほゃないかね。ところがね、きみ、たとえばこのとおりだ。」うだね。ここは鉄道ホテルだからと思って安心しているのじ

のすごい相好になって、いきなり明智を目がけてつき進んですると、ふたりの男は、たちまち二ひきの野獣のようなも「きみたち、明智先生にごあいさつ申しあげるんだ。」うをふりむきました。

明智は窓を背にして、キッと身がまえました。「待ちたまえ、ぼくをどうしようというのだ。」きます、

いありません。

うってわけさ。ハハハ……。りのボーイ君が、きみをいま、そのトランクの中へ埋葬しよか。中はからっぽだぜ。つまりきみの棺桶なのさ。このふた物にしては少し大きすぎるトランクがおいてあるじゃない「わからないかね。ほら、きみの足もとをごらん。ぼくの荷

外だったねえ。のものが、ホテルのボーイにはいりこんでいようとは少し意のものがの名探偵も、ちっとはおどろいたかね。ぼくの部下

か。

がね、ここにいるぼくの部下はふたりきりじゃない。じゃま くの借りきりの部屋なんだ。それから念のためにいっておく いや、きみ、声をたてたってむだだよ。両どなりとも、ぼ

わなにおちいったのです。それと知りながら、このんで火のああ、なんという不覚でしょう。名探偵は、まんまと敵のるんだぜ。」

中へとびこんだようなものです。これほど用意がととのって

いては、もうのがれるすべはありません。

の襲撃を終わるまで、とりこにしておこうという考えにちがの中へとじこめて、どこか人知れぬ場所へ運びさり、博物館とっては警察よりもじゃまになる明智小五郎です。トランクようなことはしないでしょうけれど、なんといっても、賊に血のきらいな二十面相のことですから、まさか命をうばう

- い運命なのでしょうか。ああ、ほんとうにそうなのでしょうりことなり、探偵にとって最大の恥辱を受けなければならなけれる。ああ、かれは帰朝そうそう、はやくもこの大盗賊のとております。名探偵の身にそなわる威力にうたれたのです。きましたが、今にもとびかかろうとして、ちょっとためらっふたりの大男は問答無益とばかり、明智の身辺にせまって

というように、だんだんくずれてくるではありませんか。ありませんか。そして、その笑顔が、おかしくてたまらないいしても、やっぱりあのほがらかな笑顔をつづけているではしかし、ごらんなさい、われらの名探偵は、この危急にさ

「ハハハ……。」

れたように口をポカンとあいて、立ちすくんでしまいました。 笑いとばされて、ふたりのボーイは、キツネにでもつまま

からいばりはよしたまえ。何がおかしいんだ。そ

れともきみは、おそろしさに気でもちがったのか。」

「明智君、

二十面相は相手の真意をはかりかねて、ただ毒口をたたく

ほかはありませんでした。

ここへ来てごらん。そして、窓の外をのぞいてごらん。みょ うなものが見えるんだから。」 お芝居がおもしろかったものだからね。だが、ちょっときみ、 「いや、しっけい、しっけい、つい、きみたちの大まじめな

じゃないか。へんなことをいって一寸のがれをしようなんて、 明智小五郎も、もうろくしたもんだねえ。」 「何が見えるもんか。そちらはプラットホームの屋根ばかり

いではいられませんでした。 でも、賊は、なんとなく気がかりで、窓のほうへ近よらな

こうにみょうなものがいるんだ。ほらね、こちらのほうだよ。」 「ハハハ……、もちろん屋根ばかりさ。だが、その屋根の向 明智は指さしながら、

じゃないか。あの子ども、なんだか見たような顔だねえ。」 うだね。小さな望遠鏡で、しきりと、この窓をながめている ホームに、黒いものがうずくまっているだろう。子どものよ 「屋根と屋根とのあいだから、ちょっと見えているプラット

と思います。そうです。お察しのとおり明智探偵の名助手小

読者諸君は、それがだれだか、もうとっくにお察しのこと

えているようすです。 鏡で、ホテルの窓をのぞきながら、何かのあいずを待ちかま 林少年です。小林君は例の七つ道具の一つ、万年筆型の望遠

か。 あ、 小林の小僧だな。 じゃ、 あいつは家へ帰らなかったの

いいつけているのだよ。」 いあわせて、その部屋の窓を、 「そうだよ。ぼくがどの部屋へはいるか、ホテルの玄関で問 注意して見はっているように

せんでした。 しかし、それが何を意味するのか、賊にはまだのみこめま

「それで、どうしようっていうんだ。**」**

まくで、明智につめよりました。 二十面相は、だんだん不安になりながら、 おそろしいけん

のだよ。」 かすれば、このハンカチが、ヒラヒラと窓の外へ落ちていく 「これをごらん。ぼくの手をごらん。きみたちがぼくをどう

ます。 外へ出ていて、その指先にまっ白なハンカチがつままれてい 見ると、明智の右の手首が、少しひらかれた窓の下部から、

五分もあればじゅうぶんだとは思わないかね。ぼくは五分や がかけつけて、ホテルの出入り口をかためるまで、そうだね、 ハハハ……、どうだい、この指をパッとひらこうかね、そう 十分、きみたち三人を相手に抵抗する力はあるつもりだよ。 にかけこむんだ。それから電話のベルが鳴る。 「これが、あいずなのさ。すると、あの子どもは駅の事務室 そして警官隊

というものだが。」 すれば、二十面相逮捕のすばらしい大場面が、見物できよう

か、やや顔色をやわらげていうのでした。 しばらく考えていましたが、けっきょく、不利をさとったの ホームの小林少年の姿とを、見くらべながら、くやしそうに 賊は、窓の外につきだされた明智のハンカチと、プラット

つまり、きみの自由とぼくの自由との、交換というわけだか いには、そのハンカチは落とさないですますつもりだろうね。 「で、もしぼくのほうで手をひいて、きみをぶじに帰すばあ

何もこんなまわりくどいハンカチのあいずなんかいりゃしな をとらえる考えは少しもないのだ。もしとらえるつもりなら、 い。小林君に、すぐ警察へうったえさせるよ。そうすれば、 いまごろはきみは警察のおりの中にいたはずだぜ。ハハハ… 「むろんだよ。さっきからいうとおり、ぼくのほうには今君

おれを逃がしたいのか。」 「だが、きみもふしぎな男じゃないか。そうまでして、この

「ウン、今やすやすととらえるのは、少しおしいような気が

も、ぬすみためた美術品の数々も、すっかり一網に手に入れするのさ。いずれ、きみをとらえるときには、大ぜいの部下 てしまうつもりだよ。少し欲ばりすぎているだろうかねえ。 ハハハ……。」

んでだまりこんでいましたが、やがて、ふと気をかえたよう 二十面相は長いあいだ、さもくやしそうに、くちびるをか

に、にわかに笑いだしました。

うは、これでお別れとして、きみを玄関までお送りしよう。」 をひいてみたまでさ。けっして本気じゃないよ。では、きょ ア気を悪くしないでくれたまえ。今のは、ちょっときみの気 「さすがは明智小五郎だ。そうなくてはならないよ……。マ でも、探偵は、そんなあまい口に乗って、すぐ、ゆだんし

だねえ。まず、このふたりと、それから廊下にいるお仲間を、「お別れするのはいいがね。このボーイ諸君が少々目ざわり 台所のほうへ追いやってもらいたいものだねえ。」

てしまうほど、お人よしではありませんでした。

せるようにしました。 「これでいいかね。ほら、あいつらが階段をおりていく足音

るように命じ、入り口のドアを大きくひらいて、廊下が見通

賊は、べつにさからいもせず、すぐボーイたちに、たちさ

が聞こえるだろう。」

じょうぶです。少しはなれた部屋には、客もいるようすです めました。まさか鉄道ホテルぜんたいが賊のために占領され し、そのへんの廊下には、賊の部下でない、ほんとうのボー ているはずはありませんから、廊下へ出てしまえば、もう大 明智はやっと窓ぎわをはなれ、ハンカチをポケットにおさ

ボーイが、人待ち顔にたたずんでいます。 り口はあいたままで、二十歳ぐらいの制服のエレベーター・ エレベーターの前まで歩いていきました。エレベーターの入 ふたりは、まるで、親しい友だちのように、肩をならべて、

イも歩いているのですから。

明智はなにげなく、一足先にその中へはいりましたが、

びらがガラガラとしまって、エレベーターは下降しはじめま 「あ、ぼくはステッキ忘れた。きみは先へおりてください。 二十面相のそういう声がしたかと思うと、いきなり鉄のと

「へんだな。」

つめています。 るようすもなく、 明智は早くもそれとさとりました。しかし、べつにあわて じっとエレベーター・ボーイの手もとを見

四ほうを壁でとりかこまれた個所までくだると、とつぜんパ すると案のじょう、エレベーターが二階と一階との中間の、

ッタリ運転がとまってしまいました。

「どうしたんだ。」

ださい。じきなおりましょうから。」 「すみません。機械に故障ができたようです。少しお待ちく ボーイは、申しわけなさそうにいいながら、しきりに、 運

転機のハンドルのへんをいじくりまわしています。

明智はするどくいうと、ボーイの首すじをつかんで、グー

「なにをしているんだ。のきたまえ。」

ついてしまいました。 ですから、ボーイは思わずエレベーターのすみにしりもちを ッとうしろに引きました。それがあまりひどい力だったもの

い知らないと思っているのか。」 「ごまかしたってだめだよ。ぼくがエレベーターの運転ぐら しかりつけておいて、ハンドルをカチッとまわしますと、

> じめたではありませんか。 なんということでしょう。エレベーターは苦もなく下降をは

みつけました。その眼光のおそろしさ。年若いボーイはふるだしりもちをついているボーイの顔を、グッとするどくにら えあがって、思わず右のポケットの上を、なにかたいせつな ものでもはいっているようにおさえるのでした。 階下につくと、明智はやはりハンドルをにぎったまま、ま

を入れ、一枚の紙幣を取りだしてしまいました。千円札です。 た。いきなりとびついていって、おさえているポケットに手 エレベーター・ボーイは、二十面相の部下のために、千円札 機敏な探偵は、その表情と手の動きを見のがしませんでし

の中にとじこめておいて、そのひまに階段のほうからコッソ 賊はそうして、五分か十分のあいだ、探偵をエレベーター

で買収されていたのでした。

リ逃げさろうとしたのです。いくら大胆不敵の二十面相でも、

もう正体がわかってしまった今、探偵と肩をならべて、ホテ 勇気はなかったのです。明智はけっしてとらえないといって いますけれど、賊の身にしては、 ルの人たちや泊まり客のむらがっている玄関を、通りぬける それをことばどおり信用す

関へかけだしました。すると、ちょうどまにあって、二十面 相の辻野氏が表の石段を、ゆうぜんとおりていくところでし るわけにはいきませんからね。 名探偵はエレベーターをとびだすと、廊下をごとびに、玄

「や、しっけい、しっけい、ちょっとエレベーターに故障が

明智は、やっぱりにこにこ笑いながら、うしろから辻野氏あったものですからね、ついおくれてしまいましたよ。」

の肩をポンとたたきました。

るほどおどろいたのも、けっしてむりではありません。きり成功するものと信じきっていたのですから。顔色をかえったらありませんでした。賊はエレベーターの計略が、てっハッとふりむいて、明智の姿をみとめた、辻野氏の顔とい

おりに長くとめておくわけにはいきませんでした。あしからエレベーターの動かし方を知っていたので、どうもご命令どのまれてきました。ボーイがいってましたよ、相手が悪くてのエレベーター・ボーイから、あなたにわたしてくれってた顔色がよくないようですね。ああ、それから、これをね、あ「ハハハ……、どうかなすったのですか、辻野さん、少しお

相手の手ににぎらせますと、を、二十面相の面前で二―三度ヒラヒラさせてから、それを明智はさもゆかいそうに、大笑いをしながら、例の千円札

ずってね。ハハハ・・・・・。」

「ではさようなら。いずれ近いうちに。」

もなく、あとをも見ずに立ちさってしまいました。といったかと思うと、クルッと向きをかえて、なんのみれん

偵のうしろ姿を見おくっていましたが、辻野氏は千円札をにぎったまま、あっけにとられて、

「チェッ。」

自動車を呼ぶのでした。と、いまいましそうに舌うちすると、そこに待たせてあった

の恥辱はないわけです。てもらったわけですから、二十面相の名にかけて、これほどもとらえようと思えばとらえられるのを、そのまま見のがしみごとに探偵の勝利に帰しました。賊にしてみれば、いつでこのようにして名探偵と大盗賊の初対面の小手しらべは、

「このしかえしは、きっとしてやるぞ。」

のろいのことばをつぶやかないではいられませんでした。彼は明智のうしろ姿に、にぎりこぶしをふるって、思わず

二十面相の逮捕

あいつは、どこにいますか。」「あ、明智さん、今、あなたをおたずねするところでした。

ませんでした。ぬかに、とつぜん呼びとめられて、立ちどまらなければなり明智探偵は、鉄道ホテルから五十メートルも歩いたか歩か

「ああ、今西君。」

それは警視庁捜査課勤務の今西刑事でした。

た。まさか逃がしておしまいになったのじゃありますまい「ごあいさつはあとにして、辻野と自称する男はどうしまし

ね。」

名 探

たずねてもなかなか言わないのです。しかし、手をかえ品をけたのです。あの子どもは、じつに強 情ですねえ。いくら「小林君がプラットホームでへんなことをしているのを見つ「きみは、どうしてそれを知っているんです。」

そこで、あなたに応援するために、かけつけてきたというわ さっそく外務省へ電話をかけてみましたが、辻野さんはちゃ 省の辻野という男といっしょに、鉄道ホテルへはいられたこ んと省にいるんです。そいつはにせものにちがいありません。 と、その辻野がどうやら二十面相の変装らしいことなどをね。 かえて、とうとう白状させてしまいましたよ。あなたが外務

「それはご苦労さま、だが、あの男はもう帰ってしまいまし

たよ。」

けですよ。」

はなかったのですか?」 「エッ、帰ってしまった? それじゃ、そいつは二十面相で

「二十面相でした。なかなかおもしろい男ですねえ。」

です。二十面相とわかっていながら、警察へ知らせもしない で、逃がしてやったとおっしゃるのですか。」 「明智さん、明智さん、あなた何をじょうだん言っているん

今西刑事はあまりのことに、明智探偵の正気をうたがいた

「ぼくに少し考えがあるのです。」

くなるほどでした。

明智は、すまして答えます。

「考えがあるといって、そういうことを、一個人のあなたが、

賊とわかっていながら、逃がすという手はありません。ぼく は職務としてやつを追跡しないわけにはいきません。やつは かってにきめてくださってはこまりますね。いずれにしても

どちらへ行きました。自動車でしょうね。」 刑事は、民間探偵のひとりぎめの処置を、しきりと憤慨し

> くむだでしょうよ。」 「きみが追跡するというなら、それはご自由ですが、

ています。

号をしらべて、手配をします。」 「あなたのおさしずは受けません。 ホテルへ行って自動車番

てますよ。一三八八七番です。」 「ああ、車の番号なら、ホテルへ行かなくても、 ぼくが知っ

あとを追おうともなさらないのですか。」 「え、あなたは車の番号まで知っているんですか。そして、

あらそうこのさい、無益な問答をつづけているわけにはいき 刑事はふたたびあっけにとられてしまいましたが、一刻を

とぶように走っていきました。 ません。番号を手帳に書きとめると、すぐ前にある交番へ、

と、またたく間につたえられました。

野氏に化けて乗っているのだ。」 「一三八八七番をとらえよ。その車に二十面相が外務省の辻

どらせたことでしょう。われこそはその自動車をつかまえて、 目をさらのようにし、手ぐすね引いて待ちかまえたことは申 凶賊逮捕の名誉をになわんものと、交番という交番の警官が、 この命令が、東京全都のおまわりさんの心を、どれほどお

すまでもありません。 怪盗がホテルを出発してから、二十分もしたころ、幸運に

番に勤務している一警官でありました。 も一三八八七番の自動車を発見したのは、 新宿区戸塚町の交しんじゅくくとっかまち

交番の前を、 たのです。 それはまだ若くて、勇気に富んだおまわりさんでしたが、 規定以上の速力で、矢のように走りぬけた一台 ヒョイと見ると、その番号が一三八八七番だっ

ました。そして、そのあとから走ってくる空車を、呼びとめ るなり、とびのって、 若いおまわりさんは、ハッとして、思わず武者ぶるいをし

「あの車だッ、あの車に有名な二十面相が乗っているんだ。

が破裂するまで走ってくれッ。」 走ってくれ。スピードはいくら出してもかまわん、エンジン

とさけぶのでした。

した。車は新しく、エンジンに申しぶんはありません。走る、 しあわせと、その自動車の運転手がまた、心きいた若者で

走る、まるで鉄砲玉みたいに走りだしたのです。

悪魔のように疾走する二台の自動車は、 道行く人の目を見

はらせないではおきませんでした。

び腰になって、一心不乱に前方を見つめ、何か大声にわめい ているではありませんか。 見れば、うしろの車には、ひとりのおまわりさんが、およ

弥次馬がさけびながら、車といっしょにかけだします。そ「捕り物だ、捕り物だ!」

しまうというさわぎです。 れにつれて犬がほえる。歩いていた群衆がみな立ちどまって

魔のように、ただ、先へ先へととんでいきます。 それらの光景をあとに見すてて、 通り

> もできないのです。白昼の都内では、車をとびおりて身を 大環状線に出て、王子の方角に向かって疾走しはじめましだいかだいがいます。 た。賊はむろん追跡を気づいてます。しかし、どうすること 車にぶつかりそうになって、あやうくよけたことでしょう。 細い道ではスピードが出せないものですから、賊の車は いく台の自動車を追いぬいたことでしょう。いくたび自動

響が聞こえました。アア、賊はとうとうがまんしきれなくな 池、袋をすぎたころ、前の車からパーンというはげしい音

かくすなんて芸当は、できっこありません。

画ではありません。にぎやかな町のなかで、ピストルなどう ってみたところで、今さらのがれられるものではないのです。 って、例のポケットのピストルを取りだしたのでしょうか。 いや、いや、そうではなかったのです。西洋のギャング映

がつきたのです。 ピストルではなくて、車輪のパンクした音でした。賊の運 それでも、しばらくのあいだは、むりに車を走らせていま

自動車を横にされては、もうどうすることもできません。 車に追いぬかれてしまいました。逃げる行く手にあたって、 したが、いつしか速度がにぶり、ついにおまわりさんの自動

人だかり。やがて付近のおまわりさんもかけつけてきます。 ああ、 車は二台ともとまりました。たちまちそのまわりに黒山の 読者諸君、辻野氏は、とうとうつかまってしまいま

した。

「二十面相だ、

二十面相だ!」

だれいうとなく、群衆のあいだにそんな声がおこりました。

塚の交番の若いおまわりさんと、三人にまわりをとりまかれ、 賊は、付近からかけつけた、ふたりのおまわりさんと、戸

しかりつけられて、もう抵抗する力もなくうなだれています。

「なんて、ふてぶてしいつらをしているんだろう。」 「二十面相がつかまった!」

「でも、あのおまわりさん、えらいわねえ。」

「おまわりさん、ばんざーい。」

はドッと歓声がわきあがりました。手をやいていた希代の凶警視庁に到着して、ことのしだいが判明しますと、庁内に 留置するには、あまりに大物だからです。 戦のおかげだというので、ふたりは胴あげされんばかりの人 賊が、なんと思いがけなくつかまったことでしょう。これと てきた車に同乗して、警視庁へと急ぎます。管轄の警察署に いうのも、今西刑事の機敏な処置と、戸塚署の若い警官の奮 群衆の中にまきおこる歓声の中を、警官と賊とは、追跡し

どうかをたしかめるために、証人を呼びださなければなりま 知ったものがありません。何よりも先に、人ちがいでないか ました。相手は、変装の名人のことですから、だれも顔を見 しぬかれたうらみを、わすれることができなかったからです。 でした。係長は羽柴家の事件のさい、賊のためにまんまと出 さっそく調べ室で、げんじゅうな取りしらべがはじめられ この報告を聞いて、だれよりも喜んだのは、中村捜査係長

気です。

賊の姿を一目見るやいなや、これこそ、外務省の辻野氏と偽名 うどそのとき、名探偵は外務省に出むいて、るす中でしたの ほおの、かわいらしい小林少年があらわれました。そして、 で、かわりに小林少年が出頭することになりました。 やがてほどもなく、いかめしい調べ室に、りんごのような

「わしがほんものじゃ」

した、あの人物にちがいないと証言しました。

「この人でした。この人にちがいありません。」

「ハハハ……、どうだね、きみ、子どもの眼力にかかっちゃ 小林君は、キッパリと答えました。

もうだめだ。きみは二十面相にちがいないのだ。」 かなわんだろう。きみが、なんといいのがれようとしたって、

と思うと、うれしくてしかたがありませんでした。勝ちほこ 中村係長は、うらみかさなる怪盗を、とうとうとらえたか

ったな。わしは、あいつが有名な二十面相だなんて、少しも ったように、こういって、真正面から賊をにらみつけました。 「ところが、ちがうんですよ。こいつあ、こまったことにな

知らなかったのですよ。」

紳士に化けた賊は、あくまでそらとぼけるつもりらしく、

へんなことをいいだすのです。

「なんだって? きみのいうことは、ちっともわけがわから

「わしもわけがわからんのです。すると、あいつがわしに化

明智小五郎の自宅に電話がかけられました。しかし、ちょ

けてわしを替え玉に使ったんだな。」

て、もうその手には乗らんよ。」 「おいおい、いいかげんにしたまえ。 いくらそらとぼけたっ

「いやいや、そうじゃないんです。 まあ、 落ちついて、

の説明を聞いてください。わしは、こういうものです。 けっ わし

して、二十面相なんかじゃありません。」

紳士はそういいながら、今さら思いだしたように、 ポケッ

れには『松下庄兵衛』とあって、杉並区のあるアパートの住トから名刺入れを出して、一枚の名刺をさしだしました。そ

所も、 印刷してあるのです。

ひとり者ですがね。きのうのことでした。日比谷公園をブラまして、今はまあ失業者という身のうえ、アパート住まいの 「わしは、このとおり松下というもので、少し商売に失敗し

のです。その男が、 ブラしていて、ひとりの会社員ふうの男と知りあいになった みょうな金もうけがあるといって、教え

てくれたのですよ。

なんですからね、五千円の手あてがほしかったですよ。 に、五千円の手あてを出すというのです。うまい話じゃあり に、東京中を乗りまわしてくれれば、自動車代はただのうえ つまり、きょう一日、自動車に乗って、その男のいうまま わしはこんな身なりはしていますけれど、失業者

ドクドと話しかけましたが、わしはそれをおしとどめて、事 情なんか聞かなくてもいいからといって、さっそく承知して その男は、これには少し事情があるのだといって、何かク

しまったのです。

その男を一目見て、びっくりしました。気がちがったのじゃ をとめて、その中にこしかけて待っていたのですが、三十分 らく待っていてくれというものだから、ホテルの前に自動車 もしたかとおもうころ、ひとりの男が鉄道ホテルから出てき いいつけなんです。たらふくごちそうになって、ここでしば てな。おひるは鉄道ホテルで食事をしろという、ありがたい て、わしの車をあけて、中へはいってくるのです。 そこで、きょうは朝から自動車でほうぼう乗りまわしまし わしは、

キまで、このわしと一分一厘もちがわないほど、そっくりそはいってきた男は、顔から、背広から、がいとうからステッ な、へんてこな気持でした。 のままだったからです。まるでわしが鏡にうつっているよう

ないかと思ったくらいです。なぜといって、そのわしの車へ

りませんか。その男は、わしの車へはいってきたかと思うと、 こんどは反対がわのドアをあけて、外へ出ていってしまった あっけにとられて見ていますとね、ますますみょうじゃあ

のです。

通りすぎながら、みょうなことをいいました。 通りすぎただけなんです。そのとき、その男は、 つまり、そのわしとそっくりの紳士は、自動車の客席を、 わしの前を

『さあ、すぐに出発してください。どこでもかまいません。

全速力で走るのですよ。』

あの鉄道ホテルの前にある、地下室の理髪店の入り口へ、ス ッと姿をかくしてしまいました。わしの自動車は、ちょうど こんなことをいいのこして、そのまま、ごぞんじでしょう、

その地下室の入り口の前にとまっていたのですよ。

ままになるという約束ですから、わしはすぐ運転手に、フルなんだかへんだなとは思いましたが、とにかく先方のいう

・スピードで走るようにいいつけました。

走れ走れとどなったのですよ。れど、わしは、みょうにおそろしくなりましてな。運転手に車があることに気づきました。なにがなんだかわからないけ早稲田大学のうしろのへんで、あとから追っかけてくる自動や世代のら、どこをどう走ったか、よくもおぼえませんが、

二十面相のやつの替え玉に使われたというわけですね。みると、わしはたった五千円の礼金に目がくれて、まんまとそれからあとは、ご承知のとおりです。お話をうかがって

うに、わしの顔や服装を、そっくりまねやがったんです。いつこそわしの替え玉です。まるで、写真にでもうつしたよいやいや、替え玉じゃない。わしのほうがほんもので、あ

いつのほうがにせ者です。おわかりになりましたかな。」わしは正 真 正 銘の松下庄兵衛です。わしがほんもので、あそれがしょうこに、ほら、ごらんなさい。このとおりじゃ。

てみせたりするのでした。の頭の毛を、力まかせに引っぱってみせたり、ほおをつねっ、松下氏はそういって、ニューッと顔を前につきだし、自分

げての、凶賊逮捕の喜びも、ぬか喜びに終わってしまいまし賊のためにまんまといっぱいかつがれたのです。警視庁をあああ、なんということでしょう。中村係長は、またしても、

た。

められたのです。みますと、松下氏は少しもあやしい人物でないことがたしかのちに、松下氏のアパートの主人を呼びだして、しらべて

京駅で明智深偵をおそうためには、これだけの用意がしてあくれにしても、二十面相の用心ぶかさはどうでしょう。東

ベーター係を味方にしていたうえに、この松下という替え玉ったのです。部下を空港ホテルのボーイに住みこませ、エレ京駅で明智探偵をおそうためには、これだけの用意がしてあ

紳士までやといいれて、逃走の準備をととのえていたのです。 替え玉といっても、二十面相にかぎっては、自分によく似

りません。相手はだれでもかまわない。口、車に乗りそうないれた人物に、こちらで化けてしまうのですから、わけはあおそろしい変装の名人のことです。手あたりしだいにやといた人をさがしまわる必要は、少しもないのでした。なにしろ、

者の好人物にちがいありませんでした。 そういえば、この松下という失業紳士は、いかにものんき

お人よしをさがしさえすればよかったのです。

二十面相の新弟子

るのでした。小林少年と、お手伝いさんひとりの、質素な暮らしをしてい小林少年と、お手伝いさんひとりの、質素な暮らしをしていりました。名探偵は、まだ若くて美しい文代夫人と、助手の明智小五郎の住宅は、港区竜 土 町の閑静なやしき町にあ

たのは、もう夕方でしたが、ちょうどそこへ警視庁へ呼ばれー明智探偵が、外務省からある友人の宅へたちよって帰宅し

はいって、二十面相の替え玉事件を報告しました。 ていた小林君も帰ってきて、洋館の二階にある明智の書斎へ

には気のどくだったね。」 「たぶん、そんなことだろうと思っていた。しかし、中村君

名探偵は、にが笑いをうかべていうのでした。

「先生、ぼく少しわからないことがあるんですが。」 小林少年は、いつも、ふにおちないことは、できるだけ早

せてくださらなかったのです。博物館の盗難をふせぐのにも、 ぼくにもわかるのですけれど、なぜあのとき、ぼくに尾行さ く、勇敢にたずねる習慣でした。 「先生が二十面相をわざと逃がしておやりになったわけは、

あいつのかぐれがが知れなくては、こまるんじゃないかと思 いますが。」 明智探偵は小林少年の非難を、うれしそうににこにこして

林少年を手まねきしました。 聞いていましたが、立ちあがって、 窓のところへ行くと、小

よ。 「それはね。二十面相のほうで、ぼくに知らせてくれるんだ なぜだかわかるかい。さっきホテルで、ぼくはあいつを、

侮辱だか、きみには想像もできないくらいだよ。 とらえようともしないで逃がしてやるのが、どんなひどい じゅうぶんはずかしめてやった。あれだけの凶賊を、探偵が

うように仕事もできないのだから、どうかしてぼくをいうじ いほどにくんでいる。そのうえ、ぼくがいては、これから思 二十面相は、あのことだけでも、ぼくをころしてしまいた

> ゃま者を、なくしようと考えるにちがいない。 ごらん、窓の外を。ホラ、あすこに紙芝居屋がいるだろう。

立ちどまって、この窓を、見ぬようなふりをしながら、いっ こんなさびしいところで、紙芝居が荷をおろしたって、商売 しょうけんめいに見ているのだよ。」 になるはずはないのに、あいつはもうさっきから、あすこに

ているのです。 いかにも、ひとりの紙芝居屋が、うさんぐさいようすで立っ いわれて、小林君が、明智邸の門前の細い道路を見ますと、

りに来ているんですね。」

「じゃ、あいつ二十面相の部下ですね。

先生のようすをさぐ

くても、先方からちゃんと近づいてくるだろう。あいつにつ ゃないか。」 いていけば、しぜんと、二十面相のかぐれがもわかるわけじ 「そうだよ。それごらん。べつに苦労をしてさがしまわらな

「じゃ、ぼく、姿をかえて尾行してみましょうか。」

小林君は気が早いのです。

あるからね。相手は、なんといってもおそろしく頭のするど いやつだから、うかつなまねはできない。 「いや、そんなことしなくてもいいんだ。ぼくに少し考えが

どろくんじゃないぜ。ぼくは、けっして二十面相なんかに、 かわったことが、おこるかもしれないよ。だが、けっしてお

なことがあっても、それも一つの策略なのだから、けっして 出しぬかれやしないからね。たとえぼくの身があぶないよう ところでねえ、小林君、あすあたり、ぼくの身辺に、少し

心配するんじゃないよ。いいかい。」

るなといわれても、心配しないわけにはいきませんでした。 「先生、何かあぶないことでしたら、ぼくにやらせてくださ そんなふうに、しんみりといわれますと、小林少年は、す 先生に、もしものことがあってはたいへんですから。」

明智探偵は、あたたかい手を少年の肩にあてていうのでし

「ありがとう。」

敗したことがあったかい……。心配するんじゃないよ。心配 するんじゃないよ。」 ていたまえ。きみも知っているだろう。ぼくが一度だって失 「だが、きみにはできない仕事なんだよ。まあ、ぼくを信じ

さて、その翌日の夕方のことでした。

通りかかる人に、何か口の中でモグモグいいながら、おじぎ をしております。 んに、きょうはひとりの乞食がすわりこんで、ほんの時たま 明智探偵の門前、ちょうど、きのう紙芝居が立っていたへ

うぼうにつぎのあたった、ぼろぼろにやぶれた着物を着て、 いるありさまは、いかにもあわれに見えます。 一枚のござの上にすわって、寒そうにブルブル身ぶるいして にしめたようなきたない手ぬぐいでほおかむりをして、ほ

内からもれてきました。

この乞食のようすが一変するのでした。今まで低くたれてい た首を、ムクムクともたげて、顔いちめんの無精ひげの中か ところが、ふしぎなことに、往来に人通りがとだえますと、

ら、するどい目を光らせて、目の前の明智探偵の家を、ジロ

ジロとながめまわすのです。

の一挙よ 置が窓のすぐ近くなものですから、乞食のところから、 が、三時間ほどで帰宅すると、往来からそんな乞食が見はっ 机に向かって、しきりに何か書きものをしています。その位 ているのを、知ってか知らずにか、表に面した二階の書斎で、 明智探偵は、その日午前中は、どこかへ出かけていました 動が、手にとるように見えるのです。

りつづけていました。明智探偵のほうも、 それから夕方までの数時間、乞食はこんきよく地面にすわ こんきよく窓から

方になって、ひとりの異様な人物が、明智邸の低い石門の中 へはいっていきました。 午後はずっと、ひとりの訪問客もありませんでしたが、夕

見える机に向かいつづけていました。

ぶっています。浮浪人といいますか、ルンペンといいますか、 見るからにうすきみの悪いやつでしたが、そいつが門をはい ろくうずめている無精ひげ、きたない背広服を、メリヤスの シャツの上にじかに着て、しまめもわからぬ鳥打ち帽子をか ってしばらくしますと、とつぜんおそろしいどなり声が、門 その男は、のびほうだいにのばした髪の毛、顔中をうすぐ

ゆっくりお礼が申してえんだッ。なんだと、おれに用はねえ? うちの中へはいって、おめえにもおかみさんにも、 お礼をいいに来たんだ。さあ、その戸をあけてくれ。 「やい、 明智、よもやおれの顔を見わすれやしめえ。おらあ

んだ。」 るんだ。さあ、そこをどけ。 そっちで用がなくっても、こっちにゃ、ウントコサ用があ おらあ、きさまのうちへはいる



までひびきわたっています。

めました。 しのびよって、電柱のかげから中のようすをうかがいはじ きあがり、ソッとあたりを見まわしてから、石門のところへ それを聞くと、往来にすわっていた乞食が、ムクムクとお

「ちくしょうめ、おぼえていやがれ。」

ポーチの石段へ片足かけた浮浪人が、明智の顔の前でにぎり たが、ますますつのる暴言に、もうがまんができなくなった こぶしをふりまわしながら、しきりとわめきたてています。 見ると、正面のポーチの上に明智小五郎がつっ立ち、その 明智は少しもとりみださず、しずかに浮浪人を見ていまし

のか、

と、どなったかと思うと、いきなり浮浪人をつきとばしまし 「ばかッ。用がないといったらないのだ。出ていきたまえ。」

きざま、明智めがけて組みついていきます。 とふみこたえて、もう死にものぐるいで、「ウヌ!」とうめ つきとばされた男は、ヨロヨロとよろめきましたが、グッ

柔道三段の明智探偵にかなうはずはありません。たちまち、 くとざされ、明智の姿は、もうそこには見えませんでした。 がて、ようやく起きあがったときには、ポーチのドアはかた 腕をねじあげられ、ヤッとばかりに、ポーチの下の敷石の上 も引けども、動くものではありません。 わせていましたが、中から締まりがしてあるらしく、おせど ま、しばらく、痛さに身動きもできないようすでしたが、 に、投げつけられてしまいました。男は、投げつけられたま しかし、格闘となってはいくら浮浪人がらんぼうでも、 浮浪人はポーチへあがっていって、ドアをガチャガチャい

浪人をやりすごしておいて、そのあとからそっとつけていき ばをブツブツつぶやきながら、門の外へ出てきました。 ましたが、明智邸を少しはなれたところで、いきなり、 「おい、おまえさん。」 さいぜんからのようすを、すっかり見とどけた乞食は、浮 男は、とうとうあきらめたものか、口の中でのろいのこと

と、男に呼びかけました。

「エッ。」

びっくりしてふりむくと、そこに立っているのは、きたな

らしい乞食です。

「なんだい、おこもさんか。 おらあ、ほどこしをするような

金持じゃあねえよ。」

浮浪人はいいすてて、立ちさろうとします。

「いや、そんなことじゃない。少しきみにききたいことがあ

るんだ。」

「なんだって?」

乞食の口のきき方がへんなので、男はいぶかしげに、その

顔をのぞきこみました。

だ。けさっから、明智の野郎の見はりをしていたんだよ。だ が、きみも明智には、よっぽどうらみがあるらしいようすだ は、きみだから話すがね。おれは二十面相の手下のものなん 「おれはこう見えても、ほんものの乞食じゃないんだ。じつ

んだぜ。」

ああ、 やっぱり、乞食は二十面相の部下のひとりだったの

です。

ぶちこまれたんだ。どうかして、このうらみを返してやりた 「うらみがあるどころか、おらあ、あいつのために刑務所へ

いと思っているんだ。」

「赤井寅三ってもんだ。」「名まえはなんていうんだ。」

慨するのでした。 浮浪人は、またしても、にぎりこぶしをふりまわして、憤

「どこの身うちだ。」

親分なんてねえ。 一本立ちよ。」

「フン、そうか。」

乞食はしばらく考えておりましたが、 やがて、何を思った

か、こんなふうに切りだしました。

「二十面相という親分の名まえを知っているか。」

「そりゃあ聞いているさ。すげえ腕まえだってね。」

物館の国宝を、すっかりぬすみだそうという勢いだからね… 「すごいどころか、まるで魔法使いだよ。こんどなんか、博

…。ところで、二十面相の親分にとっちゃ、この明智小五郎 って野郎は、敵も同然なんだ。明智にうらみのあるきみとは、

はないか。そうすりゃあ、うんとうらみが返せようというも おなじ立ち場なんだ。きみ、二十面相の親分の手下になる気

赤井寅三は、それを聞くと、乞食の顔を、まじまじとなが

めていましたが、やがて、ハタと手を打って、

「よし、おらあそれにきめた。兄貴、その二十面相の親分に、

と、弟子入りを所望するのでした。 ひとつひきあわせてくんねえか。」

なら、親分はきっと喜ぶぜ。だがな、その前に、親分へのみ 「ウン、ひきあわせるとも。明智にそんなうらみのあるきみ

やげに、ひとつ手がらをたてちゃどうだ。それも、明智の野 郎をひっさらう仕事なんだぜ。」

をひくめていうのでした。 乞食姿の二十面相の部下は、 あたりを見まわしながら、 声

名探偵の危急

つのことなんだ。」 ねえ。ぜひ手つだわせてくんねえ。で、それはいったい、い つあおもしれえ。ねがってもないことだ。手つだわせてくん 「ええ、なんだって、あの野郎をひっさらうんだって、そい

赤井寅三は、もうむちゅうになってたずねるのです。

「今夜だよ。」

ひっさらおうというんだね。」 「え、え、今夜だって。そいつあすてきだ。 だが、どうして

て探偵をたのみに行かせんだ。 てて、明智の野郎の喜びそうな、こみいった事件をこしらえ 美しい女があるんだ。その女を、どっかの若い奥さんにした 夫したんだよ。というのはね、子分のなかに、すてきもねえ 「それがね、やっぱり二十面相の親分だ、うまい手だてを工

自動車の運転手も仲間のひとりなんだ。 車に乗せてつれだすんだ。その女といっしょにだよ。むろん そして、すぐに家をしらべてくれといって、あいつを自動

がかよわい女なんだから、ゆだんをして、この計画には、ひ っかかるにきまっているよ。 むずかしい事件の大すきなあいつのこった。それに、相手

ているんだよ。あすこを通らなければならないような道順に 先まわりをして、明智を乗せた自動車がやってくるのを待っ で、おれたちの仕事はというと、ついこの先の青山墓地で、おれたちの仕事はというと、ついこの先の青山墓地

してあるんだ。

麻酔剤をかがせるというだんどりなんだ。麻酔剤もちゃんと 中へとびこみ、明智のやつを身動きのできないようにして、 ここに用意している。 る。するとおれときみとが、両がわからドアをあけて、 おれたちの待っている前へ来ると、自動車がピッタリとま

それから、ピストルが二丁あるんだ。 もうひとり仲間 が来

ることになっているもんだから。

けでもなんでもないんだから、きみに手がらをさせてやるよ。 しかし、かまやしないよ。そいつは明智にうらみがあるわ 乞食に化けた男は、そういって、やぶれた着物のふところ さあ、これがピストルだ。」

から、一丁のピストルをとりだし、赤井にわたしました。 「こんなもの、おらあうったことがねえよ。どうすりゃいい

人殺しが大きらいなんだ。このピストルはただおどかしだ つようなかっこうをすりゃいいんだ。二十面相の親分はね、 「なあに、弾丸ははいってやしない。引き金に指をあててう

ましたが、ともかくもポケットにおさめ、 弾丸がはいっていないと聞いて、赤井は不満らしい顔をし

「じゃ、すぐに青山墓地へ出かけようじゃねえか。」

と、うながすのでした。

り少しおくれるかも知れない。まだ二時間もある。どっかで 「いや、まだ少し早すぎる。七時半という約束だよ。それよ

飯を食って、ゆっくり出かけよう。」

て、それをやぶれた着物の上から、はおりました。ふろしき包みをほどくと、中から一枚の釣り鐘マントを出して食はいいながら、小わきにかかえていた、きたならしい

ほかは真のやみ、お化けでも出そうなさびしさでした。どりついたときには、トップリ日が暮れて、まばらな街燈のふたりが、もよりの安食堂で食事をすませ、青山墓地へた

き道で、宵のうちでもめったに自動車の通らぬ、やみの中で約束の場所というのは、墓地の中でももっともさびしいわ

ふたりはそのやみの土手に腰をおろして、じっと時のくる

のを待っていました。

の時計を見たら七時二十分だった。あれからもう十分以上、「いや、もうじきだよ。さっき墓地の入り口のところの店屋「おそいね。第一、こうしていると寒くってたまらねえ。」

えはじめました。つうちに、とうとう向こうから自動車のヘッド・ライトが見てきどきポツリポツリと話しあいながら、また十分ほど待たしかにたっているから、今にやってくるぜ。」

りやるんだぜ。」「おい、来たよ。来たよ、あれがそうにちがいない。しっか「おい、来たよ。来たよ、あれがそうにちがいない。しっか

ギギーとブレーキの音をたててとまったのです。 案のじょう、その車はふたりの待っている前まで来ると、

「ソレッ。

というと、ふたりは、やにわに、やみの中からとびだしまし

「きみは、あっちへまわれ。」

「よしきた。」

した。 人物へ、両方からニューッと、ピストルの筒口をつきつけまました。そして、いきなりガチャンとドアをひらくと客席の二つの黒い影は、たちまち客席の両がわのドアへかけより

でした。探偵は、二十面相の予想にたがわず、まんまと計略でした。探偵は、二十面相の予想にたがわず、ませんか。つまり四丁のピストルが、筒先をそろえて、客席になって、その手にはこれもピストルが光っているではありんをかまえています。それから、運転手までが、うしろ向きと同時に、客席にいた洋装の夫人も、いつのまにかピスト

「身動きすると、ぶっぱなすぞ。」にかかってしまったのでしょうか。

なしくしているので、賊のほうがぶきみに思うほどです。にもたれたまま、さからうようすはありません。あまりおとしかし、明智は、観念したものか、しずかに、クッションだれかがおそろしいけんまくで、どなりつけました。

「やっつけろ!」

うにしておさえていると、もうひとりは、ふところから取りんできました。そして、赤井が明智の上半身をだきしめるよ男と、赤井寅三の両人がおそろしい勢いで、車の中にふみこ低いけれど力強い声がひびいたかと思うと、乞食に化けた

-77

それから、やや五分もして、男が手をはなしたときには、口におしつけて、しばらくのあいだ力をゆるめませんでした。だした、ひとかたまりの白布のようなものを、手早く探偵の

さすがの名探偵も、薬物の力にはかないません。まるで死人

「ホホホ、もろいもんだわね。」のように、グッタリと気をうしなってしまいました。

-同乗していた洋装婦人が、美しい声で笑いました。

「おい、なわだ。早くなわを出してくれ。」

しても、身動きもできないように、しばりあげてしまいましると、赤井に手つだわせて、明智探偵の手足を、たとえ蘇生、乞食に化けた男は、運転手から、ひとたばのなわを受けと

というもんだ。おい、親分が待っているだろう。急ごうぜ。」これでやっとおれたちも、なんの気がねもなく仕事ができる「さあ、よしと。こうなっちゃ、名探偵もたわいがないね。

ました。行く先はいわずと知れた二十面相の巣くつです。乞食と赤井とが、客席におさまると、車はいきなり走りだし、ぐるぐる巻きの明智のからだを、自動車の床にころがして、

怪盗の巣くつ

を通りすぎ、暗い雑木林の中にポツンと建っている、一軒の町とえらびながら、走りに走って、やがて、代々木の明治神宮なった明智小五郎とを乗せた自動車は、さびしい町さびしい賊の手下の美しい婦人と、乞食と、赤井寅三と、気をうし

住宅の門前にとまりました。

らしく見えるのです。まったのか、窓から明りもささず、さもつつましやかな家庭北川十郎という表札がかかっています。もう家中が寝てしるれは七間か八間ぐらいの中流住宅で、門の柱には

りで、それが、ものすごく光って見えます。き、そこに二つの大きな目玉があらわれました。門燈のあかう音がして、門のとびらにつくってある小さなのぞき窓があおりて、門の呼びりんをおしますと、ほどもなくカタンとい運転手(むろんこれも賊の部下なのです)がまっ先に車を

「ウン、うまくいった。早くあけてくれ。」 目玉のぬしが、ささやくような小声でたずねました。「ああ、きみか、どうだ、しゅびよくいったか。」

えると、とびらはまたもとのようにピッタリとしめられましをかかえ、美しい婦人がそれを助けるようにして、門内に消だんなく身がまえをして、立ちはだかっているのです。見ると、門の内がわには、黒い洋服を着た賊の部下が、ゆ

るのでしょう。なくなってしまいました。どこか別のところに賊の車庫があました。そして、車は、矢のように走りだし、たちまち見えました。そして、車は、矢のように走りだし、たちまち見えひとりのこった運転手は、からになった自動車にとびのり

した。目もくらむような明るい電燈です。 の前に立ちますと、いきなり軒の電燈が、 門内では、明智をかかえた三人の部下が、玄関のこうし戸 パッと点火されま

ありませんでした。 ッとしましたが、彼をびっくりさせたのは、そればかりでは この家へはじめての赤井寅三は、あまりの明るさに、ギョ

けがお化けみたいに、空中からひびいてきたのです。 「ひとり人数がふえたようだな。そいつはいったい、だれだ。」 大きな人の声が聞こえてきました。だれもいないのに、 電燈がついたかと思うと、こんどは、どこからともなく、

です。 どうも人間の声とは思われないような、へんてこなひびき

まわしています。 新米の赤井はうすきみ悪そうに、 キョロキョロあたりを見

じゅうぶん信用していいのです。」 へ近づいて、その柱のある部分に口をつけるようにして、 「新しい味方です。明智に深いうらみを持っている男です。 すると、乞食に化けた部下が、ツカツカと玄関の柱のそば

「そうか、それなら、はいってもよろしい。」

るようです。

と、ひとりごとをしゃべりました。まるで電話でもかけてい

し戸が音もなくひらきました。 またへんな声がひびくと、まるで自動装置のように、こう

したんだよ。人目につかないように、この柱のかげに拡声器「ハハハ……、おどろいたかい。今のは奥にいる首領と話を

乞食に化けた部下が教えてくれました。

だからね。」

とマイクロホンがとりつけてあるんだ。

首領は用心ぶかい人

だろう。 一 「だけど、おれがここにいるってことが、どうして知れたん

「ウン、それも今にわかるよ。」 赤井は、まだふしんがはれません。

はいきません。 へはいって行きます。しぜん赤井もあとにしたがわぬわけに 相手はとりあわないで、明智をかかえて、グングン家の中

こしてうなずいてみせました。 からして立ちはだかっていましたが、 玄関の間には、またひとりのくっきょうな男が、かたをい 一同を見ると、にこに

十畳の空部屋で、首領の姿はどこにも見えません。 たどりつきましたが、みょうなことに、そこはガランとした 、 , ふすまをひらいて、廊下へ出て、いちばん奥まった部屋へ ⁷⁹

けて、何かしました。 女の部下が、ツカツカと床の間に近より、床柱の裏に手をか 乞食が何か、あごをしゃくってさしずをしますと、美しい

かと思うと、座敷のまんなかの畳が一枚、スーッと下へ落ち すると、どうでしょう。ガタンと、おもおもしい音がした

ていって、あとに長方形のまっくらな穴があいたではありま

「さあ、ここのはしご段をおりるんだ。」 いわれて、穴の中をのぞきますと、いかにもりっぱな木の

階段がついています。

知らぬ者には、首領がどこにいるのやら、 の関所、その二つを通りこしても、この畳のがんどう返しを ああ、 なんという用心ぶかさでしょう。表門の関所、玄関 まったく見当もつ

「なにをぼんやりしているんだ。早くおりるんだよ。」

かないわけです。

おりふたをされてしまいました。じつにゆきとどいた機械じ おりきると、頭の上で、ギーッと音がして畳の穴はもとのと 明智のからだを三人がかりでかかえながら、一同が階段を

くと、がんじょうな鉄の扉が行く手をさえぎっているのです。 うす暗い電燈の光をたよりに、コンクリートの廊下を少し行 地下室におりても、まだそこが首領の部屋ではありません。 かけではありませんか。

十面相その人でありました。これが、素顔かどうかはわかりしかけて、にこにこ笑っている三十歳ほどの洋服紳士が、二 りつけられたりっぱな洋室、その正面の大きな安楽イスにこ ら開かれて、パッと目を射る電燈の光、まばゆいばかりに飾 ン、トントンとたたきました。すると、重い鉄の扉が内部か 乞食に化けた男が、その扉を、妙なちょうしでトントント

「よくやった。よくやった。きみたちのはたらきはわすれな

ませんけれど、頭の毛をきれいにちぢれさせた、ひげのない

いよ。」 れしくてたまらないようすです。むりもありません。明智さ 大敵明智小五郎をとりこにしたことが、もう、う

> え、こうしてとじこめておけば、日本中におそろしい相手は ひとりもいなくなるわけですからね。

そこの床の上にころがされました。赤井寅三は、ころがした だけではたりないとみえて、気をうしなっている明智の頭を、 かわいそうな明智探偵は、ぐるぐる巻きにしばられたまま、

足で二度も三度もけとばしさえしました。 「ああ、きみは、よくよくそいつにうらみがあるんだね。そ

るものだ、それに、この男は日本にたったひとりしかいない 名探偵なんだからね。そんなに乱暴にしないで、なわをとい て、そちらの長イスにねかしてやりたまえ。」 れでこそぼくの味方だ。だが、もうよしたまえ。敵はいたわ

いました。 そこで、部下たちは、命じられたとおり、なわをといて、 さすがに首領二十面相は、とりこをあつかうすべを知って

明智探偵をイスに寝かせましたが、まだ薬がさめぬのか、 偵はグッタリしたまま、正体もありません。 探

物だ。それに、明智に深いうらみを持っているのが何より気 を味方にひきいれた理由を、くわしく報告しました。 「ウン、よくやった。赤井君は、なかなか役にたちそうな人 乞食に化けた男は、明智探偵誘かいのしだいと、赤井寅三

上きげんです。 にいったよ。」 二十面相は、名探偵をとりこにしたうれしさに、何もかも

てさせられましたが、それがすむと、この浮浪人はさいぜん そこで赤井はあらためて、弟子入りのおごそかな誓いをた

のです。から、ふしぎでたまらなかったことを、さっそくたずねたも

おかしらにあっしの姿が見えたんですかい。」えことがある。さっき玄関へきたばっかりの時に、どうして、んかこわくないはずですねえ。だが、どうもまだふにおちね「このうちのしかけにはおどろきましたぜ。これなら警察な

んだよ。」

「ハハハ……、それかい。それはね。ほら、ここをのぞいて

たいな物を指さしました。 首領は天井の一隅からさがっているストーブのえんとつみみたまえ。」

目をあててみました。て、えんとつの下のはしがかぎの手に曲がっている筒口へ、のぞいてみよといわれるものですから、赤井はそこへ行っ

「就想」には「就要ない」と、「ないでは、これになっているのもハッキリ見えます。 内がわに立っているのもハッキリ見えます。 いるではありませんか。さいぜんの門番の男が、忠実に門の関から門にかけての景色が、かわいらしく縮小されて写って関から門にかけての景色が、かわいらしく縮小されて写ってすると、これはどうでしょう。その筒の中に、この家の玄

ど、それらは、敵をあざむくほんの仮住まいにすぎないのさ。」が、きみが今まで見たのは、これがぼくのほかはだれも知らにもたりないのだよ。その中には、ぼくのほかはだれも知ら「だが、きみが今まで見たのは、この家の機械じかけの半分「だが、きみが今まで見たのは、この家の機械じかけの半分「だがと複雑に折れまがっているけれどね。」

「いずれきみにも見せるがね、この奥にぼくの美術室があるやも、そのかりのかぐれがの一軒だったのでしょうか。(すると、いつか小林少年が苦しめられた戸山ヶ原のあばら)

げんじゅうにしめきってあります。の金庫のような、複雑な機械じかけの大きな鉄のとびらが、どしゃべるのです。見れば彼の安楽イスのうしろに、大銀行ニ十面相は、あいかわらず上きげんで、しゃべりすぎるほ

見せてあげるよ。 が、ちゃんと分類して陳列してあるってわけだよ。そのうちが、ちゃんと分類して陳列してあるってわけだよ。その戦利品と広いのさ。そして、その部屋部屋に、ぼくの生 涯の戦利品いているね。この地下室は、地面に建っている家よりもずっ「この奥にいくつも部屋があるんだよ。ハハハ……、おどろ

の美術品は手に入れたも同然だとばかり、二十面相はさももう明智という大敵をのぞいてしまったのだから、それらきみも新聞で読んでいるだろう。例の国立博物館のたくさんはね、ごく近日どっさり国宝がはいることになっているんだ。まだ何も陳列していない、からっぽの部屋もある。そこへ見せてあげるよ。

少年探偵

心地よげに、カラカラとうち笑うのでした。

宅は大さわぎになりました。翌朝になっても明智探偵が帰宅しないものですから、るす

カデカと書きたて、ラジオもこれをくわしく報道しました。う大見出しで、明智の写真をおおきく入れて、この椿事をデざであったかと、人々は、はじめてそこへ気がついたのです。なてありましたので、そこをしらべますと、そんな婦人なんえてありましたので、そこをしらべますと、そんな婦人なん深値が同伴して出かけた、事件依頼者の婦人の住所がひか

われたように、感じないではいられませんでした。全都の空が、なんともいえない陰うつな、不安の黒雲におおここでも、人さえ集まれば、もう、この事件のうわさばかり、一千万の都民は、わがことのようにくやしがり、そこでもた。博物館があぶない。」

「ああ、たのみに思うわれらの名探偵は、賊のとりこになっ

思ったのは、探偵の少年助手小林芳雄君でした。 しかし、名探偵の誘かいを、世界中でいちばんざんねんに

しくって、たまらないのです。 ばかりでなく、名探偵の名誉のために、くやしくって、くやのとおりに報道するものですから、先生の身のうえが心配なのおいされたのだといいますし、新聞やラジオまでそて、夜がきても、先生はお帰りになりません。警察では二十一晩待ちあかして朝になっても、また、一日むなしく待っ

不安にたえぬ青ざめた顔に、わざと笑顔をつくっていらっしほどあって、涙を見せるようなことはなさいませんでしたが、なぐさめなければなりませんでした。さすが明智探偵の夫人そのうえ、小林君は自分の心配のほかに、先生の奥さんを

い計・略があるのですよ。それでこんなにお帰りがおくれるもんですか。きっと先生には、ぼくたちの知らない、何か深「奥さん大じょうぶですよ。先生が賊のとりこなんかになるいのです。

ことばもとぎれがちになるのでした。ゃべっているうちに、自分のほうでも不安がこみあげてきて、さめましたが、しかし、べつに自信があるわけではなく、しい林君は、そんなふうにいって、しきりと明智夫人をなぐ

んですよ。」

ません。のです。二十面相のかくれがを知る手がかりはまったくありのです。二十面相のかくれがを知る手がかりは、手も足も出ない名探偵助手の小林君も、こんどばかりは、手も足も出ない

せん。賊のほうでは、誘かいの目的をはたしてしまったのであがって表通りを見まわしても、それらしい者の影さえしまぐる手だてもあるんだがと、一縷の望みに、たびたび二階へをうろうろしていないかしら。そうすれば、賊の住み家をさりに来ていたが、もしやきょうもあやしい人物が、そのへん

ことでした。 そんなふうにして、不安の第二夜も明けて、三日めの朝の

すから、もうそういうことをする必要がないのでしょう。

ようにとびこんできた少年がありました。少年が、さびしい朝食を終わったところへ、玄関へ鉄砲玉の一その日はちょうど日曜日だったのですが、明智夫人と小林

おとといは、賊の部下が紙芝居屋に化けて、ようすをさぐ

ゔゔ、そここは、ひきしぶ丿り羽柴士ニ少耳が、かったってすきとおった子どもの叫び声に、おどろいて出てみますと、「ごめんください。小林君いますか。ぼく羽柴です。」

よっぽど大急ぎで走ってきたものとみえます。い顔をまっかに上気させて、息をきらして立っていました。おお、そこには、ひさしぶりの羽柴壮二少年が、かわいらして、できる。

い目にあわせた、あの大実業家羽柴壮太郎氏のむすこさんでそ、いつか自宅の庭園にわなをしかけて、二十面相を手ひど読者諸君はよもやおわすれではありますまい。この少年こ

のようにいたわって、応接室へみちびきました。 小林君は自分より二つばかり年下の壮二君を、弟かなんぞ

「で、なんかきゅうな用事でもあるんですか。」

なことをいうのでした。 たずねますと、壮二少年は、おとなのような口調で、こん

あのね、いつかの事件のときから、ぼく、きみを崇拝しちでしょう。それについてね、ぼく少し相談があるんです。「明智先生、たいへんでしたね。まだゆくえがわからないの

ったんです。
んなに話したら、ぼくと同じ考えのものが十人も集まっちゃったんです。それから、きみのはたらきのことを、学校でみゃったんです。そしてね、ぼくもきみのようになりたいと思まれた。

んです。むろん学校の勉強やなんかのじゃまにならないようそれで、みんなで、少年探偵団っていう会をつくっている

ひと息にそれだけ言ってしまうと、壮二君はかわいい目で、智先生のゆくえをさがそうじゃないかって言ってるんです。」は、きみのさしずを受けて、ぼくたち少年探偵団の力で、明な、きみんちへおみまいに来たんです。そしてね、みんなはまあいいって許してくだすったんです。

小林君は、なんだか涙が出そうになるのを、やっとがまん「ありがとう。」

小林少年をにらみつけるようにして、返事を待つのでした。

して、ギュッと壮二君の手をにぎりました。

でぼくをたすけてください。みんなで何か手がかりをさがしお喜びになるかもしれないですよ。ええ、きみたちの探偵団「きみたちのことを明智先生がお聞きになったら、どんなに

さんやおかあさんに申しわけないですからね。はやらせませんよ。もしものことがあると、みんなのおとうけれどね、きみたちはぼくとちがうんだから、危険なことだしましょう。

ないで、うまく手がかりをつかむ探偵方法なんです。んな人の話をきいてまわって、どんな小さなことでものがさ偵方法です。きみ、『聞きこみ』っての知ってますか。いろ

しかし、ぼくが今考えているのは、ちっとも危険のない探

すよ。こいし、相手がゆだんするから、きっとうまくいくと思いまこいし、相手がゆだんするから、きっとうまくいくと思いまなまじっか、おとななんかより、子どものほうがすばしっ

-8

その方角に向かって、ぼくらが今の聞きこみをやればいいん服装、それから自動車の行った方角もわかっているんだから、それにはね、おとといの晩、先生を連れだした女の人相や

さんだとか、そのへんに遊んでいる子どもなんかつかまえて、店の小僧さんでもいいし、 ご用聞きでもいいし、郵便配達

ですよ。

うへ行けばいいんです。ら大じょうぶだ。道がわかれるたびに、ひとりずつ、そのほら大じょうぶだ。道がわかれるたびに、ひとりずつ、そのほていて、見当をつけるのがたいへんだけれど、人数が多いかここでは方角がわかっていても、先になるほど道がわかれあきずに聞いてまわるんですよ。

何か手がかりがつかめるかもしれないですよ。」のようなである。そうして、きょう一日聞きこみをやれば、ひょっとしたら、

偵団のみんなを門の中へ呼んでもいいですか。」「ええ、そうしましょう。そんなことわけないや。じゃ、探

「ええ、どうぞ、ぼくもいっしょに外へ出ましょう。」

れて、門内へひきかえしてきました。して行ったかと思うと、まもなく、十人の探偵団員を引きつのところへ出たのですが、壮二君はいきなり門の外へかけだーそして、ふたりは、明智夫人のゆるしをえたうえ、ポーチー

した。 りを上級生ぐらいの、健康で快活な少年たちで!

まごまとさしずをあたえました。いさつしました。そして、明智探偵捜査の手段について、こ小林君は、壮二君の紹介で、ポーチの上から、みんなにあ

めにやせほそる思いでした。

ところが、問題の日の二日前、十二月八日には、またまた

むろん一同大賛成です。

「小林団長ばんざーい。」

まり、そんなことをさけぶ少年さえありました。 もうすっかり、団長に祭りあげてしまって、うれしさのあ

「じゃ、これから出発しましょう。」

の門外へ消えていくのでした。(そして、一同は少年団のように、足なみそろえて、明智邸)

午後四時

つ二十面相の事件に関係している中村係長などは、心配のたったいではありません。それに、これらの勇ましい少年たちは、一日一日とせまってきました。警視庁の人たちは、もういてもいではありません。それに、これらの勇ましい少年たちは、いではありません。それに、これらの勇ましい少年たちは、明智探偵ゆくえ不明のまま、おそろしい十二月十日は、一日一日とせまってきました。警視庁の人たちは、もういても物が、国家の宝物というのです。なにしろ盗難を予告された品が、国家の宝物というのですから、捜査課長や、ちょくせ物が、国家の宝物というのですから、捜査課長や、ちょくせいではありません。それに、これらの勇ましい少年たちは、一日一日とせまってきました。警視庁の人たちは、もういてもないのです。それに、これらの勇ましい少年たちは、一日一日とせまってきました。警視庁の人たちは、もういてもないのです。本名に、というに対して、のでは、のでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、というには、というには、いるのでは、いるのでは、いるのでは、というには、というには、というには、というには、というには、というには、というには、というには、というには、というには、というには、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、というには、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのでは、いるのではないるのでは、いるのではないるのでは、いるのでは、いるのではないないないるいるのではないないないないないないるいるのではないるのではないるのではないるのではないるのではないるいないるいる

相からの投書が、れいれいしく掲載されたことでした。す。というのは、その日の東京毎日新聞の社会面に、二十面世間のさわぎを大きくするようなできごとがおこったので

せることにしたのです。だちに、編集会議までひらいて、けっきょく、その全文をのだちに、編集会議までひらいて、けっきょく、その全文をのらの投書とあっては、問題にしないわけにはいきません。たませんが、このさわぎの中心になっている二十面相その人か東京毎日新聞は、べつに賊の機関新聞というわけではあり

と、 それは長い文章でしたが、意味をかいつまんでしるします

を通告する。 しいと感じたので、ここに東京都民諸君の前に、その時間ておいたが、もっと正確に約束するほうが、いっそう男ら「わたしはかねて、博物館襲撃の日を十二月十日と予告し

だきたい。警戒がげんじゅうであればあるほど、わたしの博物館長も警視総監も、できるかぎりの警戒をしていたそれは『十二月十日午後四時』である。

公表してしまったのです。そして、博物館長や警視総監に失おどろくべき大胆さですのに、そのうえ時間まではっきりとああ、なんたることでしょう。日づけを予告するだけでも、

冒険はそのかがやきをますであろう。」

までは、そんなばかばかしいことがと、あざわらっていた人これを読んだ都民のおどろきは申すまでもありません。今

礼せんばんな注意まであたえているのです。

々も、

もう笑えなくなりました。

いや、そればかりではありません。二十面相のことは、国ついて、警視総監といろいろ打ちあわせをしました。はいられなくなって、わざわざ警視庁に出向き、警戒方法にたが、そのえらい老学者さえも、賊の予告を本気にしないで当時の博物館長は、史学界の大先輩、ホールム文学博士でし

いて、激励のことばをあたえたほどです。臣や法務大臣などは、心配のあまり、警視総監を別室にまね務大臣方の閣議の話題にさえ、のぼりました。中でも総理大

うとう十二月十日となりました。そして、全都民の不安のうちに、むなしく日がたって、と

きました。 小使いが、ひとり残らず出勤して、それぞれ警戒の部署につをはじめとして、三人の係長、十人の書記、十六人の守衛や

国立博物館では、その日は早朝から、館長の北小路老博士

むろん当日は、表門をとじて、観覧禁止です。

. 警戒陣です。 内の要所要所にがんばって、アリのはいいるすきまもない大の 隊五十人が出張して、博物館の表門、裏門、塀のまわり、館に 警視庁からは、中村捜査係長のひきいる選りすぐった警官

ものしく殺気だってきました。年後三時半、あますところわずかに三十分、警戒陣はもの

博物館を見守っていなければ、がまんができなくなったのでもうじっとしていられなくなったのです。総監自身の目で、部長をしたがえてあらわれました。総監は、心配のあまり、(そこへ警視庁の大型自動車が到着して、警視総監が、刑事

す。

て北小路博士に面会しました。総監たちは一同の警戒ぶりを視察したうえ、館長室に通っ

た。恐縮です。」「わざわざ、あなたがお出かけくださるとは思いませんでし

に笑ってみせました。 老博士があいさつしますと、総監は、少しきまりわるそう

あの青二才の盗賊のために、一週間というもの、不眠症にか「アハハ……。」老博士は力なく笑って、「わたしも同様です。以来、こんなひどい恥辱を受けたことははじめてです。」ばならないとは、じつに恥辱です。わしは警視庁にはいってでね。たかが一盗賊のために、これほどのさわぎをしなけれ「いや、おはずかしいことですが、じっとしていられません

かっておるのですからな。」

らめっこするばかりでした。 室内の三人は、それきりだまりこんで、ただ壁の時計とにとに、二十面相の話をするのも腹だたしいのでしょう。 老博士は、おこったような口調でいいました。あまりのこ

分が経過したとき、沈黙にたえかねた刑事部長が、とつぜんけの針をながめているようすは、ものものしいというよりは、その三人がそれぞれ安楽イスにこしかけて、チラチラと、時事部長、背広姿でツルのようにやせた白髪白髯の北小路博士、時つぱな体格の警視総監、中肉中背で、八字ひげの美しい刑金モールいかめしい制服につつまれた、相撲とりのように

はないのですがね。」ですよ。今までの経験から考えても、こんな失策をやる男でですよ。今までの経験から考えても、こんな失策をやる男でたしは、あの男とは懇意にしていたんですが、どうもふしぎ「ああ、明智君は、いったいどうしているんでしょうね。わ

口を切りました。

あの男にはよい薬じゃろう。」といっていたそうだが、広言がすぎるよ。こんどの失敗は、できるものか。ひとりの力で二十面相をとらえてみせるなどいっても、たかが一民間探偵じゃないか。どれほどのことがるようなことをいうが、ぼくは不賛成だね。いくらえらいと「きみたちは、明智明智と、まるであの男を崇拝でもしてい

のドアがしずかにひらかれて、ひとりの人物があらわれまし刑事部長のことばが終わるか終わらぬときでした。館長室ですが、こんなさい、あの男がいてくれたらと思いますよ。」にそうもいいきれないのです。今も外で中村君と話したこと「ですが、明智君のこれまでの功績を考えますと、いちがい

て、部下の顔を見ました。

そのことばに、

総監は太ったからだをねじまげるようにし

明智が、おもおもしい口調でいいました。

「明智はここにおります。」

その人物がにこにこ笑いながら、よく通る声でいったので

「おお、明智君!」

刑事部長がイスからとびあがってさけびました。

頭の毛をモジャモジャにした、いつにかわらぬ明智小五郎そそれは、かっこうのよい黒の背広をピッタリと身につけ、

の人でした。

「明智君、きみはどうして……。」

「それはあとでお話します。今は、もっとたいせつなことが

した。

あるのです。」

「むろん、美術品の盗難はふせがなくてはならんが。」

「いや、それはもうおそいのです。ごらんなさい。約束の時

間は過ぎました。」

のところをすぎているのです。壁の電気時計を見あげました。いかにも、長針はもう十二時明智のことばに、館長も、総監も、刑事部長もいっせいに

内には、べつに異状もないようだが……。」「おやおや、すると二十面相は、うそをついたわけかな。

館

「ああ、そうです。約束の四時はすぎたのです。あいつ、や

っぱり手出しができなかったのです。」

刑事部長が凱歌をあげるようにさけびました。

ぽも同様です。」「いや、賊は約束を守りました。この博物館は、もうからっ

名探偵の狼藉

のところの警官たちはめくらじゃないんだからね。」物館のまわりには、五十人の警官が配置してあるんだ。ぼく陳列室をずっと見まわってきたばかりなんだぜ。それに、博かいやしないじゃないか。ぼくは、つい今しがた、この目で「え、え、きみは何をいっているんだ。何もぬすまれてなん

警視総監は、明智をにらみつけて、腹だたしげにどなりま

にしらべてみようではありませんか。」は例によって魔法を使いました。なんでしたら、ごいっしょ「ところが、すっかりぬすみだされているのです。二十面相

明智は、しずかに答えました。

りませんか。」がほんとうかどうか、ともかく陳列室へ行ってみようじゃあぞれじゃ、みんなでしらべてみよう。館長、この男のいうの「フーン、きみはたしかにぬすまれたというんだね。よし、「フーン、きみはたしかにぬすまれたというんだね。よし、

も一度しらべてみる気になったのです。 まさか明智がうそをいっているとも思えませんので、総

いりましょう。」 「それがいいでしょう。さあ、北小路先生もごいっしょにま

うながしました。明智は白髪白髯の老館長にニッコリほほえみかけながら、

-87-

路館長の老体をいたわるようにその手を取って、 に本館の陳列場のほうへはいっていきましたが、 そこで、四人は、つれだって館長室を出ると、 先頭に立つ 廊下づたい 明智は北小

ないじゃないか。」 「明智君、きみは夢でも見たんじゃないか。どこにも異状は

のでした。

陳列場にはいるやいなや、 刑事部長がさけびました。

ないようすです。 国宝の仏像がズラッとならんでいて、べつになくなった品も いかにも部長のいうとおり、ガラス張りの陳列棚の中には、

「これですか。」

した。 の顔を見かえしながら、そこに立っていた守衛に声をかけま 明智は、その仏像の陳列棚を指さして、意味ありげに部長

「このガラス戸をひらいてくれたまえ。」

ました。 ま持っていたかぎで、大きなガラス戸を、 警視総監といっしょだものですから、命令に応じて、すぐさ 守衛は、明智小五郎を見知りませんでしたけれど、館長や ガラガラとひらき

ったのです。 すると、そのつぎのしゅんかん、じつに異様なことがおこ

こうのよい腕を、ポキンと折ってしまったではありませんか。 広い陳列棚の中へはいって行ったかと思うと、中でもいちば ん大きい、木彫りの古代仏像に近づき、いきなり、そのかっ ああ、明智探偵は、気でもちがったのでしょうか。彼は、

> ぎへと、たちまちのうちに、片っぱしからとりかえしのつか 棚の、どれもこれも国宝ばかりの五つの仏像を、つぎからつ れ とめるのもわすれて、目を見はっているまに、 同じ陳列

しかもそのすばやいこと、三人の人たちが、あっけにとら

ぬ傷ものにしてしまいました。

るものは指をひきちぎられて、見るもむざんなありさまです。 「明智君、なにをする。おい、いけない。よさんか。」 あるものは腕を折られ、あるものは首をひきちぎられ、あ

こと笑っているのです。 ながして、明智はサッと陳列棚を飛びだすと、また、 んのように老館長のそばへより、その手をにぎって、にこに 総監と刑事部長とが、声をそろえてどなりつけるのを聞き さいぜ

もほどがあるじゃないか。これは博物館の中でもいちばん貴 「おい、明智君いったい、どうしたというんだ。らんぼうに

重な国宝ばかりなんだぞ。」

今にも明智につかみかからんばかりのありさまです。 「ハハハ……。これが国宝だってあなたの目はどこについて まっかになっておこった刑事部長は、両手をふりあげて、

傷口を、よくしらべてください。」

いるんです。よく見てください。今ぼくが折りとった仏像の

つかない、まだなまなましい白い木口が、のぞいていたでは 傷口からは、外見の黒ずんだ古めかしい色あいとは似ても似 に、仏像に近づいて、その傷口をながめまわしました。 明智の確信にみちた口調に、刑事部長は、ハッとしたよう すると、どうでしょう。首をもがれ、手を折られたあとの

れているはずはありません。 ありませんか。奈良時代の彫刻に、こんな新しい材料が使わ



せものとわかったはずです。新しい木で模造品を作って、 造品専門の職人の手にかけさえすれば、わけなくできるので から塗料をぬって古い仏像のように見せかけたのですよ。模 れば、こんな傷口をこしらえてみるまでもなく、ひと目でに 「そうですとも、あなた方に、もう少し美術眼がありさえす 「すると、きみは、この仏像がにせものだというのか。」

明智は、こともなげに説明しました。

立博物館の陳列品が、まっかなにせものだなんて……。」 「北小路さん、これはいったい、どうしたことでしょう。国 警視総監が老館長をなじるようにいいました。

「あきれました。あきれたことです。<u>」</u>

仏像をひと目見ると、さすがにたちまち気づいてさけびまし 家で、その方面の係長をつとめている人でしたが、こわれた はいってきました。その中のひとりは、古代美術鑑定の専門 ろうばいしながら、てれかくしのように答えました。 そこへ、さわぎを聞きつけて、三人の館員があわただしく 明智に手をとられて、ぼうぜんとたたずんでいた老博士が、

ら、まちがいありません。」 うまでは、たしかにほんものがここにおいてあったのですよ。 わたしはきのうの午後、この陳列棚の中へはいったのですか 「アッ、これはみんな模造品だ。しかし、へんですね。きの

にせものとかわったというのだね。へんだな、いったい、こ 80-れはどうしたというのだ。」 「すると、きのうまでほんものだったのが、きょうとつぜん、

ました。 総監がキツネにつままれたような表情で、一同を見まわし

すっかり、からっぽになってしまったということですよ。」 「まだおわかりになりませんか。つまり、この博物館の中は、 明智はこういいながら、向こうがわの別の陳列棚を指さし

「な、なんだって? すると、きみは……。」

ツカツカとその棚の前に近づいて、ガラスに顔をくっつける さいぜんの館員は、明智のことばの意味をさとったのか、 刑事部長が、思わずとんきょうな声をたてました。

そして、たちまちさけびだすのでした。ようにして、中にかけならべた黒ずんだ仏画を凝視しました。

は、みんなにせものです。一つ残らずにせものです。」「アッ、これも、これも、あれも、館長、館長、この中の絵

川耳の長りいばい時ついぶらない、こへつ宮でほかの棚をしらべてくれたまえ。早く、早く。」

に何かわめきながら、気ちがいのように陳列棚から陳列棚へ刑事部長のことばを待つまでもなく、三人の館員は、口々

「にせものです。めぼしい美術品は、どれもこれも、すっかと、のぞきまわりました。

り模造品です。」

だれもかれも、もうまっかになって憤慨しているのです。きには、館員の人数は、十人以上にふえていました。そして、いきましたが、しばらくして、もとの二階へもどってきたとそれから、彼らはころがるように、階下の陳列場へおりて

なんて一つもなかったのです。それぞれ受持のものが、そのというほかはありません。きのうまでは、たしかに、模造品しかし、館長、今もみんなと話したのですが、じつにふしぎりです。貴重品という貴重品は、すっかりにせものです……。「下も同じことです。のこっているのはつまらないものばか

館員は、くやしさに地だんだをふむようにしてさけびましせものにかわってしまったのです。」ちに、大小百何点という美術品が、まるで魔法のように、に点は自信をもって断言しています。それが、たった一日のう

「明智君、われわれはまたしてもやつのために、まんまとやた。

られたらしいね。」

「そうです。博物館は、二十面相のために盗奪されたのです。総監が、沈痛なおももちで名探偵をかえりみました。

なく、口もとに微笑さえうかべているのでした。 大ぜいの中で、明智だけは、少しもとりみだしたところもそれは、さいしょに申しあげたとおりです。」

老館長を、はげますように、しっかりその手をにぎっていまそして、あまりの打撃に、立っている力もないかと見える

種明し

した。

はありませんけれど、それをどうして入れかえたかが問題で化けて観覧に来て、絵図を書いていけば、模造できないことあ、にせもののほうは、まえまえから、美術学生かなんかにあれだけの美術品を、たった一日のあいだに、にせものとす「ですが、わたしどもには、どうもわけがわからないのです。

「きのうの夕方までは、たしかに、みんなほんものだったのようにしきりに小首をかたむけています。(館員は、まるでむずかしい数学の問題にでもぶっつかった)

す。まったくわけがわかりません。」

だね。」 だね。」 「きのうの夕方までは、たしかに、みんなほんものだっ

「それはもう、けっしてまちがいございません。」と、口を総監がたずねますと、館員たちは、確信にみちたようすで、

-9

そろえて答えるのです。

面相一味のものが、ここへしのびこんだのかもしれんね。」 「いや、そんなことは、できるはずがございません。表門も 「すると、おそらくゆうべの夜中あたりに、どうかして二十

どうして持ちこんだり、運びだしたりできるものですか。ま ゅうな見はりの中をくぐって、あのおびただしい美術品を、 三人の宿直員が、ずっとつめきっていたのです。そのげんじ っていてくだすったのです。館内にも、ゆうべは館長さんと 裏門も塀のまわりも、大ぜいのおまわりさんが、徹夜で見は ったく人間わざではできないことです。」

館員は、あくまでいいました。

ですからね。」 いうのじゃ、十日の午後四時なんて予告は、まったく無意味 ものとおきかえておいて、さあ、このとおりぬすみましたと 広言したほど男らしくもなかったですね。あらかじめ、にせ 「わからん、 じつにふしぎだ……。 しかし、 二十面相のやつ、

いではいられませんでした。 刑事部長は、くやしまぎれに、そんなことでも言ってみな

ました。彼は老館長北小路博士と、さも仲よしのように、ず っと、さいぜんから手をにぎりあったままなのです。 「ところが、けっして無意味ではなかったのです。」 明智小五郎が、まるで二十面相を弁護でもするようにいい

うことなんだね。」 「ホウ、無意味でなかったって? それはいったい、どうい

警視総監が、ふしぎそうに名探偵の顔を見て、たずねまし

「あれをごらんください。」

しました。 すると明智は窓に近づいて、博物館の裏手のあき地を指さ

密というのは、あれなのです。」 「ぼくが十二月十日ごろまで、待たなければならなかった秘

日前から、家屋のとりこわしをはじめ、もうほとんど、とり館員宿直室が建っていたのですが、それが不用になって、数 こわしも終わって、古材木や、 っちにつみあげてあるのです。 そのあき地には、博物館創立当時からの、古い日本建 、屋根がわらなどが、あっちこ っての

件と、いったい、なんの関係があるんです。」 「古家をとりこわしたんだね。しかし、あれと二十面相の事

刑事部長は、びっくりしたように明智を見ました。

をしていた警官をつれて、いそいでここへ来てくれるように、 お伝えくださいませんか。」 お手数ですが、中にいる中村警部に、きょう昼ごろ裏門の番 「どんな関係があるか、じきわかりますよ……。どなたか、

がら、大急ぎで階下へおりていきましたが、まもなく中村捜 査係長とひとりの警官をともなって帰ってきました。 明智のさしずに、館員のひとりが、何かわけがわからぬな

「きみが、昼ごろ裏門のところにいた方ですか。」

から、ひどくあらたまって、直立不動の姿勢で、「そうです。」 明智がさっそくたずねますと、警官は総監の前だものです

と答えました。

が一台、裏門を出ていくのを見たでしょう。」 「では、 きょう正午から一時ごろまでのあいだに、 トラック

古材木をつんだトラックのことではありませんか。」 「はあ、おたずねになっているのは、あのとりこわし家屋の

「そうです。」

「それならば、たしかに通りました。」

顔つきです。 警官は、あの古材木がどうしたんです、 といわぬばかりの

のですよ。」 あのトラックには、盗難の美術品がぜんぶつみこんであった す。うわべは古材木ばかりのように見えていて、そのじつ、 「みなさんおわかりになりましたか。これが賊の魔法の種で

「すると、とりこわしの人夫の中に賊の手下がまじっていた 明智は一同を見まわして、おどろくべき種明しをしました。

というのですか。」

手下だったのかもしれません。二十面相は早くから万端の準 「そうです。まじっていたのではなくて、人夫ぜんぶが賊の 中村係長は、目をパチパチさせて聞きかえしました。

また午後四時というのは、ほんものの美術品がちゃんと賊の 日という日づけは、こういうところから割りだされたのです。 木運びだしの日にあたるじゃありませんか。予告の十二月十 かっていたはずです。そうすれば、十日ごろはちょうど古材 ね。その着手期日は、三月も四月もまえから、関係者にはわ のとりこわしは、たしか十二月五日からはじまったのでした 備をととのえて、この絶好の機会を待っていたのです。 て陳列室へはいることができます。夜はすっかり出入り口が

巣くつに運ばれてしまって、もうにせものがわかってもさし つかえないという時間を意味したのです。」

なんという用意周到な計画だったでしょう。二十面

相の魔術には、いつのときも、一般の人の思いもおよばない しかけが、ちゃんと用意してあるのです。

たとしても、まだ賊が、どうして陳列室へはいったか、 のまに、ほんものとにせものとおきかえたかというなぞは、

「しかし明智君、たとえ、そんな方法で運びだすことはでき

解けませんね。」 刑事部長が明智のことばを信じかねるようにいうのです。

「おきかえは、きのうの夜ふけにやりました。」 明智は、 何もかも知りぬいているような口調で語りつづけ

ます。

巻いて、仏像は分解して手、足、首、胴とべつべつにむしろ に、にせものの美術品を少しずつ運びいれました。絵は細く 「賊の部下が化けた人夫たちは、毎日ここへ仕事へ来るとき

警戒しているのですから、持ちこむものに注意なんかしませ 包みにして、大工道具といっしょに持ちこめば、うたがわれ んからね。そして、贋造品はぜんぶ、古材木の山におおいか る気づかいはありません。みな、 ぬすみだされることばかり

ち何人かが、こっそり構内にのこっていたとしても、どうし は、みな夕方帰ってしまうじゃありませんか。たとえそのう くされて、ゆうべの夜ふけを待っていたのです。」 「だが、それをだれが陳列室へおきかえたのです。人夫たち

ぬように、あのたくさんの品物をおきかえるなんて、まった員が、一睡もしないで見はっていました。その人たちに知れとざされてしまうのです。館内には、館長さんや三人の宿直

「それにはまた、じつに大胆不敵な手段が、用意してあった館員のひとりが、じつにもっともな質問をしました。

く不可能じゃありませんか。」

いもそろって、まだ帰宅していないというのは、少しおかし自宅へ帰ったのでしょう。ひとつその三人の自宅へ電話をかけて、主人が帰ったかどうか、たしかめてみてください。」は、だれも電話をもっていませんでしたが、それぞれのです。ゆうべのでしょう。ひとつその三人の自宅へ電話をかの家庭では、こんな事件のさいですから、きょうも、とめおかれているのだろうと、安心していたというのです。ゆうべ以きったのです。ゆうべの三人の宿直員というのは、けさ、それぞれのです。ゆうべの三人の宿直員というのは、けさ、それぞれのです。ゆうべの三人の宿直員というのは、けさ、それぞれのです。ゆうべの三人の宿直員というのは、けさ、それぞれのです。ゆうべの三人の宿直員というのは、別さ、それぞれのです。ゆうべの三人の宿直員というのは、別さ、それぞれのです。ゆうべの三人の宿直員というのは、別さ、日間にてあった

明智は、また一同の顔をグルッと見まわしておいて、こと帰らなかったのか、この意味がおわかりですか。」まさか遊びまわっているわけではありますまい。なぜ三人が

いじゃありませんか。ゆうべ徹夜をした、つかれたからだで、

「ほかでもありません。三人は、二十面相一味のために誘か

いされたのです。」

「え、誘かいされた? それはいつのことです。」

館員がさけびました。

「、、、、)」),「ぶ」のこうがあっ、),ぶ……に宅を出たところをです。」「きのうの夕方、三人がそれぞれ夜勤をつとめるために、自

いた三人は……。」 「え、え、きのうの夕方ですって? じゃあ、ゆうべここに

おしこめておいて、そのかわりに賊の部下が専勿館の宿直を「二十面相の部下でした。ほんとうの宿直員は賊の巣くつへ

て、じつに造作もないことだったのです。
番をつとめたんですから、にせものの美術品のおきかえなんつとめたのです。なんてわけのない話でしょう。賊が見はりたがしこめておいて、そのかわりに賊の部下が博物館の宿直を

やすとやってのけるのです。」できそうもないことを、ちょっとした頭のはたらきで、やすみなさん、これが二十面相のやり口ですよ。人間わざでは

ほど、ギュッとにぎりしめました。て、ずっと手をつないでいた館長北小路老博士の手首を痛い明智探偵は、二十面相の頭のよさをほめあげるようにいっ

しがうかつじゃった。」 「ウーン、あれが賊の手下だったのか。うかつじゃった。わ

相なら知らぬこと、手下の三人が、館長にもわからないほどをどうして見やぶることができなかったのでしょう。二十面ろしい憤怒の形。相です。しかし、老博士は、三人のにせ者た。両眼がつりあがって、顔がまっさおになって、見るも恐老博士は白髯をふるわせて、さもくやしそうにうめきまし

じょうずに変装していたなんて、考えられないことです。北

-6

んて、少しおかしくはないでしょうか。 小路博士ともあろう人が、そんなにやすやすとだまされるな

怪盗捕縛

一だが、明智君。

警視総監は、説明が終わるのを待ちかまえていたように、

明智探偵にたずねました。

るのかね。」の想像なのかね。それとも、何かたしかなこんきょでもあめの想像なのかね。それとも、何かたしかなこんきょでもあ術品盗奪の順序をくわしく説明されたが、それはみんな、き「きみはまるで、きみ自身が二十面相ででもあるように、美

いてきたばかりなのです。」相の部下から、いっさいの秘密を聞き知ったのです。今、聞「もちろん、想像ではありません。ぼくはこの耳で、二十面

- さすがの警見総監も、この不意うちこよ、どぎもをねかれか。いったい、どこで? - どうして?」「え、え、なんだって? - きみは二十面相の部下に会ったの「え、え、なんだって? - きみは二十面相の部下に会ったの

す。

た。かえって賊の味方になって、ある人物の誘かいを手つだにすぎなかったのです。ぼくは誘かいなんかされませんでしら。ぼくの家庭でも世間でもそう考え、新聞もそう書いておう。ぼくの家庭でも世間でもそう考え、新聞もそう書いておにすが二十面相のかいれがで会いました。総監閣下、あなたは、「二十面相のかいれがで会いました。総監閣下、あなたは、「二十面相のかいれがで会いました。総監閣下、あなたは、「二十面相のかいれがで会いました。とぎもをぬかれてしまいました。

ってやったほどです。

昨年のことですが、ぼくはある日ひとりのふしぎな弟子入

ぼくの替え玉として、やとってほしいというのです。です。つまり、その男はぼくの影武者として、何かの場合のたまで、このぼくと寸分ちがわないくらいよく似ていたから志願者は、背かっこうから、顔つきから、頭の毛のちぢれかかと怪しんだほどです。なぜかと申しますと、その弟子入りうにおどろきました。目の前に大きな鏡が立ったのではないり志願者の訪問を受けました。ぼくはその男を見て、ひじょり志願者の訪問を受けました。ぼくはその男を見て、ひじょ

のです。ところへ住まわせておきましたが、それがこんど役にたったところへ住まわせておきましたが、それがこんど役にたったぼくは、だれにも知らせず、その男をやといいれて、ある

のところで、自分の替え玉とちょっと格闘をして見せたので赤井寅三というものに化けて、明智事務所をたずね、ポーチくの事務所へ帰らせ、しばらくしてから、ぼく自身は浮浪人り服装をとりかえて、ぼくになりすましたその男を、先にぼぼくはあの日外出して、その男のかぐれがへ行き、すっか

とう賊の巣くつにはいることができました。は、ぼくの替え玉を誘かいするお手つだいをしたうえ、とう部下になれとすすめてくれたのです。そういうわけで、ぼくた。そして、それほど明智にうらみがあるなら、二十面相の賊の部下がそのようすを見て、すっかりぼくを信用しまし

間入りをしたその日から、ぼくを家の中の仕事ばかりに使い、しかし、二十面相のやつは、なかなかゆだんがなくて、仲

品をぬすみだす手段など、ぼくには少しもうちあけてくれな かったのです。 一歩も外へ出してくれませんでした。むろん、博物館の美術

重な美術品をかかえて、ドカドカとおりてきました。むろんて、人夫の服装をしたたくさんの部下のものが、手に手に貴ると、午後二時ごろ、賊のかぐれがの地下室の入り口があいある決心をして、午後になるのを待ちかまえていました。すそして、とうとう、きょうになってしまいました。ぼくは

ほどもしますと、ひとりたおれ、ふたりたおれ、ついにはのちゅうになって酒もりをはじめたのですが、やがて、三十分した。そこで部下たちは、大事業の成功したうれしさに、むっしょに残っていた部下と、ぜんぶのものに祝杯をすすめまぼくは地下室にるす番をしているあいだに、酒、さかなの博物館の盗難品です。

めその酒の中へまぜておいたのです。んか。ぼくは賊の薬品室から麻酔剤をとりだして、あらかじなぜかとおっしゃるのですか。わかっているではありませ

しょう。

こらず、気をうしなってたおれてしまいました。

た。室にかくしてあるぜんぶの盗難品の保管をおねがいしまし室にかくしてあるぜんぶの盗難品の保管をおねがいしましへかけつけ、事情を話して、二十面相の部下の逮捕と、地下

それから、ぼくはひとりそこをぬけだして、付近の警察署

した。国立博物館の美術品も、あの気のどくな日下部老人のお喜びください。盗難品は完全にとりもどすことができま

つきとめ、すべての盗難品をとりかえし、あまたの悪人をとの前に広言したとおり、たったひとりの力で、賊の巣くつをた。ああ、名探偵はその名にそむきませんでした。彼は人々た、すべての品物は、すっかりもとの所有者の手に返ります。」美術城の宝物も、そのほか、二十面相が今までにぬすみため

きみを見あやまっていたようだ。わしからあつくお礼を申し「明智君、よくやった。よくやった。わしはこれまで、少しらえたのです。

にぶりょうに。警視総監は、いきなり名探偵のそばへよって、その左手を

ます。」

明智はどうしてそんなに老博士の手ばかりにぎっているのでと、しっかりにぎりあわされていたからです。みょうですね。がっていたからです。その右手は、いまだに老博物館長の手なぜ左手をにぎったのでしょう。それは明智の右手がふさにぎりました。

まいね。」 まか首領をとりにがしたのではある名を出さなかったが、まさか首領をとりにがしたのではあるはさいぜんから部下のことばかりいって、一度も二十面相の「で、二十面相のやつも、その麻酔薬を飲んだのかね。きみ

「いや、二十面相は地下室へは、帰ってこなかったよ。しかました。 中村捜査係長が、ふとそれに気づいて、心配らしくたずね

し、ぼくは、あいつもちゃんととらえている。」

_

明智はにこにこと、例の人をひきつける笑い顔で答えまし

監をはじめ、じっと名探偵の顔を見つめて、返事を待ちかま 中村警部が、性。急にたずねました。ほかの人たちも、総「どこにいるんだ。いったいどこでとらえたんだ。」

「ここでつかまえたのさ。」

えています。

明智は落ちつきはらって答えました。

「ここで? じゃあ、 今はどこにいるんだ。」

「ここにいるよ。」

ああ、明智は何をいおうとしているのでしょう。

「ぼくは二十面相のことをいっているんだぜ。」

警部が、けげん顔で聞きかえしました。

「ぼくも二十面相のことをいっているのさ。」

明智が、おうむがえしに答えました。

知っている人ばかりじゃないか。それともきみは、この部屋 の中に、二十面相がかくれているとでもいうのかね。」 「なぞみたいないい方はよしたまえ。ここには、われわれが

に四人のお客さまが待たせてあるんですが、その人たちをこ か……。どなたか、たびたびごめんどうですが、下の応接間 「まあ、そうだよ。ひとつ、そのしょうこをお目にかけよう

明智は、またまた意外なことをいいだすのです。 館員のひとりが、急いで下へおりていきました。そして、

こへ呼んでくださいませんか。」

待つほどもなく、階段に大ぜいの足音がして、四人のお客さ

まという人々が、一同の前に立ちあらわれました。 それを見ますと、一座の人たちは、あまりのおどろきに、

「アッ。」とさけび声をたてないではいられませんでした。 まず四人の先頭に立つ白髪白髯の老紳士をごらんなさい。

それは、まぎれもない北小路文学博士だったではありません

くえ不明になっていた人びとです。 つづく三人は、いずれも博物館員で、 きのうの夕方からゆ

「この方々は、ぼくが二十面相のかくれがから救いだしてき

たのですよ。」

明智が説明しました。 しかし、これはまあ、どうしたというのでしょう。博物館

長の北小路博士がふたりになったではありませんか。

りは、さいぜんからズッと明智に手をとられていた北小路博 ひとりは今、階下からあがってきた北小路博士、もうひと

顔と顔を見あわせて、にらみあいました。 服装から顔形まで寸分ちがわない、ふたりの老博士が、

が、おわかりになりましたか。」 明智探偵はさけぶやいなや、いままで親切らしくにぎって

「みなさん、二十面相が、どんなに変装の名人かということ

みふせたかと思うと、白髪のかつらと、白いつけひげとを、 のは、黒々とした髪の毛と、若々しいなめらかな顔でした。 いた老人の手を、いきなりうしろにねじあげて、床の上に組 なんなくむしりとってしまいました。その下からあらわれた

ました。 いうまでもなく、これこそ正真正銘の二十面相その人であり

首をにぎりつづけていたんだからね。手首がしびれやしなかいや、それよりも、ぼくの手が、手錠のかわりに、きみの手ようにも、この大ぜいの前では逃げだすわけにもいかない。密が、みるみるばくろしていくのを、じっとがまんして、何密が、みるみはずいぶん苦しかっただろう。目の前できみの秘「ハハハ……、二十面相君、ご苦労さまだったねえ。さいぜ

ました。れむように見おろしながら、皮肉ななぐさめのことばをかけれむように見おろしながら、皮肉ななぐさめのことばをかけ明智は、無言のままうなだれている二十面相を、さもあわ

めすぎたかもしれないね。」

ったかい。まあ、かんべんしたまえ、ぼくは少しきみをいじ

くてもすんだのでしょうに。サッサと引きあげてしまえば、こんなはずかしい目に会わなしてしまったのですから、三人の替え玉の館員といっしょに、逃げださなかったのでしょう。ゆうべのうちに、目的ははたそれにしても、館長に化けた二十面相は、なぜもっと早く

館長自身がちょうど午後四時に盗難に気づいたふうをよそお物の美術品にびっくりするところが見物したかったのです。二十面相らしいやり口なのです。彼は、警察の人たちがにせしないで、ずうずうしく居のこっていたところが、いかにもくてもすんだのでしょうに

をえんじてしまったのでした。も、その冒険がすぎて、ついに、とりかえしのつかない失策ません。いかにも二十面相らしい冒険ではありませんか。でって、みんなをアッといわせるもくろみだったにちがいあり

「閣下、では怪盗二十面相をおひきわたしいたします。」さて明智探偵は、キッと警視総監のほうに向きなおって、

ナーの同あまりに意外な場面に、ただもうあっけにとられて、と、しかつめらしくいって、一礼しました。 「閣下」では怪盗二十面相をおひきわたしいたします。」

手ぎわで、たちまち賊をうしろ手にいましめてしまいました。進みより、用意の捕縄をとりだしたかとみますと、みごとなとりなおした中村捜査係長は、ツカツカと二十面相のそばへ身動きもせず立ちすくんでいましたが、やがて、ハッと気を名探偵のすばらしい手がらをほめたたえることもわすれて、

ができた。こんなうれしいことはないよ。」なる二十面相に、こんどこそ、ほんとうになわをかけること「明智君、ありがとう。きみのおかげで、ぼくはうらみかさ

中村係長の目には、感謝の涙が光っていました。

いそと階段をおりていくのでした。かたわらにたたずんでいた、さいぜんの警官とともに、いそ

係長があらわれたのを見ますと、先をあらそって、そのそば今しも建物の正面入り口から、二十面相のなわじりをとった博物館の表門には、十数名の警官がむらがっていました。

-

へかけよりました。

いつをつかまえたぞ。これが二十面相の首領だ。」 「諸君、喜んでくれたまえ。明智君の尽 力で、とうとうこ

係長がほこらしげに報告しますと、警官たちのあいだに、

ドッと、ときの声があがりました。

ません。 なく、さも神妙にうなだれたまま、顔をあげる元気さえあり きと観念したのか、いつものずうずうしい笑顔を見せる力も 二十面相はみじめでした。さすがの怪盗もいよいよ運のつ

出ました。門の外は公園の森のような木立ちです。その木立 ちの向こうに、二台の警察自動車が見えます。 それから、一同、賊をまんなかに行列をつくって、 表門を

「おい、だれかあの車を一台、ここへ呼んでくれたまえ。」

そそがれます。 ました。一同の視線がそのあとを追って、はるかの自動車に 係長の命令に、ひとりの警官が、警棒をにぎってかけだし

中村係長も、つい自動車のほうへ気をとられていました。 いっせつな、ふしぎに人々の目が賊をはなれたのです。賊 警官たちは賊の神妙なようすに安心しきっていたのです。

にとっては絶好の機会でした。

係長のにぎっていたなわじりを、パッとふりはなしました。 「ウム、待てッ。」 二十面相は、歯を食いしばって、満身の力をこめて、中村

ルほど向こうを、矢のように走っていました。うしろ手にし

係長がさけんで立ちなおったときには、

賊はもう十メート

ばられたままの奇妙な姿が、今にもころがりそうなかっこう で森の中へとんでいきます。

が、立ちどまって、このようすをながめていました。 森の入り口に、散歩の帰りらしい十人ほどの、小学生たち

と思いましたが、森へ逃げこむには、そこを通らぬわけには いきません。 二十面相は走りながら、じゃまっけな小僧どもがいるわい

見たら、おそれをなして逃げだすにきまっている。もし逃げ なあに、たかのしれた子どもたち、おれのおそろしい顔を

突進しました。 なかったら、蹴ちらして通るまでだ。 賊はとっさに思案して、かまわず小学生のむれに向かって

生たちは、逃げだすどころか、ワッとさけんで、賊のほうへ ところが、二十面相のおもわくはガラリとはずれて、小学

何かのときの手助けをしようと、手ぐすねひいて待ちかまえ 少年たちはもう長いあいだ、博物館のまわりを歩きまわって、 ていたのでした。 小林芳雄君を団長にいただく、あの少年探偵団でありました。 とびかかってきたではありませんか。 読者諸君は、もうおわかりでしょう。この小学生たちは、

手の不自由な相手を、たちまちそこへころがしてしまいまし れ、つぎはだれと、みるみる、賊の上に折りかさなって、両 にとびついていきました。つづいて羽柴壮二少年、つぎはだ まず先頭の小林少年が二十面相を目がけて、 鉄砲玉のよう

「小林団長、ばんざーい。」

ひったてて、ちょうどそこへやってきた警察自動車のほうへの警官と力をあわせ、こんどこそとり逃がさぬように、賊をかけつけてきた中村係長が少年たちにお礼をいって、部下「ああ、ありがとう、きみたちは勇敢だねえ。」

「おお、小林君。」
「おお、小林君。」
けび声をたてて、そのそばへかけよりました。
株少年は目早く、先生のぶじな姿を見つけますと、驚喜のさました。さわぎを知って、かけだしてきた明智探偵です。小まのとき、門内から、黒い背広のひとりの紳士があらわれ

つれていきました。

あっているのです。たのです。そして、おたがいのぶじを喜び、苦労をねぎらいと弟子とは、力をあわせて、ついに怪盗逮捕の目的をたっしほこらしい光景でした。この、うらやましいほど親密な先生けだしてきた小林君を、その中にだきしめました。美しい、明智探偵も、思わず少年の名を呼んで、両手をひろげ、か

した。

立ちならぶ警官たちも、この美しい光景にうたれて、にこれた。

「明智先生、ばんざーい。」